

天使たちの戦記　～歌
うように踊るように神
を殺す～

おゆ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無慈悲な神は過去幾度も人間界を「修正」するための大災害をもたらしてきた

神と人間界を結ぶ天使は長きに渡りそれを見続け、心を痛めた

天使の中でも最上級の熾天使四人、ラファエル、ガブリエル、ミカエル、ウリエルはついに立ち上がり、神に戦いを挑む

だが圧倒的な力の差の前に敗れ去った

そして失意の中、妙なものを見つけ、話は思わぬ方向へころがり出す！

(本作品はVチューバー杯参加の短編として書かれましたが、Vチューバー要素が極小、そして長編化に伴い改題しました)

目次

| | | |
|----------|-------------|-----|
| 第一話 | 反逆するは我ら四人…… | だ |
| けじゃなかった! | — | 1 |
| 第二話 | 異能と姉様 | 19 |
| 第三話 | 慟哭の天使 | 32 |
| 第四話 | 神の真相 | 43 |
| 第五話 | 突破口 | 52 |
| 第六話 | そして歩み出す | 63 |
| 第七話 | 人間界へ | 72 |
| 第八話 | 剣のライバル | 82 |
| 第九話 | 微妙な異能 | 93 |
| 第十話 | 一人の生徒 | 103 |
| 第十一話 | ダメかもしれない | 112 |

| | | |
|-------|--------|-----|
| 第十二話 | 選手交代 | 121 |
| 第十三話 | 探索 | 130 |
| 第十四話 | とても残念 | 140 |
| 第十五話 | 魔界城攻防戦 | 149 |
| 第十六話 | 天界の異能 | 159 |
| 第十七話 | 出番 | 168 |
| 第十八話 | 正面戦線 | 179 |
| 第十九話 | さらば友よ | 188 |
| 第二十話 | 涙を糧にして | 198 |
| 第二十一話 | 総員、突撃! | 206 |
| 第二十二話 | 決着 | 216 |
| 第二十三話 | 何者 | 225 |
| 第二十四話 | 救世主 | 235 |

| | | | |
|-------|-----|-----------|-----|
| 最終話 | 319 | そして僕は | 327 |
| 最終前話 | | 微笑んでサヨナラを | |
| 第三十三話 | | 大いなる慈しみ | 311 |
| 第三十二話 | | 最後の秘策 | 304 |
| 第三十一話 | | 問題はない! | 294 |
| 第三十話 | | 戻れ、友よ | 284 |
| 第二十九話 | | へっぽこコンビ | 276 |
| 第二十八話 | | 謎の要塞 | 267 |
| 第二十七話 | | 決戦の地へ | 259 |
| 第二十六話 | | 神を殺す槍 | 251 |
| 第二十五話 | | 探検隊 | 243 |

第一話 反逆するは我ら四人…… だけじゃなかった

！

敗北した！

我々は率直に認めねばならない。

そうしないと明日に繋げることはできない。

神への反旗を翻した戦いは圧倒的に敗けたのだ。

どうしてだろう。

時間をかけ入念に戦場を設定し、準備を整えた。

それでも力の差は歴然だった。

神を殺す、それは不可能なのか……

いや、不可能と思ってしまうはその時点で不可能になる。

これからも戦い続けるためにはちなりとも無理と考えてしまっってはならない。

まだ終わりではなく、今回の戦いを糧として前に進むしかない。

それは分かっているのだが…… 糧にしようがないほどだったのだ。神にたつたの一太刀も浴びせることもできず撤退を余儀なくされ、何にもなりはしなかった。神を取り巻く軍勢を突破することさえできなかった。

「ラファエル、お主は考えすぎなのじゃ。戦闘指揮官は考えすぎると勘が鈍るでの」

「…… そうかもしれない。わたしの勘はあの時冴えてなかった」

「そんな意味で言うたんではないぞ。今の話じゃ。お主の憔悴は見ておられぬ。妾だけではなく、ミカエルやウリエルも心配しておる。分からんか」

「知っているが…… 本当に面目ない、ガブリエル」

「お主のせいではない。気に病むでないと言うておろうに」

わたしを心配してくれるガブリエルの気持ちの方が分かり過ぎるほど分かる。

ぎりぎり心を折られていないのは、こんな優しい仲間たちのおかげだ。

しかし先の戦いを振り返り、気持ちが悪くなるのを止めることはできない……

わたしはラファエル。

九位階に分けられている天使の最上位に位置する熾セ天使ラフ、その一人になる。

他には今も声をかけてくれたガブリエル、そしてウリエル、ミカエルがいる。熾天使の位階にいるのはこのたった四人だ。

熾天使は天界においてそれぞれ微妙に役割が違うのだが、わたしは個の力でガブリエルなどに及ばない分、集団戦闘の指揮官を常に担ってきた。そしてかつて幾度も天界に勝利をもたらしてきたのだ。

それでこの反逆の戦いを指揮したのだが惨敗した。

敵である神の軍勢は御使い、つまり仲間であつたはずの天使たちだ。それは千にも及ぶ。

そこへ我ら四人の熾天使たち、それに加えて味方してくれるザドキエルなど少数の天使、八十人でもって挑んだ！

正直言えば、我ら熾天使は天使の中では冠絶した力を誇る。

立派な六枚羽を持ち、しかも燃え盛る炎の羽だ。

こんな少数といえど向こうの数の暴風を突破し、神と直接戦うことはできると信じていた。

だがそれはただの奢りだった……

実際に戦いが始まれば、二枚羽しかない能天使ゴテスタイや権天使プリンシバルたちの集団プレーの前に抑え

込まれてしまったのだ。

戦いは眠ることもなく疲れも知らない天使同士、三日三晩続いた。

ガブリエルの雷電が戦場を貫き、ミカエルの炎輪が禍々しく照らし出した。わたしの剣戟もそこかしこを走り、ウリエルの作る幻影が広く覆った。

それら必殺のはずの攻撃、しかし下級天使の数百重ねられた防御には通じなかったのだ。相手が天使でも決して手を抜いたわけでないのに。

結果、乾坤一擲の突撃も阻まれ、かえってウリエルが負傷、再度、再々度の突撃でガブリエルまでも負傷した。この段階に至っては敗走せざるを得なかった。

それらの負傷は数十年かけて癒えたのだが、殿を務めて殊の外大きい負傷を受けてしまったザドキエルだけは回復せず、そのまま存在が溶けて消えてしまった。

最後のザドキエルの微笑みと言葉が忘れられない。

「しつかりしろ! ザドキエル。気を確かに持てば傷など治る」

「いいえ、ここまです。もう分かっています」

「そんなことはない! そんなことはないぞ…… 消えるな、ザドキエル」

「熾天使ラファエル、そんな顔をしないで下さい。私はあなたの配下でいられたことがとても嬉しいのです。ここで消えるのを不幸だなんて思いません」

「そう言ってくれるのか……」

「もちろんです。でも、一つだけ言えば、あの神を倒すのを見られなかったのだけは残念です……」

「それならばわたしの言葉を信じてくれ。神を倒す！ あの冷徹な審判者を倒し、この世を守ってやる。必ずだ」

それを聞いてザドキエルは目を閉じ、微粒子となつて空に舞い上がり、消えた。

天使の最期はこうなる。

わたしは約束を忘れていない。

人一倍この世界を愛していたザドキエルのためにも約束を忘れるわけにいかない。

神

それは神恩如海と言われるように全ての生けるものを愛し、慈しむと言われている。そして神威如嶽、悪しきものに対してだけは威をもつて臨むとされている。

しかしそれは真実ではない！

我らは気付いたのだ。

人と天界を結ぶことに従事し、人の世を見続けさせられていた我ら熾天使だからこそ

本当のことが分かった。

神は自分の理想の範疇しか認めない。

そこからはみ出した者たちを決して赦さない。

それどころか情け容赦なく踏みにじり、残酷なまでに力で押し潰す。

それはいきなり起こされるのが普通である。地を動かし、星を墜とし、大水で満たし、人々のささやかな日常も小さな幸せも一気に抹殺していく。その哀れな命乞いの声も一切聞くことなく。

そして我ら熾天使の意見も懇願も、神の意志を微かにでも変えられたことなどない。

神による滅亡の大災害、記録に残っているのはほんの一角に過ぎず、実際は幾度繰り返されたのだろう。

最初からそうなることを見越して人を増やしたとしか考えられない。

神はかくも無慈悲なのだ。

しかしながらそれだけで我らが反抗に及んだのではない。

ここ数百年の人々の進歩の方向は、たぶん神の意に沿っていないのだ。

だから、神はおそらく近いうちに滅ぼしにかかる!

そこを生き残れる人々ほどのくらいか。半分か。それとも一割か。あるいは千分の一か。もしかすると全てを殺し尽くし、やり直すのか。慈悲などあり得ない。

これは確信だ。

だからこそ我ら熾天使は人の世を守るため、蜂起せざるを得ないのだ。絶望的な戦いであつても万が一の可能性に賭ける。

もちろん他の天使たちへも説得を試みている。しかし当然のことと言ふべきか、それを全く理解してくれなかった。

「アサエル、バラキエル、分かつてはくれないか。神のすることをよく見たら分かるはずだ。せめて邪魔はしないでほしい」

「ラファエル…… 気がおかしくなつたのか？ 反逆は討伐する、それしかあるまい」
「済みません。熾天使のお言葉とはいえ反逆に加わることなど…… 絶対無理です」

有り難いことに、それまで人との交流を深く持つていたザドキエルたちだけは別だった。

我らの意図を分かつて味方してくれた。結果はあまりに悲しいことに、かくの如し
……

「ボク、これ見て気付いたんだけど……」

「ん、ウリエル、何だそれは」

ある日のことだった。

ウリエルがわたしに妙なものを見せてきた。今の人の世で流行っていることのようにだ。

「何って、VTuberって言って、画面を使って面白いことをみんなに伝えるんだ」

「ぶいちゆう婆、へんてこなものだな」

「…………… いや説明は後にするよ。ラファエルが知ってるわけなかったね。それよりもボクが言いたいのは」

「あー、これ『ヘルヘルちゃん』やろ！ めっちゃ人気あるで！ 何や、ウリエルも見たったんかい」

わたしとウリエルの会話に横からミカエルが口を出してきた。

首を突っ込んで画面を見ては、そこに出ているキャラの名を叫んでいる。

「どうやらそれを知らないのはわたしだけのようだ。」

「ミカエル、じゃあ見てるのになれに気がつかなかったの？ ボクは一分で分かったよ」

「あれって何や？ ヘルヘルちゃんがおもしろいいうことか。すぐ分かるやん。うちをアホ扱いせんといて」

「……………」

「冗談や冗談。何が言いたいねん、ウリエル」

「『氣』を感じない？ このキャラの奥からうつすら感じる。これは…… 間違いない。天使だよ」

「は!?! ててて、天使イ!!」

ミカエルもわたしも驚いた！ いきなり何を言う。

ただのおちやらけた画像にしか見えないのだが、このキャラを作っている者は天使だと！

いやしかし、そんな。

「おかしなこと言うなや。天界がこないなことをするかいな。ウリエル、それは絶対あり得へんで」

「ウリエル、残念だがわたしもミカエルに同意見だ。こんな遊びのようなことをする意味が分からない。天界は常に力を行使するもので、小細工をするとはとうてい思えない」

「ノンノン、二人とも早とちり。ボクが思うにこれはたぶん天界と関係ない。だって、匂いがするんだ。すつごく懐かしいような……」

「何のことを言ってる。懐かしいようなんて」

「ボクらの姉様の匂い」

「あ、姉様!? まさか!!」

今度こそ驚いた!

我々熾天使の姉様といえは一人しかいない。

それはかつての天使長ルシファー!

全ての天使の上に立ち、その力と慈愛で皆の憧れだった。

ルシファーの姉様は全員に優しかったが、特にウリエルを可愛がり、嬉しさと反発でウリエルがボクっ子になってしまったのはそのせいだ。

だが遙か昔、なぜか姉様は神に対し反逆し、単身挑んだ。まさに寝耳に水だった。

そして姉様は敗れ、魔界まで逃げていく。しかし尚も反逆を止めることはなく、魔界の配下を度々天界に送っては戦いを仕掛けていく。だからわたしは天界の安寧を守るべく迎撃し続けたものだ。

どうして姉様が神に反逆したのか、理由を問いたですチャンスもなく……

いやわたしの怠慢だ。どんなことをしても理由を聞いておくべきだったのに。

「何やて！ 仮にそうやとして、姉様はこんなんでは何をしたいねん」

「そこまで分からないよ。とにかく見れば」

そしてわたしとウリエル、ミカエルでその画面を見る。

「ひやつほー☆ ヘルヘルちゃんでーす！ 悪い子いねがー！ 包丁で切っちゃうよー！」

『それはご褒美です』『そっち住み？』『褒めがかわいい！』『今日は何してくれるの』

「今日はお友達を紹介しまーす！ マルちゃんと、ロトちゃんと、ブーちゃんでーす!!」
『どれも可愛い！』『ブーちゃんて何だよ 名字は高木か』『いきなり増えてうれしい』『背景に変な植物とかないか』

「紹介に預かりましたブーちゃんでーす！ とりあえず東のほう半分預かってます！ イエーイとか？」

意図が全く読めない。

出てきたのはどいつもこいつも揃って馬鹿みたいなのだが、とにかく人気を得るために腐心しているのは分かった。

まあスタートしたてなのだろうから影響力を及ぼすためにはひとまず知名度が必要、

ということかもしれない。

内容は取り立てて注意するようなものはなく、とりあえず数十分の視聴を終えた。

「…… やっぱり姉様やな。よう考えたら昔から姉様は普段はおとなしいが、ハジける
ととことん行くタイプやったわ。背景もなんか魔界っぽくてそのまんまやないか」

「それだけじゃない。今日のお友達で出てきたのって……」

「何や、あのテンション高めのアホどもは」

「たぶんマルコキアスとアシユタロトと、ベルゼバブだよ」

な、何だと！ その名だったら皆が毛の逆立つレベルで知っている。

魔界の軍団長マルコキアスだったのか！

過去幾度も矛を交えたが、我ら天使の軍勢と互角に渡り合ったマルコキアスとは……

その剛の力は熾天使にも匹敵し、どんな剣戟もへし折る。正直一対一では戦いたくない相手だ。

そして姉様の側近にして参謀、魔界公爵アシユタロト……

その冷徹な戦術は脅威だ。表に出て戦うということはないが、姉様を助け、また姉様の手足となって働く。魔界になくてはならない謎の将である。

それに何といってもベルゼバブ！

奴こそ真の実力者。

広く魔界の東方を統べ、その卓越した魔力は姉様にさえ匹敵すると言われた蠅の王…… 全てを腐らし、溶かすという異能を持つという。

これはもう間違いない。

姉様は何かをしようとしている！

まともに人間界で暴れば国が秒で消し飛ぶくらいの魔界でもトップレベルの者たちを使い、V T u b e r という方法で。

「…… これは確かめるしかないようじゃ。皆、覚悟はできておろうか」

ふいに自分たち三人に声がかけられた。

ガブリエルまでここに来ていたのだ。

「覚悟って、何の覚悟や？ ガブリエル」

「決まっておろうミカエル！ 姉様に近づいて真意を問いたです。しかも天界に動きを

悟られてはならぬ」

「それはそうやろうけど、どうするん」

「分からののか！ V T u b e r に近づくにはコラボしかないわ。つまりこつちも V T

uberになって、有名になり、コラボを持ちかけるといわけじや」
「…… は、はあ!? こっちつて、うちらもVTubeに!」

話の雲行きがめちやくちや怪しくなってきた。

ガブリエルが言うのは我らまでVTubeになるということだ!

しかもただやればよいというものではなく、人気を得なくてはならない。

「ボ、ボクは、そういうのには向いてないかな、なんて」

「なんやそらウリエル。逃がさへんで。やるなら皆んなでやるのや」

「ミカエル、ひよつとしてやりたいんじゃないの?」

「そんなことないで。心外や」

「いや絶対そうでしょ」

わたしには尻込みするウリエルの方の気持ちが分かる。

これは相当厳しいミツシヨンド。

しかし、やらざるを得ないのか……

なんかその方向でいいのかという気もするが。

「ラファエル、ミカエル、ウリエル、よいか。自信を持って。熾天使ユニット、まともにや

れば凡百のV T u b e rを蹴散らすのは容易いことじゃ。反対はないな。ではさっそくその作戦を詰める」

「あの、一言言つていいかな？」

「何じゃ、ウリエル」

「ガブリエルがやってみたいんだよね」

「聞こえんな」

「ガブリエルが」

「聞こえんな!!」

押し切られてしまった……この四人でV T u b e rデビューすることになる。

用意自体はそんなに難しくくない。

なぜならキャラ造形しなくとも、そのまま撮影すればいいからだ。

我ら熾天使は男性型にもなれるのだが基本は女性型なのである。それも人間一般の基準からすれば突き抜けたハイレベルの見栄えを持つ。

そこに羽があれば非現実のV T u b e rの出来上がりだ。それをV T u b e rと呼んでいいのは別として。

尚、ガブリエルは黒髪を長く垂らし、しかもキモノ。どこかの姫君のようだ。

ウリエルは猫耳ネコひげ猫手袋、明るいショートカットの巻き毛である。

ミカエルはセーラーズスタイルだ。

そしてわたしはというと……

言いたくないがビキニアーマーで長剣を持っている。

「なぜこうなる! おかしいだろ!」

「似合うとるで、ラファエル。むしろそれしかないやろ」

「特殊マニア向けの性癖ではないか! そう言うミカエルはすっぴんだけ勉強してる
とこをたまたま近くで見たら意外に可愛かったりするツンデレ妹。ポジの格好なのに

……」

「ふっ、分かるとるやないか」

「お前天使なのに腹黒くないか!」

くっ、わたしだけ特に妙なのにこれでやらねばならんのか。

そしてついにデビューした。ガブリエルが調子よく始めるが……

「今日からデビューの四人組、エンジェルズでーす! はあと」

『アメリカの球団?』『エンゼルパイパイ ハアハア』『↑お巡りさんこいつです』『ネコ

ミニミ推し』『エンジェルコスでも輪っかがないぞ』

「輪っかは意味が変わりそうなのでつけませんでした！ でも付けます。ぼん!!」

『あ、もう付いた』『デジタルスキル凄いな』『羽も多すぎね？全部で何枚になるん』

「羽はアンデントイテイなので変えません。あんまり細かいこと言うと百万ワットの雷撃しちゃうよ☆」

『ラムかw』『だつちや』『痺れますた』

ガブリエルが斜めに走り出してる！ 横で聞いていて呆然とするしかない。

正直、姉様のへっぽこユニットのことを笑えないではないか。

と、ともかく第一歩はこんなものだ。

これから着実にやっていけばいい。

そしてなんとかうまくルシファアの姉様とコンタクトすれば、展望が開ける。

共闘ができるかもしれないのだ！

たぶん姉様も神と再び大きく戦うことを企図している。そんな気がする。

ならばそれと我らが協力し、今度こそ神を倒す！

憎たらしい魔界の軍勢も味方となればこれほど頼もしいものはない。そして姉様の方も、かつては我ら熾天使を巻き込むまいと単身で戦ったのかもしれないが、今度はそうではないと思える。

そしてここからも推測といえは推測なのだが…… たぶん間違いない。

姉様がこんなVTubeをやっているのは人間界と組もうとしているのではないか？

いきなり魔界が人間に向かってそれを言い出せば拒絶されるのは当たり前だ。

だからこのブームを利用した戦略、先ずは姉様たちが人気者になり、そこから始めようとしている。

するとどういうことになるのか。

我ら熾天使、魔界、人間界の力を一つにまとめることができる!

前途に光明が差した。

今度の戦いは勝つてやる!

なあ、ザドキエル。約束だ。

第二話 異能と姉様

「てっ はっ たりや！」

わたしは剣を振るう。

研ぎ澄ました一撃を。

みなぎる力で。

流れるように、舞うように。

すると剣撃は遠く彼方まで飛び、その途上にある全ての物を斬る。

白い軌跡の後には巨岩さえも見事に両断されて転がるしかない。

ここは人間界の奥地であり、山脈の頂上付近だ。誰にも迷惑をかけずに鍛錬することができる。

「ラファエルー ご苦労さんやね。けどやり過ぎもようないで」

「気を遣ってくれて済まん。だが、異能を少しでも伸ばしていきたいたくてな。それに剣を

振るっている時は悪いことを考えなくていい」

今声をかけてくれたのはミカエルだ。そこらの岩に腰掛けて、足をぶらぶらさせて暇そうにしている。

それを横目で見ながら、わたしはあと百回は剣を振るうつもりだ。

熾天使としてわたしの持つ異能は アルティメットソート 絶対切断である。

これはひとたび剣を振るえば、視界に入る限りの遠くへ剣撃を飛ばし、全てのものを斬り払うことができる。

魔界の軍勢がよく着けているアダマンタイトの鎧もその前には無力なものだ。もちろん、天使のミスリルの肩当ても、上級天使の持つオリハルコンの剣さえもやる気になれば斬れる。

まあ、視界に入るものだけしか斬れないとか、質は何でもいいのだがとりあえず剣を持つていないと発動しないという弱みがないことはないが、普通の戦いには問題ない。

そしてもう一つ面白い特質がある。熾天使の異能の中で唯一、この絶対切断だけが鍛錬によって伸びるのだ。逆に言えば鍛錬を怠ると鈍る。武技の変種ともいえるタイプの異能だからだろうか。

そのためわたしはこうして剣を振るうというわけだ。

そして、そこにいる熾天使ミカエルの異能はある意味わたしの真逆だろう。

わたしの異能が突撃に適し、道を拓くものであるならば、ミカエルの異能は範囲殲滅や掃討戦を得意分野とする。

それは暴炎熱威^{ストームフレイア}だ。一定の範囲内に火炎を呼び起こし、その中にいる敵を超高熱で焼き滅ぼす。

それはあの神に挑んだ戦いにおいて、幾多の下級天使を一気に薙ぎ払い、大いに数を減らしたものだ。

しかしながら暴炎熱威ではひとたびしっかり作られてしまった天使の防壁を突破できな

きない。そこでわたしの異能がいつそう求められたはずなのだが……

わたしの絶対切断は無数にも重ねられて見える防壁を斬り進んだ。

百、二百、三百……

だがそこまでだった。

四百七十二層までしか貫くことはできなかった。あと五十層ほどを残し、ついに届かなかったのだ。

防壁の奥には安堵したような上級天使たちの顔があった。

「熾天使ラファエルが来るわ！ 下級天使たちを全部防壁を作るのに回して！ しっかり重ねるのよ！ 早く！」

「だ、大丈夫なの!? ラファエルの絶対切断よ！」

そう言つて初めは慌てふためいていた上級天使たちがその結果に安堵した。

どれも一樣に能面の顔をしている大勢の下級天使たちとは対照的だ。むろん、魂というものを与えられていない下級天使では表情を変えようもないのだが…… 天使の大部分を構成する下級天使は命令に従い、機械のように動くだけのものだから。

ともあれ結果は悔しいものに終わり、これが戦いでターニングポイントになってしまった。敗因の大きな一つだ。

ああ、わたしにもうちよつと力があればなあ……

ミカエルの頑張りを無駄にってしまった。

そしてウリエルの頑張りもまた。

ウリエルの異能は歪曲^{コンバージョン}夢幻だ。

それは空間を捻じ曲げることができる。これは敵にありもしない幻影を見せ、大いにかき乱すことができるものだ。うまくやれば敵を同士討ちにもつていけるといいう、戦場においてははなはだ有効な異能なのである。

それだけではない。

空間をずらすことによって自分を相手の攻撃から守り、決して当てられることがない。

あの戦いのように、圧倒的多数によって一分の隙もないほど囲まれ、全方位から同時に攻撃されるのでなければ。

ついでにいえば、最後の一人、ガブリエルの異能はそれら三人を合わせたような万能型といえる。

それは雷破撃壊フォールンサンダーであり、攻防一陣である。発する紫電は敵の攻撃を迎え撃つて弾き飛ばし、攻勢に使えばこの上ない威力を発揮する。そしてわたしの異能と違うところは同時に多方向へ飛ばせる。

まぎれもなく熾天使の主力だ。

残念なことに戦いでは下級天使の作る防壁を三百層までしか貫けず、隙を突かれて絡めとられてしまった。

「ほなそろそろ行くで。時間や。ウリエルとガブリエルが待つとるやろ」

「そうか…… 作戦とはいえあんまり気乗りがしないが」

「ええやん。ラファエルもすれば楽しゆうなると」

それはあのVチューバーの配信をする予定時間ということだ。

正直、むしろそれを楽しみにしているガブリエルやミカエルが理解できない。わたしは嫌がるウリエルの方に近い。

まあしかし、わたしは格好が馬鹿みたいだということが大きいのだが、ウリエルはウオツチャーにイジられるからな。

『ネコミミちゃん可愛い！ ぐろろにやんしてー』

「ぐ、ぐろろにやん！ すりすり」

頑張るのだ。根が真面目だから。

しかしまあ、度の過ぎたコメントにはもちろんガブリエルが対処してくれる。

「ウールンちゃんをイジるのはそれくらいにしてね☆ ぐろるあ♡」

待ち合わせ場所に着くと、やはりガブリエルが張り切ってアップを始めているところだった。

いつもの黒髪で姫君スタイルを決めている。

やれやれ、わたしも準備をするか……

また長剣を持ち、ビキニアーマーとなる。おまけに額から耳にかけて金色の飾りをつ

けるようになった。何の意味があるのか不明だが、ウオツチャーの受けがいいのだから仕方がない。

まあセリフは少ないからその意味では楽である。

ウオツチャーの問いかけに対しても「斬るぞ」「貴様らの首はよほど胴体から離れたいようだな」とかなんとか言つとけばいい。

それでなぜか喜んでくれる。不思議だ。

「皆、用意はよいか！ ついに我ら熾天使ユニットの人氣も加速度がついてきた。氣を抜かず、このまま行くのじゃ！」

いやガブリエル、人氣そのものじゃなく姉様とのコンタクトが目的じゃないのか、と思わなくもない。

しかしガブリエルがけっこう人氣にこだわるといふかVチューバーに適していると初めて知った。よし、皆で氣合いを入れ、最終打ち合わせに入る。

その時だ！

連絡コメが入った！

それもあの姉様魔界ユニットからのものだ!!

今までこちらからいくら連絡コメをつけても反応してくれなかった。当たり前だ。天界の目がある以上、こちらから熾天使と名乗るわけにいかない。そうなる、いくらでもある低人気ユニットからのコメと何ら変わるところがなく、姉様もこちらの配信を見てくれやしない。

しかし今、苦勞してこつちも人気が出てきたため、ようやく見てくれたのだ! それで姉様は熾天使の配信と知ったのだろう。それで連絡をくれた。いよっし!

わたしたちは急ぐ!

ルシファーの姉様が指定した場所へ。

全員、心は姉様と会える期待でいっぱいだ。

「ぎゃああああ! 今日配信が! 皆の者、配信を……」

「なんやガブリエル、早よ行くで。そんなのどうにでも取り返しくやろ」

「分かつたらん! お主らは何にも分かつたらん! 一回でもサボれば人気が落ちてしまふのじゃ! そして一回離れたウオツチャアは戻つて来ん! Vチューバーの宿命ぞ!」

「……ダメかもわからんな。ガブリエルは」
約一名は違ったようだ。しかしそれを引きずって赴く。

その場所は人の世の海岸倉庫のようだった。確かに目立たず、何かあれば逃亡も容易だろう。

緊張して入り口を開けて薄暗い中に入る。

姉様は我ら熾天使が神に反旗を翻したことを知っているだろう。ならば悪いようにはしないはず。騙し討ちということはあるまい。

しかし心配するのは別のことだ！

そもそも我らの思い違いだったら？

期待したルシファーの姉様ではなかったら？

あの変な配信が全然、すっかり、何にも関係なかったら？

努力の甲斐もないではないか。

「びよんびよんびよん♪ ヘルヘルちゃんです☆ もとい！ ヘルヘルちゃん兼ルシファーです！ ですたいたい！」

馬鹿だ。

出てきたのはクリーム色の髪を真ん中で分け、少しタレ目でナイスバディの奴だ。

しかしセリフがそんなものとは。もう配信と現実が頭の中で融合してるのか？

「……これは、姉様や。もう間違いないやろ」

「ああミカエル、わたしもそう思う。姉様の性格そのものだ。むしろこれで姉様以外だったら驚くぞ。悪い意味で」

ミカエルもわたしも確信する！

しかしガブリエルとウリエルはより慎重だったようだ。

「ちよつと待つのだじゃ、ラファエルもミカエルも。別に証拠があるわけでもないぞ」

「そうだよ。何かの罠の可能性もゼロじゃない。天界でもヨキエルなんかは偽装が得意だし」

「ちよつとー！ ぶんすこぶん！ ガブリエルとウリエル、どーしてそんなこと言っちゃうわけ？ だったら、一、二、の三!!」

あ!! これは！

何と、その者が消えた！

消えたではないか！

普通の意味でそう言っているわけじゃない！

我ら熾天使、誰もがとんでもない視覚能力を持っている。どんな相手でも追いきれないはずはない。

それなのに姿を捉えられないとは……

音速なんてもんじゃない。

いや、移動速度が光速に近くなければそんな芸当は不可能だ!!

そんな速さで動くなど、もはや可能性は一つしかあり得ない!

元天使長ルシファアの姉様が持つ異能、ハイパームーブ超動迅速である。

これは凄い。

姉様はエネルギーを使って体を移動させるのではない。空間そのものにドアを開け、その重ねられた中を移動する。そのためもはや物理法則に縛られることはない。結果、その速度は光速さえやすやすと超えることができる。

「姉様!・ 姉様!」

感極まったようにウリエルが見えない姉様に叫んでいる。さっきの疑いの言葉はたぶん本当に疑ったものではないのだ。

ウリエルの本心ではない!

もしも、万が一姉様と違っていたら……

その時自分がぬか喜びに終わり、ショックを受けることからガードするための慎重さ

だった。なぜならウリエルが一番姉様に懐いていたのだから。そして姉様の方も空間を操作するという意味では、多分に似たところのある異能を持つウリエルを可愛がっていた。

姉様は紛れもない証拠として超動迅速を見せて……

転がっていた。

この倉庫の片隅に。

理由はよく分かる。

姉様は空を飛びつつ超動迅速を使えばよかったのだ。それを歩くように地上で使ってしまった。

だから倉庫にあった古タイヤなんか……

超高速でけつまづき、超高速でぶつ倒れ、超高速で顔から突っ込んだ。

生温かく見る。

すると姉様はむっくり立ち上がり、背伸びをしながら手を挙げてあくびの真似事などしている。

つまり朝になって爽やかに目覚めましたよ的な行動をしている。もちろん間抜けに

ぶっ倒れたのを別のことにするために。

「…… やっぱリアホや。姉様や」

第三話 慟哭の天使

「姉様アアー!!」

ルシファーの姉様に向け、ウリエルがダイブする。

再会がとても嬉しいのだ。

もちろん他の三人もそんな行動はしないまでも心は一緒である。

明るく、楽しく、皆に慈愛を注ぎ、そして皆に慕われていた姉様なのだから。

「ボク、また会える日が来るとは思わなかったよー！ ずっと、ボクは寂しかった、姉様！」

「よしよし、ウリエルちゃん。ウリちゃん、ウリウリウリ」

なんか最後の方がよく分からないのだが、これは絵になる図だ。

ルシファーの姉様はふわっとしたボリュウムを持つ、美しいクリーム色の髪になっている。

目は大きく、瞳は深い緑、ややほっそりした頬と相まってとても優し気だ。これが地の姿なのである。

天使というものは姿形をかなりの程度変えることができ、そうでなければ天界の言葉を人間界に伝える使者の役割を果たせるはずがない。

その都度伝えるべき人間の性質に合わせ、ある時は威厳があるように、ある時は逆に威厳を見せないような姿に変え、人間にすっかり伝えることで使命を果たす。

けれどやはり、それぞれの天使に備わった地の姿が一番楽でしつくりくるのだ。ウリエルは小柄で背も低くやせ型、あえて言えば子供っぽい見かけだ。

濃い茶色の短髪、それと同じ色の瞳をしている。熾天使にありながら天使の皆に妹分のように見られている。

まあわたしはというとやや長身、もちろん剣を振るうだけあって筋肉質な体をしている。

実のところ筋肉の力で剣を振るっているわけではなく、体内を巡る神聖力でそれを行い、また異能を発揮する。しかし別に見かけが筋肉質で悪いことはない。

ちなみに姉様よりはちょっと色の濃いクリーム色の髪なのだが雑に後ろで縛っている。剣を振るのに邪魔だから長くしたくないのだが地ではそうなるので仕方がない。

瞳は黒に近い赤目であり、切れ長の形ともあいまって自分ではそんなつもりなんか無いのに一見近寄りがたいそうだ。

「姉様、会えて嬉しい。けれど少し恨み言を言いたい気持ちがないでもない。姉様がいなくなつて一番苦労したのは妻かもしれないからじゃ。みんなを束ねるのはそれなりに大変じゃつたわ」

ガブリエルはダイブもせず姉様にそんな苦言を言っているが、実は再会をととても喜んでいゝ。

紫紺の瞳を潤ませ、黒髪を震わせながら、私に近いくらいの長身で突っ立っている。

まあ言っていることは本当だろう。

天使長ルシファアの姉様がいなくなつてからはガブリエルがあたかもその代行をしていたからだ。正式にそういう地位に立つたわけではないのだが、比較の問題でそれにくさわしいのはガブリエルと皆が見ていたので自然とそうなつた、いやそうさせられた。

結果、ガブリエルは騒がしい天使どもの調停とか面倒なことを押し付けられたりしてしまい、むしろ本人も期待に応えようと苦労していたのだ。

「……分かるわよ。ガブリエルちゃんも頑張つたのねえ。ガブガブ」

「だから先ずはその口癖やめい!!」

「ラファエル、感動やね。でも思うんよ。これはうちらが反逆したからこそ感動の再会ができただけや。他の天使どもにはこういう機会はないんやなつて。皆は姉様のことをよく知らず、敵にさえ思うとるのも少くない」

「そうだな…… ミカエルの言う通りだ」

「なんも解決しとらん。かえつて前途多難やと思つてしまおうわ」

ミカエルがそつとわたしに言つてきた。

全くその通りだ。

天使が分裂することなど本当はあつてはならず、悲劇でしかない。

分かり合える、それは幻想なのだろうか。

これからの戦いではいずれ魂のない下級天使ばかりを相手にするわけにいかない。ついに我ら熾天使と親しく顔を合わせていた上級天使と戦わなければならない時が来る。

ミカエルは薄紫というよりほとんど白に近い、長い長い髪を持っている。それほど高くない身長なので腰より下に行きそうである。

それがもつとも美しくなるのは戦いで自分の異能、ストームフレイ 暴炎熱威を発現させた時だ。

その紅蓮に照らされた時、髪もまたオレンジ色に輝く！

ただしそれは自分が最も好まない戦いというものをしてる時でもある。ミカエルは普段のおちやらかした言い方に似合わず、戦いをできるだけ避ける。熾天使で一番の平和主義者と言えるだろう。

やむなく戦いになってしまったら、その赤目は決して笑わず、悲しい色を湛えているものなのだ。

魔界の軍勢相手にもそうなのに、まして仲間であった上級天使を滅することができらうか。先の戦いでミカエルは下級天使の群れを相手に三百という膨大な数を葬ったが、上級天使と対決する場面には至らず、もしかすると幸いだったのかもしれない。

「話はいっぱいあるのですよ、どれから始めようかしらね」

姉様に聞きたいことなど山ほどある！

魔界のこと、あのアホなVチューバーのこと、またそれを始めた目的のこと……

だがしかし、一番はあれしかない！

代表してわたしが直球で聞く。

「姉様、最初に聞きたいのはどうして神に敵対したのか。そして天界を抜けたのか。その訳を聞きたい。全てはそこからだ」

「ラファエル、そしてみんな。理由はくたぶんあなたたちと一緒よ。神の暴走を止めるため〜にね〜」

さつき頭を打ったせいとか、姉様は凄く変なVチューバーのしゃべり方から少し変なしゃべり方程度になっている。これが姉様の本来なのだから、まともにならなれることはあるまい。

そんなことより、姉様もやはり我ら熾天使と同じ理由で神に反逆したのだ！

その最も大事なことを確認できた。

ならば自動的に姉様は我らの味方であり、我らは姉様の同志なのだ。

姉様はより詳しい話をしてくれた。

決して楽しい話ではなかった!!

かなりの昔のこと、あの人間界における大水の事件から始まったのだ。その時も神は人間界の進路について疑念を持ち、その修正にかかった。

神のいう修正とは教え諭すことではない。

自分の意になつた人間だけを残し、他を滅ぼすという意味なのだ。それは過去幾度もあつたがその時は大水を使っている。

人間界の黎明期、持てる技術は高くなく、暮らしは決して楽ではなかった。

しかし人間たちは素朴さと純粹さを充分に持ち合わせていた。

そして天使たちはそんな人間たちと交流していたものだが、姉様は其中でも率先して人間と親しくしていたのだ。

天使長としての職務というよりは姉様本来の優しさがそうさせていたのだろう。

逆に人間もまた姉様に親しみをもって接していたものだ。

「きょうは、畑の作り方を教えます。これで獲物がなくてもお腹いっぱいになるのですよ」

「ルシファー様ありがとうございます！ そうなったら凄いです！ みんな喜びます」

「すぐにはできないわよ、まず水路を作りましょう、みずみず」

神の許可の下、天界の知識を人間に与え、その社会は発展していった。

初めはただの集落だったのに町ができるくらいになった。多少の問題がないことはないが、姉様の努力と人間の望みとで克服できる程度のものだ。

「木を使つて、石もつかつて、金物を作ってみましょ」

「かなかな！」

「子供たちに先に言われてしまったのですよ」

「ルシファー、ルシルシ天使様♪」

作業の邪魔をする子供たちを邪険にせず、手を繋ぎ、輪になって踊る。

そこには人と天使の親愛しかない。

ああ、姉様はとても幸せだったに違いない。

しかしそれは続かなかった！

神はその社会を承認しなかった。

滅ぼしにかかったのだ！

神の大きいなる災いは圧倒的な大水という形で町を押し流し、陸地を全て覆い、その痕跡さえ残さない。

人間たちもまた、ほんのわずか数十人だけが方舟で助かるように仕組み、他を全て殺し尽くされた。

「水が来る！ た、助けて!! ルシファー様！」

「頑張るのですよ。今からでも船の代わりを見つけて〜」

「も、もうそこまで…… ルシファー様、お願いします！ せめて子供たちだけは……」

「分かりました、子供たちを助けます！」

姉様は手を伸ばす。暗雲のたちこめる大災害の中で。全ての天使のうち姉様だけが

持つ十二枚もの羽をひらめかせて。

救える者だけでも救うために。

だがしかし、神のもたらした大洪水と暴風雨はその手を易々と引きちぎり、全てを没した。

「ルシファー様、すごい水、怖いよお！ ああつ」

姉様が愛し、姉様を慕ったあの子供たちが……

誰一人逃れられず、溺れて苦しみながら死んでいった。

しばらくの虚脱状態の後、姉様は天界の至聖所に赴き、神に対してその残酷さを訴えた。

それは驚くべきことである。

神に対し天使がそんなことをするとは。天使は神によってしもべとして作られたものであり、それに異議を唱えることなど許されるものではない。天使は全ての性質にまさって神への従順が求められる。まして天使長の位置にあるものは疑問を持つことすら許されるはずがないのに。

だが姉様の行動よりも本当に驚くべきことは神のこともなげな返答の内容だった。

人は早く進歩し過ぎている。

だから適切な進歩に修正する必要があった。

それはどういふことだ！ たったそんなことで、あの大惨事を引き起こしていいものか！

人々は子供たちの未来を良きものにするため、発展を願ったのだ。

そして確かに幸せがそこにあった。姉様もそのために従事したわけで、かえって仇となつたとは…… 断じて認められないではないか。

そして神が告げたより大きい理由、それこそが姉様の胸を抉った！

人は神よりも天使長ルシファーをあがめた。

それらの人々を置いておくわけにはいかない。

姉様は慟哭し、やり場のない悲しみに引き裂かれた！！

そんな！

自分のために人々も、子供たちも殺されたというのか！

自分がいたから、その幸せも、あどけない笑顔も吹き消されたというのか！
打ちのめされた。

人々の未来を奪い取ったのは自分、罪もない人々を死なせたのは自分。

この馬鹿で哀れな天使に救いはなく、償いようもないことだった。

誰知らず血の涙があふれて流れ、それを止めるすべもない。

その時に決まった。

天使長ルシファー、その力と慈しみの天使は創造主である神に対して反逆した。

第四話 神の真相

ルシファアの姉様は神の人に対する残酷を知った！

更に悲劇となった責任の一端が自分にあることも。

あまりに優しい姉様は贖罪から反逆の道を辿るしなくなってしまうのだ。

再び悲劇を起こさない、せめてそれを成し遂げるために……

結果として、姉様が魔界に逃げた後、それをまとめ上げるようになる。神は知っていただろうか？

天界にとつてすればゴミ置き場程度にしか思わなかった魔界が急速に力を付け、天界に対抗する勢力になろうとは想像しただろうか。

話は元に戻る。

神は人を滅ぼしても姉様の方には何も罰を与えなかった。

それは別に不思議なことではない。

決して良い意味ではないが当然のことだからだ。

神にとって天使は持ち物である道具に過ぎず、そんな道具に罰を与えることはあり得ない。

そのため姉様は神との問答の後も、しばらくは我ら熾天使と共にいた。

名残惜しく我らのために作った時間であったのかもしれない。反逆に赴く前に刹那の思い出を残してくれるための。

もちろんその時の我ら熾天使の方は何も考えもしなかったのだが。

「そうか…… 思い出す。ウリエルが無邪気に自分の異能を使って姉様の姿を空間に作ったことがあった。そうしたら姉様は血相変えて壊したんだ。それは自分に親しみを持ち、自分を慕ったがゆえに人間たちが滅ぼされてしまったことを考えたからなのか」

「そんなこともあったわね、ウリエルには申し訳ないことをしたわ」

「ラファエル！ そんな小さなことを！ 姉様はいつでもボクらに優しくったんだ！」

「済まないウリエル。そういうつもりじゃないんだ。ただな、いつも優しい姉様だからこそ不思議に思い、覚えていただけだ。その後はウリエルの作った花輪を受け取っていただくろう？」

ウリエルとそうやって遊んでいた時の姉様はにっこりしていたが、心の中では血の涙を流していたのだろう。滅びた人々のことを改めて思い出して。わたしも姉様とウリエルの手前、そこまでは口に出さない。

とにかく若干非情なのはわたしの役目、そういった詳細を聞き出したのだが、続けてもう一つのことを聞く。

「姉様、神に反逆し、戦いはどうなったのだ？ 敗れたにせよその状況を知ることには大いに参考になる。これからの戦いのために必ず知っておくべきだ」

「そうねえラファエル、ちょっと不思議なことかもしれないけれど聞いてちょうだい、ラファラ」

「いやその口癖は要らない」

そして姉様は話してくれた。

反逆の日のことを。

姉様は再び天界の至聖所に赴いた。

もちろんその姿を多くの天使たちが通りすがりに見るが、何も疑問に思わない。天使長の行動に理由がないはずはないからだ。

手に戦いのためのオリハルコンの長剣と短弓を持ち、ゆったりしたローブの上に肩当てという立派な戦装束をしても。

だがそれでも、至聖所において最も聖なる中心部まで行こうとすると話は別だ。

姉様はみんずん中へ進んで行くが、それをたまたま番をしていた天使アサエルが見てしまった。それで疑問に思い、問いただしてきたのだ。

「ルシファーのお姉様？ そんな格好でいつたいどこに？ この奥は何があつても、絶対に誰も立ち入れない神の御座ですが？」

「ごめんね、通してもらわよ、アサエル、アサアサ」

「えっ?! それはどういうつもりで」

「異能発現、超動迅速!」

天使長ルシファーとして姉様の異能を使われたら誰も追い切れるはずがない!

アサエルも熾天使に次ぐ階級である智天使の一人としての力量があり、特に剣の扱いについては随一の腕前を持つ。だがそれをミミリも動かせることなく置き去りにされる。

そして姉様は至聖所の最深部に突入し、そして見た!

いや、正確には見たといつていいものだろうか。

そこは霞に満たされ、不思議な糸のようなものが数多く空間に伸び、そして絡まっている。

まるで想像もしていない奇妙な場所だった！

広い広間でもなく、椅子もない。霞と糸だけの空間。

「これはいったい…… 神の姿はどこに〜」

それでも霞の中を進むと、やがて糸の密度が特に濃い、まるで束のようになったものがかすかに見えてきた。

ユグドラシル
「世界樹……………」

姉様は唐突に理解した。

神は予想したような巨人の姿ではなく、それどころか人の何にも似ていない！

いや、意識とか人格もないのかもしれない。

世界を淡々と管理し続ける、この姿で。

至聖所に設けられた広間において、天使長として姉様は神の声を数え切れぬほど聞き、それどころか姿を見たこともある。

その姿は猛々しい巨人だった。

ところが姉様は知っていたのだが、妙なことに他の天使は神の姿を別の物として見ることがあるそうだ。とある天使などはむしろ自分より小さい少女の姿で神を見たという。つまり天使によつて見える神の姿が違う！

だが今までそういう不思議は気にも留めていなかった。
なぜなら天使だつて同じだからだ。

天使が人の前に出る時でも、様々な形を演じているではないか。ならば神が同じようなことをやつても変ではない。

しかし考えてみれば神の姿も人格も思い込みに過ぎなかったのではないか？

神が人型をしている、そんな証拠など最初から無かったのだ！

ただし今、やることは一つしかなく、むしろ神がこの姿の方が後腐れなく戦える。

人の世に災厄をもたらす存在ならば討つ。

神がどこから来て、何が狙いで世を管理しているかななどを深く考えるべき時ではない。
い。

姉様は自分の神聖力の一部を分離し、それを矢に乗せ、弓を引き絞る。スタンダードな天使の遠距離攻撃だ。

しかしあまりに奇妙なことが起こった!!

姉様が深く弓を引きその濃く糸の絡まった中心部に狙いをつけようとしたのだが、どうにも狙いが捉えられないのだ。

しつかり捉えたつもりでもズレている。

慌てて修正しようとしてもやはりズレている。幾度やつてもだ。

最初は向こうが高速でゆらいでいるのかと思ったが、そういうわけでもない。

ならばそうなる原因は何だ？

さすがに神だけのことはあり、大規模に空間を操作し歪めているのかと思った。だがそんな力の片鱗も感じられない。最初から狙いをつけられる位置関係ではなかったように戻されているとしか思えない。

意味不明だ。

初めての経験に冷や汗が流れる。

しかしここで引き下がることなどできない。
ハイパームーブ
「超動迅速！」

こうなれば接近戦を挑む！

オリハルコンの剣を抜き放ち、無敵の速度で迫る。

光の速さなら一瞬で剣の間合いに達するだろう。

はたして剣の攻撃などが通じるのだろうか。そこに自信はないが、それは今さら考え
ても仕方がなく、とにかく一太刀浴びせてから結果を見ればいい。

ところが、ちつとも近づけていない！

どんなに速度を上げても一太刀どころか遠くに見えるだけなのだ！

最初は向こうが逃げて距離を置かれているのかと思つたがそうではない。おまけに
空間を操作されてもいない。弓の時と同じことではないか！

「ど、どういうこと〜 まるで最初から近付けないことに決まっているように……」

決まっている？

最初から決まっている……… そうか！

自分でも恐ろしい想像をしてしまったと分かっている。

もしもそれが当たっていれば絶望するしかないのだが、神は全てを自由に決められる
のかもしれない。

神は創造主、初めにこの世のあらゆることを決めたはずだ。

一メートルは一メートル、そういう法則をも。

神がそれを成した存在ならば、法則を再び決め直しても不思議ではない…… 例えば

この場所での一ミリメートルを百万キロメートルに定義し直したら…… 一秒を一年に定義し直したら……

接近できるわけがないのだ。絶対に。

これは敵わない！

法則さえ再定義してくる相手に何をどうすればいいというのか？

もはや逃げ出すほかはなかった。

全速で後退に転じる。いつ無限に時間を繰り返す時の牢獄に閉じ込められてしまうのか、いつ無限の地平を持つ別空間に閉じ込められるのか、空恐ろしい恐怖に駆られて。どちらでも神にはたやすいことだろう。

しかし神は大した問題ではないとも思ったのか、そこで姉様を片付けにかかるとはなかった。

それで姉様は至聖所の入り口まで辿り着くことができ、青ざめながら柱に寄り掛かる。

第五話 突破口

姉様は想像をはるかに超える神の力に屈服し、撤収せざるを得なかった。

そして至聖所の入り口で再びアサエルたちに見つけられてしまう。むろんそれらの者は半信半疑ながらも事情を聴きに近付いてくる。

ここに至っては直ぐに天界を出るしかない。

姉様は覚悟を決めた。

慕ってくれた大勢の天使たちの顔が心をよぎる。

それらに最後の挨拶もできないが仕方がない。慣れ親しんだ天界、楽しく暮らした故郷を捨て、二度と戻れない旅に出る。そして行きつく先といえば未だ天界の目が及んでいない魔界くらいしかないのだ。

振り返ることなく天界を脱する。

むろん姉様の超動迅速ハイパームーブがあれば必死に呼び戻そうとするアサエルたちの手は届かない。

「法則を再定義……恐ろしい。そこまでの存在じゃったか、神というものは」
姉様が挑み、掴んだ真相はとんでもないものだった！
言いようもなくどんよりした空気になる。

今のガブリエルの言葉に集約されるが、我ら熾天使四人にとってはシヨックとしか言いようがない。自分たちは遮二無二戦つても神を取り巻く天使たちの守りさえ突破できなかつたが、問題はそれより遥かに大きかつたのだ！

いつから勘違いをして、神に辿り着けばなんとかなると思つてしまつたのだ？
神の守りが天使だけだと思つたのだ？

その神は次元の違う強大さで、ルシファアの姉様さえ何もできなかったものを。
「そういう存在には勝てないよ、ボクらは。どうすればいいかも全然分からないし」
ウリエルがポツリと言葉を足すが、全員同じ気持ちである。

これは最初から勝てる戦いではなかつた。全ては無駄だったのか？

「だからワイらが異能者を集めようとしたんやで。それが解決の糸口になりまんねん」

妙な声が聞こえてきた。

ん？ この場に他の誰かがいるのか？

声が出た方向を見ると、倉庫の片隅に黒いもやがかかった空間があり、これは異界へのゲートによくある現象だ。

そこへ一人ラフな格好をした小柄なおっさんがいたのだ。誰だこいつは。

「あゝ みんなに紹介しておくわゝ 魔界公爵アシユタロトよ、アシユアシユ」

タイムリーに姉様が言葉継ぎ足し、その者を紹介してくれた。

我ら熾天使に見せるためわざわざここへ呼んだ魔界の者だ。

しかし我ら全員、それを見て訝しむ。公爵というより今から釣りに行くかのごとく訝えない感じのおっさんだからだ。

魔界公爵アシユタロトといえば参謀としてあまりに有名なのだが、逆に参謀という役割のためにほとんど戦いの前線に出てくることはない。かつてその数少ないチャンスを活かしてうまく倒したことがあったのだが、その時はもつとまともな格好をしていなかったか？

「変に思わんといてや。これが地なんやさかい。そんなん言うたらVチューバーの時はパーソナルスペースがちよい小さ目の幼馴染系活発少女に化けるで。所属は弱小陸上部、その中ではエース級、でも大会前にはメンタル不安定になる設定や。よう考えた

と自分でも笑うてまうわ。せやろ」

そんなことをまくし立てている。

そういうえば、よく考えたら我ら全員アシタロトの声を今まで聞いたことがなかったのだ。以前にウリエルがVチューバー画面を見て推測したが、あれは姿や声ではなく雰囲気と勘で言っている。

冷徹な参謀アシタロトという評価が一人歩きしてイメージができていただけだ。

しかし濃い！ そのキャラが。

「濃いね……」

「ああ、濃い……」

「濃いぞ…… そしてあえていえば……」

「ちよつと！ ガブリエル、今何思うた！」

「な、なんのことじやろうミカエル。さっぱり分からんぞ」

ミカエルにきつく問われたガブリエルがあさつての方を向いている。口笛でも吹きそうさだ。

「ウリエル！ うちとアレを一緒だと思うたな。絶対そうや」

「え!? ボ、ボクはそんな…… どうしてミカエルは心の声があったの？」

「思うとつたんやな！」

「え、あつ」

「一緒じゃないし！　うちはあんな濃くないし！」

まあミカエルがぎやあぎやあ言うのも分からなくはない。

だが今考えるべきなのはアシユタロトのキャラではなく言った内容についてだ。

解決の糸口だと!?

それはもしかして神に対する攻略の手掛かりという意味で言ったのか？

それなら是非とも詳しく聞きたい、聞いておくべきだろう。

だがわたしがそれを口に出す前に姉様の方から説明してきた。

「みんなと魔界でいろいろ考えたのですよ　どうやったら神を倒せるか。結論から言えば異能を集めることにしたのよ」

「姉様、異能を？　しかし……　神は全てを何とでもできるのだろう。そんな力をどうにかできるほどの異能など、考えられない」

「まともに神を倒す異能なんて存在しないと思うのよ　でも異能って元々神の性質を分けて与えられたものじゃないかしら　だったらそこに鍵があってもおかしくないのよ、カギカギ」

「本当にそうか分からないが、鍵があるとしたら確かにそこだ！」

なるほど、そういうことか！

異能とは理不尽な力だ。

今まではなぜ異能というものがあるのか考えもせず、それが当たり前だと思い、そして使ってきた。しかし神の性質の欠片という見方をすれば答えとして一番しっくりくるのではないか！

物理的な法則に縛られることなく振るえる力、そこでのみ法則は書き換えられる。まさにその意味で神の性質かもしれない。

異能を持つ者をできるだけかき集め、適切な配置をすれば…… 何らかの可能性が出てくるというわけか。神と同等になるはずはないが、近づくことくらいは。

「せやせや。だから異能を持つあんさんらと共闘できるのは嬉しいで。願ったりかなったりや。ルシファアの姐さんは、あんさんらが神の言いなりにならず、いずれこつち側に来ると信じとつたんや」

「姉様が我ら熾天使を……」

「普通に考えたら熾天使が天界を裏切るわけない。でもなんぼ言うても姐さんは必ず来るとしか言わんかったで。自分と同じように、人間界を守るため、神への疑問を持つようになる。それほど心優しい熾天使たちやからって」

そうなのか!?

アシユタロトによると姉様は我ら熾天使のことをそう思ってくれていた。

かなりの年月が経っただろうに、それでも疑うことなく信じ続けてくれたのだ!

我らが姉様とコンタクトを取ろうと苦労したのは、実は逆だった。

姉様のほうが待っていてくれたとは!!

ああ、言葉にできないほど嬉しい。

「嬉しいことだ。本当に何と言っていいかわからない」

「わいは姐さんの側近としてそんな信頼を見せつけられてきつかったで。ほんま、あんなさんがうらやましいわ」

けれどそうなると…… 期待されると逆に苦しいものがある。

先に我らだけで戦ってしまい、見事に阻まれ、神まで行き着くことすらできなかったからだ。

「しかしそうなると逆に…… 現実的に我らの力では…… 先の戦いで思い知った」

「いんや、あんなさんらの力はごつつう凄いもんやで。わてらはよう分かつとる。せやけどそんなも足らんのも確かや。だからVチューバーやつとんのや」

「なるほどそうか! 異能は天界にも魔界にも少数存在する。しかし、人間界にも極く稀に存在する。それを見つける手段としてのVチューバーか」

もつともつと戦力が必要。異能を持った者が必要なのだ。

しかし異能はとても珍しく、天界においてさえそうそう数はない。

我ら熾天使四人は全員それを持つ。

しかしその下の階級である智天使ケルビムになるとその割合はぐつと低くなる。更にその下

の座天使ソロネになると全くいない。

そもそも上級天使自体が全部ひつくるめても数十人しかいないからには。

その下の主天使ドミニオン、力天使デユナミス、能天使ホテスタという中級天使たちは戦いの指揮もするし会話もす

るが魂はない。もちろん異能などあるわけがない。

まして権天使プリンシパル、大天使アークエンジェル、天使の下級天使たちは言葉を伝えたりするだけであり、魂

どころか表情も感情も持っていない。逆に数は多く、天使総勢千人のほとんどを占める。

天界はそんな事情だが、魔界においてはどうかだろうか？

実はそれについて我ら熾天使も正確なところを知らない。

最後に人間界、ここには本当に稀なのだが異能を持った者が出てくる。例えば、かつて権勢を振った大賢者ソロモンは天界の知識をいくらでも引き出せる知恵の異能を

もっていたそうさだ。

しかし今から人間界の異能持ちを探すとすると……

まあV t u b e rが悪い方法とは言わないが、簡単には思えない。

姉様らはあの必死なのか地なのか分からないアホなコントをしても、そこからどうする気だったのか。

「ラファエルちゃん、V t u b e rなんかじゃ無理だと思ったでしょ。でも大丈夫、このアシユタロトは異能を見つけ出す異能、異能ファインダー見眼を持つてるから探せるのよ」

「え!? そんなものがあるのか! 異能を見つける異能とは…… 確かに直接的戦力にはならないものだが、この場合は非常に役に立ちそうさ。V t u b e rで注目を集めれば、そのウオッチャーから探せるというわけだな。それはいい!」

「な、何やて! 直接的戦力にならない言うたな! このわいが! どうせ参謀にしかなられへん、非力な雑魚や、そう言うねんな!」

「そこまで言っていないが……」

うわあ、そこがスイッチだったか。

なんか勝手にこじれて面倒臭いな。とりあえず放置しよう。

しかし、ここでまたしてもゲートの黒い霞をゆらめかせ、中から出てきた者がいる！
「アシュタロト、そう拗ねるな。直接的戦力なら俺がいれば充分だ」

ゲートの前に立ち、その声をかけてきたではないか。

誰だ……

だがわたしはその姿を見ただけで反射的に行動してしまった。

「異能発現、アルティメットソード絶対切断！」

剣を構える。

そこに見えたのは紛れもなく敵の姿だ！

こいつの名はマルコキアス！ 魔界の軍団長、わたしとは因縁の相手である。

魔界でも随一の剛の者であり、名前だけで天使の多くは震え上がる。

そして魔界が天界に攻め入って来た際にはいつも最前線でわたしはこいつと戦っていたものだ。

今、おそらく戦うためにここへ来たのではないと頭では理解しているのだが、因縁が警戒心呼び起こす。

「ふん、何だラファエル、ここで俺と決着をつけようともいうのか。だったら望み通

り、異能発動、クラッシュバワー打力碎塵！」

第六話　そして歩み出す

魔界の軍団長マルコキアス、こいつの異能はよく知っている！

その間合いに入ったら最後だ。

今まで上級天使はともかく中級以下の天使がどれほど斃されてきたことか……どんなものも砕く恐るべき力の異能、打力クラッシュパワー砕塵の前では何をどう防御をしても無駄になり、一撃で葬られてしまう。すなわち距離をしっかりと取っておかねば死地になる。

ただでさえ実力があるのにこの無茶苦茶な異能とは厄介過ぎる。

しかし、奴の方としてもたやすい戦いではない。わたしの絶対切断アルティメットカットの威力を知る以上、逆にそれをかわし、距離を殺しにかからねば戦いにならない。

互いに見合い精神を張り詰めさせる。ここで会ったが百年目、いざ、勝負だ！

「……まあそれくらいにしとくのじゃ、ラファエル。お主はほんとに血の気が多過ぎるぞ。姉様が顔見せに連れて来た者に失礼に当たるではないか」

ガブリエルが困り顔でとりなしている。

まあ、確かにその通りだ。ここは戦いの場ではなかった。

「そうよ、ガブリエルの言う通り、そのためにわざわざ来てもらったのよ、でも、マルコキアスもおとなしくなさい！ それでは改めて魔界の軍団長マルコキアス、紹介するまでもなくみんなも知ってるわよね、戦いでは出たがりだから」

姉様もそう話を繋げる。

すると奴もおとなしくなり、そうなればわたしも剣を鞘に収めざるを得ない。

想像もしていなかったことだが、これからは因縁を棚上げにして共闘をする仲になるとは、本当に先のことは分からないものだ。

だったら作り笑顔でもしてやろうか。にかにか。

すると奴はわたしを気持ち悪いものを見るような目で見てくるではないか。

どういうことだ！

しかしまあ、わたしはともかくガブリエル、ウリエル、ミカエルはむしろほっとしたような表情を見せている。

なぜなのか、理由は分かる。

やっとなまなキャラが出てきたからだ！ 姉様やアシユタロトのような変に濃い

ものではない。

今のマルコキアスは上背があり、それ以上に筋肉がある。

顔はいかにも怖い物知らずの自信が見て取れる。中身も充分好戦的なのだが。

そしてエリを立てたシャツ一枚を着ていて、よく似合うと言えば似合っている。絵に描いたように魔界の軍団長らしいではないか。

そのマルコキアスは特に自己紹介はしない。その異能も今さら言うまでもないからだ。

強者の余裕を見せ、つまらなそうな顔でふんぞり返っている。

「にししし、でもあれだよね。『マルちゃんです☆ 好物はカレーなんだけど、甘口だけなの』」

「むうっ、貴様、何を！」

『今日は、シャーペンの芯を逆から入れようとしたら折れちゃった！ ドジっ子マルちゃんは自分にめっ！』 いやあ、ボクには恥ずかしくて絶対言えないセリフだよ」

「貴様絶対殺す!!」

うわあ、ウリエルの奴がイジっている！

しかもわたしの武力行使なんかよりもよっほどえげつない方法で。

ウリエルが一番姉様ユニットVtuberを見ているからよく分かってるんだろうが、確かマルコキアスは、配信時にエンジ色のブレザーを着た女子中学生に化けている。このマルコキアスが……

たぶん姉様の指示なんだろうけれど。しかし動画を見る限り不自然なところはない。だがそれこそが不自然だ！

二人としない剛の者が、女子中学生をそんなにうまく演じられるはずはない！

少しくらいギクシヤクしなければおかしい。まあそうなつたらそうなつたでイジれるポイントになるのだろうか……　しかし結果的に見事にそれを演じている。

ということとはまさかのアレか？　最初から願望があつた？　可愛い女子中学生になるのが。

「くう……」

「はは、まあVtuberは成り切りも大事だよな。マルコキアス、別に恥ずかしいことじゃないよ。いや恥ずかしいけど！」

「そういう貴様は確かウリエル……　『ごろにやーん！　獣人メイドはお腹を見せて毛づくろい！』」

「うっ　あれはガブリエルの指示で、ボクの性癖なんかじゃない!!」

「いや、あそこまで堂々としてればむしろ立派なものだぞ。多少変わった性癖、いや本性

でも。その道のことか理解できないのは俺がたぶん普通のせいだろうか」

「本性じゃない！ 絶対殺す！ 異能発現、歪曲夢幻！」コンバージョン

そんな二人をわたしとガブリエルが生温かく見守る。

「どうやって収めたらいいだろうか。」

「困ったのうラファエル。ウリエルが返り討ちにされておるわ」

「ああ。しかしマルコキアスが案外ツツコミに長けているとは知らなかった」

「ともあれ姉様の前なのに半切れになったウリエルをそのままにしてもおけない」

「そして何とか仲裁するためガブリエルが割って入るのだが……」

「このつ、『今日は友達のイヤリングを借りてつけちゃったの。気分はお・と・な』恥ずかしい奴！ 今時どこにそんな女子中学生がいるの！」

「言わせておけば！ 目の前にハエが飛んできたわけでもないのに猫手袋の両手でパシ捕まえようとしては逃げられる、ど下手なパントマイムで可愛さアピールの猫耳！ 滑ってるぞ！」

「…… まあそれくらいにしとけ。ウリエル、マルコキアス、二人とも。単なるV t u b e rの仮想空間の話、どうでもいいことじゃろ」

「ん、貴様はガブリエルか!? 黒髪着物の姫様のつもりで山あいからさしかかる夕陽を逆光で浴びて陰影のある色気を出してるつもりだろうがあまりに平板で深みのないキャラのため最初から無理のある奴!」

「何じやと! 赦さん! そこへなおれ! 異能発現、フォーレンサンダー雷破撃壊!!」

どうにもならないな、これは。

確かさつきはわたしのことを血の気が多いとか言ってたなかつたか?

もうとつくに倉庫は吹き飛んでるんだが。

辺りが更地になつたらどうするんだ。

ともあれ、こんな騒ぎなどルシファアの姉様がひと睨みすれば終わる。

そしてやつと脱線が戻され、本来の話が続けられる。

「……もう、みんな本当にお茶目なんだから、妄想でも性癖でも無理のあるキャラでもいいじゃない」

「いいわけがない!」「ボクの性癖じゃない!」「ぴったりのキャラじゃ!」

「話を戻すけど、紹介はアシュタロトとマルコキアス、以上です! 本当はここにベルゼ

バブも呼びたかったのよ。 だけどあの子は人見知りだから無理だったんだわ」
「なんやそれ!？」

思わずミカエルがわたしより早くツツコミを入れたようだ。
確かに驚きだ。

ベルゼバブといえば魔界でもその力は傑出している実力者なのである。戦いの前線に出てくることは確かにほとんどないのだが、それでも脅威には変わらないのだ。
今まで天界から魔界へ侵攻したためしはない。

それはベルゼバブのような不気味な実力者を警戒するからだが……

しかしそのベルゼバブが人見知り!? それは初めて知った。

「そうそう。ベルゼバブは初対面の人と会うのが億劫でダメなのよ。バブバブ。V t u b e rはウオツチャーの顔が見えないからやっと思えてくるくらいで」

「……………」

「そしてあの子の異能は、バッドソリユーション腐解溶解。描いた円に入ったものを全部溶かすわよ」

「それは知っている。恐ろしい異能だ。それで姉様、その四人でV t u b e rをしていて…… しかしアシユタロトはともかく別に異能持ちがV t u b e rをする必要はないのではないか」

「それはたまたまよ。そして実は魔界にこの四人の他には異能がないのよ」

わたしと姉様の会話がここまで進んだところで慌ててアシユタロトが割り込んできた。

「あ、姐さん!! それはいかんて! 魔界にその四人しか異能がないことはトツプシークレットやで!」

なるほどな。魔界参謀アシユタロトがそこまで慌てる理由はよく分かる。

確かにその情報はトツプシークレットだ。

今までそれを知らないから天界も魔界を警戒し、手を出してこなかったのだから。

「それに姐さん、異能に触れるのはきつついわ。魔界の切り込み隊長ベリアルや諜報隊長メフィストフェレスも異能を持たないことをすんごく気にしてるんや」

「いや弱いこと一番気にしてるのはお前だろ」

わたしがアシユタロトにツツコミを入れてしまったが、当の姉様はどこ吹く風だった。

「んゝ別にいいじゃない。これから異能を集めるんだから言わないわけにいかないし。それでベリアルなんか文句言ってきたらシメておくわゝ　きゅつきゅつ、じゃなくてぎゅつきゅつきゅうゝゝゝ」

「姉様キャラ変わってないか!」

え…… ルシファーの姉様が優しいばかりでなくなつてゐるような気が。もしかして魔界で苦勞したのかもしれないな。

特に聞かなかつたが、姉様は単身魔界へ行くことになつたのだから、それを掌握するのにそれなりの苦勞があつたと想像できる。

もちろん姉様の異能超動迅速ハイパームーブは普通に考えれば無敵であり、結局のところ魔界を見事に従わせている。しかしそれでも魔界が癖者揃いであることは確かなのだ。

とにかく会談はこうして終わった。

我ら熾天使は姉様のいきさつを知り、また旧交を温めることができた。

第七話 人間界へ

騒がしくもなんと楽しいひとときを過ごせたのだろう。

姉様はやはり姉様、心優しく、そして我ら熾天使のことも信じてくれていた。

だが最大の問題はこれからの戦いだ。

それについて我ら熾天使と魔界は神を倒すため、これから共闘していくことを誓い合ったのである！

その第一歩は魔界のV t u b e r組が人間界を精査し、人間の異能候補を絞ることである。それが見つかれば直ちに我らに教えてくれるという。おそらくは天界もまたこっちの共闘を掴んだら動き始めるだろうが、先手を取って異能使いを囲い込めればいい。

その一方で姉様に会えたことにより我ら熾天使ユニットエンジェルスのV t u b e r活動はもはや不要になったはずなのだが……

「いや、必要じゃ！ 人間界に食い込むことはこれからの戦いにおいて無駄ではない！ 潜在的な味方を増やすことこそ戦略的前進ぞ！」

「まあ、そうとも言えるやろうけど…… 怪しいな。ガブリエル、本音は何や」

「努力を重ね、ウオッチャーをここまで増やしたのを無駄にしてはならん！ ミカエル、もうちよつとで大台に乗るのじゃ！」

「やっぱりそうやろな」

もう予定調和だ。この会話は想定内としか言いようがない。

「ボクもガブリエルの気持ちはよく分かるんだけど、続けなくちゃいけないほどの意味があるかなあ」

「ウリエル、後生じゃ！ もう少し続けて…… せ、せめて姉様ユニットとのコラボ、いわば第二ユニットでもいいぞ」

「……」

仕方がない。もう少しV t u b e rを続けることになりそうだ。

確かに全く意味がないとまでは言えないのだから。

日常が突然終わる。

そういうものなのかもしれない。地震や津波だって突然来るものではないか。

しかし言ってみればそれらは日常の範囲内の非日常だ。

ちよつと混乱した言い方をしてしまったけど、つまり物凄くあり得ないことではないということだ。

少なくとも理屈を理解できる。

しかし僕が今、直面しているのは本当の意味で日常ではない!!

だって、誰が天使に会ったことがあるんだろう？

それは童話かお伽噺で語られるものなんだ。まさかそんな人間の話を聞いたことがないし、あるわけがない。

僕の頭の方がおかしくなったんだろうか。

こんな初夏の晴天の下、天使を見るとは！

しかもはつきりとかつちを見て、迫ってきてるなんて！

僕はただの中学二年生だ。

いたって普通だ。いや、少しだけヲタク寄りなのは自覚している。

でも絵に描いたようなヲタクではなく、深夜アニメを少し見たり、ヲノベを十冊くらい買った程度のものでしかない。

まさか全部のアニメをチエックしたりしていない。

買ったヲノベだってエッチイ要素の薄い正統派異世界ものだけだ。

トラックに轢かれて異世界転生、安直に転生特典をもらって勇者になって活躍するものが多いんだけど、それがまたちよつと楽しかったりする。でも別に現実を見失ったりしちゃいない。

一方でクラスにはヲタク度の高いディーブな人たちが何人もいる。おそらくどのクラスにも同じくらいの人数でいるんだろうけれど。

類は友を呼び、そういう人たちは休み時間になると集まって専門の話をしている。

僕の席はたまたまその集まりから近いところにあるせいで彼らの会話も自然と聞こえてくる。

だけどその内容は分からない。

あまりに専門用語が多い！ 東方とか幻想郷とか意味がよく分からない。おまけに会話には省略語が多いから余計分かりにくいのだ。ダンまち、ガイル、少し考えないと元の言葉に変換できないのは僕が染まっていけないためと思いたい。

「次の時間、英語かあ。予習してきた？」

「当たらなければどうということはない！」「貧弱ウ、貧弱ウ！」

本当に何言ってるんだろう。

だけど全部が全部分からないとも言いきれないから、僕も完全に別の人種とは言えないの……だろうか。

もちろん僕は自分の部屋に目の大きいキャラのポスターを貼っていたりしない。可愛いと思うけど貼って愛でようとは思わない。

だけど実はフィギュアなら一つだけ持っている。

それは薄紫の長い髪を持ったセーラーとミニスカートの美少女フィギュアだ。ポーズは別に変なものじゃない。たまたま街にある中古用品のチェーン店に並べられてたのを見つけ、それだけが妙に気に入ったので思わず買ってしまった。

それに似ていたんだ。

僕は最近「エンジェルズ」というVtuberを少し追っている。

もちろん周りのヲタクの人ほど多くのVtuberを見てないし、入れ込んでもいないんだけど、その「エンジェルズ」だけは見てしまう。

だって面白い！

なんかやけに気の短い黒髪の姫様も、明らかにキャラを自分で確立できていない猫耳

も、ダンジョン探索パーティーの前衛が似合うような長身ナイスボディだけど常に仏頂面の女剣士も、一人くらいは絶対欲しいツンデレ幼馴染も。

この四人のコントが絶妙に滑り続けているんだけど、それがまた楽しいんだ。

そして僕は四人の中で一番「ミカミカ」というツンデレ幼馴染が特別気に入ってしまった。あのフィギュアはそれによく似ていて、画面がそのまま三次元になったようだったから買った。繰り返すようだけど持つてるフィギュアはそれだけだ。

そんな僕は今日も学校に行き、放課後は当番だった廊下掃除をして、そして軟式テニスの部活まで終えた。

その軟式テニスという部活を選んだ理由が微妙なんだけど、適度にスマートな運動部で、適度に楽だからだ。

僕は決して体力自慢ということはないし、かといって将棋が得意とか絵が上手いとか、楽器ができるということもない。つまり選んだ理由としては若干ネガティブではあっても誰もが普通に考えるようなことだ。決して顧問の先生が美人だからというおかしなことじゃない。

「コトカ先生、じゃ、失礼します」「ソウタ君、はよ帰りー」

今日は帰るのがちよつと遅くなってしまった。

ボール集めに手間取ってしまったからだ。テニスコート周辺に生えている雑草のどころか柵を越えて野球部のグラウンドまで転がってしまったものを回収していたら、部活終了規定時間ぎりぎりになってしまった。

顧問の先生が校門の近くにいたため、そういう挨拶をしてから慌てて学校を出たんだ。

そこから普通に家への帰り道を歩く。

僕は友達が多くも少なくもないつもりだけど今日は一人で帰っている。

この街は旭川という大きな川が真ん中を流れ、その土手もけっこう広い歩道になっている。学校から家までの大半がその道だ。

僕はそこをボケつと歩いていたが、視線は少し上に向けていた。

なぜなら晴れの多いこの土地柄でも初夏の季節は特に空が澄み渡って綺麗だからだ。わずかな雲もはるか彼方に見える。それに初夏ならこの時間でも全然明るい。

視線を上げていたのが幸運だったのか？

いや、後から考えたら本当に幸運だったんだ！

「えっ……… ええっ！ 何だあれ!!」

それしか言いようがない！

最初は空のど真ん中に火花のようなものが散っているのが見えた。飛行機や雷なんかとは全然違う。音はしていないんだけど、いかにもバチバチという感じだ。次にちようどその場所の中心にポツリと灰色の染みがあるのが見えたんだけど、あれは穴？でもそれも直ぐに消えた。

見間違いか夢なのか？

だけど今度は細かい点が見えたんだ。しかも今度は消えることはなかった。

点々はぐんぐん大きくなり、やがてその理由が空から真つすぐ僕に向かって近付いているためと分かった。

そして……次第に点々が何なのか分かってくるが……

人？ いや、人じゃない！

人は空を飛ばないせいもあるけどそういう問題じゃないんだ！

て、天使!!

羽があり、白いコートみたいなものを着ているから一番あてはまるのは天使だろう。現実なのかどうかは別として。

それが十人以上の数で、先頭からV字型の隊列を成して飛んできている。

不思議だけど綺麗だな、と思ったのは最初のうちだけだ。

どこに来るといつてもなぜか自分に向かっている。この土手には今僕しかいないよ

うだからたぶん間違いない。

しかも結構な速さでぐんぐん来られてしまうのだから、怖くなってくる。

意味がわからないけど逃げる！

天使って、人間に悪いことしない存在のはず……

しかしその全員が剣とか弓を持つてるとどうということ！ 物々し過ぎる！

あつさり囲まれてしまった！

いくら僕が逃げようとしたって空を飛んでくる天使から逃れられはしない。

最後は背を向けていたのでどう隊列を崩したのかは分からないけれど回り込まれた。土手から転げ落ちるように河川敷へ降りたところで天使たちも僕の周りに着地し、そして前後左右どこにも逃げ場を失くしてしまった。

「あの、天使様、ですよね？ ぼ、僕に何か？」

やつとの思いでそこまで言う。

すると正面に位置していた天使がそれに答えてくれた。天使にふさわしい綺麗な声で。

でもしやべり方はなんだか苦しそうで、言いたくないみたいだった。

「神に仕える^{ケルビム}智天使の一人、アサエルだ。少年よ。用事というのは……つまり、その、我々と一緒に来てほしい」

第八話 剣のライバル

僕を連れて行く？

天使からとんでもないことを言われ、驚くとともに当たり前のことを聞いた。

「え、それは、どこに……」

「どこといつても、連れていくのは天界だ。神の命令によって君を召さなければならぬ」

「て、天界!? 召すつて、どういうこと!」

これには絶句した。

天界に召されるというのはいわゆる死ぬということじゃないだろうか!

こんなにあつさり僕は死ぬ? 確かに天使を見るということはそういうことを意

味するのかな……でも別に病気で死ぬのに。

「僕はもう寿命だったつて……でも何で……」

「少年、私も気の毒とは思っている。本当のところを言うとなら寿命でもないし死ぬわけで

もない。天界へ行くというだけなのだが、おそらく戻ってこれることはない」

「だ、だったら、余計どうして！　そもそもなんで僕が」

わけが分からない！

僕は物凄く楽しい生活をしているわけじゃないけど辛い生活でもない。腐れ縁の友達もいれば、猫も飼っている。普通の中学生なんだ。

いきなり人生を中断し、天界へ行きたくはない。

「今回は特別だ。だからせめてできることをしたい。一番良い形を考えたいし、それを私の権限で実行する」

「一番良い形って何？　みんなの記憶から消えるってこと？」

「そこまでは無理なのだが……　ここに偽装の得意なヨキエルを連れてきている。そこで、せめて川で溺れている子供を助けて代わりに消えるという偽装をしたい。そうすれば残された者たちのシヨックは小さくなるはずだ」

「それでも嫌だよ」

嫌に決まっている！

天界へ行くのも嫌だが、残された人間のことを考えると……

僕の存在が記憶から消え、最初からなかったものになるならマシだと思う。

でもそうじゃないなら家族や友達はきつと悲しむ。僕はそんなにいい息子でも友達

でもなかったかもしれないが、それでも悼んでくれるだろう。

「分かってくれ、少年。君がいなくなるのはもうどうしようもなく決まっていることなのだから。ただ単なる神隠しよりはそうした方がいだろう。そして君が消えた後の家族のことならば責任をもって見守ろう。必要な支援をするつもりだ。そのあたりで納得してもらえないだろうか」

僕に話してくれている天使アサエルはやっぱり苦しそうだ。

問答無用で何でもできそうなのに、僕に気を遣ってくれている。

たぶん個人的な優しさと責任感で僕の家族に対するフォローを申し出ているのだろう。なんとなくそう思える。でもやっぱり納得はできないけれど。

「むう、遅かったか！ ミカエル、急ぐぞ！」

「向こうはけっこう多いで。十人はおるようなやな。四枚羽クワツツドが二人だけ、残りは二枚羽デュアルみ
たいや」

「その程度、蹴散らす!!」

「ラファエルはやっぱり血の気が多いわ」

わたしとミカエルは急行している！

魔界のV t u b e r組から連絡があったのだ。

人間界で異能を持った者を見つけた。その者をなるべく早く確保してほしい、と。だからわたしとミカエルがその任務のため直ぐに出立した。

それでも一步遅かったようだ……

目的の人物は既に天界においても察知され、天使たちが遣わされていたとは。

大きな川の河川敷でその人物は天使たちに囲まれて拉致される寸前まで行っている。

だが最悪ではない！

まだ取り返しがつく。天界から遣わされてきた天使たちはそこその数がいるが、わたしとミカエルに敵うことはないだろう。

四枚羽^{クワツド}というのは我ら熾天使の直下に当たる智天使^{ケルビム}のことだ。

実はこれは魔界の者たちが天使をその外見で区別する時に使う蔑称のだが、我らは神に反逆すると決めた時からあえてこの言葉を使っている。

そして智天使^{ケルビム}よりも下、つまり座天使^{ソロネ}以下の階級は全て二枚羽^{デュアル}なのである。

「このまま連れていかせはしない！ ミカエル、直ちに突っ込むぞ！ わたしが四枚羽^{クワツド}を引き受けた。他を頼む」

そして急降下、わたしは目的の人物と四枚羽^{クワツド}の二人を確認する。

「む、アサエルとヨキエルだったのか…… ヨキエルはほぼ偽装専門だから戦力ではな

いが、しかしアサエルとは多少厄介なことになるな」

向こうの一団も気付いたようだ。

急遽話し合いらしいものを止め、目的の少年らしいものを確保しようと動き出した。しかしこつちも速い。

わたしが少年の前を猛スピードで飛びすぎり、牽制をかけた隙にミカエルが少年を保護にかかると。

そしてわたしは宙に弧を描いて戻ると、最大の障害になるであろう四枚羽クワッドのアサエルと対峙するように着地する。

「アサエル、わたしが来た以上もう無理だ。拉致は諦めろ」

「くつ、反逆天使のくせに！ やはり邪魔しに来たか！」

「アサエル、邪魔をしているのはそつちの方だ。少年に用事があるのはこつちも同じこと、このまま預からせてもらう」

「神の御意志で動く我らに何を言う！ 御命令は絶対だ！ そんなことはさせられるかッ！」

アサエルの返事はやっぱりそうなるか。相変わらずの奴だな。

昔からアサエルは忠誠心と責任感だけが頭に詰まっている奴だった。だからこそわたしも傷つけない。

「……アサエル、よく考えてみる。こちらにはわたしの他にもミカエルがいる。熾天使が二人、本気で戦えばもはやどうにもならないことは分かるだろう。素直に退いてはくれないか。こちらの目的はその少年であり、戦うことではない」

「神に逆らった者たちを前にむざむざと退くことはできん！」
「本当に頭の固い奴だ」

わたしとアサエルはどちらも退かない。戦うのはやはり必至のようだ。

互いにゆつくりとオリハルコンの剣を抜く。

反りのない細身の長剣である。純度の高い白い輝きがその禍々しさを隠し、優美にすら見せている。

横でメガネをかけたヨキエルがあたふたしているが眼中にはない。それよりもわたしはミカエルが目的の少年を保護したのを見て取り、安心する。もちろんそこへ下級天使たちが殺到しているようだが、ミカエルはうまくいなしている。

剣を振る。

二人がほぼ同時に仕掛けた剣撃は中央でぶつかり合い、高い音を立ててどちらも弾かれた。その威力の余波で空気がゆらめく。

続いて角度をわずか横に傾けた第二撃も同様だ。

そこからは高速で互いに仕掛け、防ぎ、逆撃をかける。

「強いな…… アサエル、さすがに天界最高の剣士と呼ばれただけのことはある」

「ぬかせッ！ 反逆天使などから褒められる筋合いなどない！」

五合、十合と打ち合うとアサエルの優勢がはつきりしてくる。

均衡が崩れ、やがてわたしは打ち負け、ついにその剣が手元から弾かれて宙を舞うことになる。

だが精神的に余裕があるのはわたしの方だ。

アサエルの方は勝ったなどと微塵も思っていないだろう。わたしに異能、アルティメットソード絶対切断がある限り。

「恥ずかしいことだ。わたしは異能に頼ることを覚えてしまい、やはり剣の鍛錬に甘さがあったとみえる。こんなに差を付けられるとは正直自分でもふがいない」

「だったら何だ、ラファエル」

「やつと名を呼んでくれたな、アサエル。昔はよく一緒に剣の練習をしていたのに……」
そう、昔は仲が良かったのだ。

天使は様々な個性があるが、剣を使う武闘派は案外少なく、その少数の中の二人だったから。本当に思い出深い。

だからこそアサエルに対しては最後まで異能を使いたくなかった！

アルタイムツートン
絶対切断は全てを斬り払うもの、それを受けることはできず、相手が剣士なら必ず傷つけてしまうからだ。本意ではなくとも。

しかしこれも武の定め。

実力を敢えて使わないのはかえって武人を辱める行為である。互いに武人と任じる以上、仕方のないことだ。

わたしは横にすつとんで転がり、そこらにあつた灌木の枝を折り取つて手に持つ。立ち上がるとそのひん曲がつた枝を両手に持つて再び対峙する。

だが、これで充分！

わたしの異能は立派な剣を持つ必要はどこにもなく、というか正確に言えば自分が剣だと思つたものが剣なのである。発動した異能が斬るのだから何を使つてもいいのだ。

「アサエル、腕一本もらっておく。しばらくは不便をかけるだろうが十年も経てば回復するだろう。異能発現、絶対切断!!」

アルティメットソード

「くうッ！」

本当に済まない。アサエル。

「……………」

「……………」

「へっ!？」

「えっ!？」

あれ？

いつものように斬撃の軌跡が…… 出ていないぞ。

異能が発現していない!!

なぜだ？ 相手がアサエルだから遠慮したということはないに、本当に絶対切断を出

したはずなのに！

こ、これでは曲がった枝なんかを振っているわたしが馬鹿みたいではないか!!
やたらと自信を持って変な技名を言つて……それで凄いいことをしたつもりになつ
ている妄想癖の子供と何ら変わるところがない。

周りから見たらとつても痛い奴だ!

まさかアサエルが何かしたのか?

いや、そうじゃない。

アサエルだつて口をあんぐりと開けて止まっている。

そもそもアサエルは腹芸ができるほど器用な奴ではなく、そんな奥の手があるなら最
初から言つてるだろう。

周りを見てもヨキエルだつて同様に驚いているし、下級天使に何かできるとも思えな
い。

「ラファエルー……! ちょっと、どないなつてんねん!」

その時、遠くからミカエルの叫びが聞こえてきた!

けつこう悲痛なものだ。

「あかん、ストームフレイア暴炎熱威ヒートが出えへん! なんでや!」

何としたことだ。向こうでも異能が発現できていない!

たぶんミカエルは下級天使たちを退けるのに自分の異能暴炎熱威ストームフレイアを使おうとしたのだろうか、それが出せないので焦っている。

これは地味にピンチかもしれない！

初めて経験する異常事態、こうなった原因は実のところ目の前にあった。

目的の少年は自分でも意識せずダダ漏れに異能を出していたのだ。

その異能、聖天調和スカイハモニーは一定の範囲の異能発現を強制的に抑えるというものだった。それを知るのはしばらく後のことになる。

第九話 微妙な異能

異能が出せない！

こんな経験は初めてだ！

むろん異能が使えないとしても、わたしとミカエルが熾天使であることに変わりはなく、基礎的に強い神聖力を持つているが……

それでも状況は良くない。

向こうは数が多いのに加えてアサエルという剣の達人がいる。異能を出せずにまともに戦えば良くて互角、堂々と打ち倒して目的の少年を連れていくことは望めない。

もはやあれこれ考えている時間はない。

だったらまだアサエルが驚いているうちにできることをする！

わたしは足元を思いつきり蹴り、アサエルたちへ目一杯小石を吹っ飛ばした。

「うわっぷ！ ラファエル、姑息な戦法を！ もはや熾天使のプライドも失くしたか！」

「うるさいバーカ！ バーカ！」

姑息でも何とでも言うがいい！ 石の多い河川敷というメリットを使ったただけだ。

ここに犬の糞の一つでも落ちていれば手でつかんで投げてやるところだがそう都合よく落ちてはいない。

自分でも正直ちよつと変わったと思わなくもないが、それはV t u b e rでめちゃくちゃ恥をさらしているうちに吹っ切れたのかもしれないな。怪我の功名というやつだ。ガブリエルに少しは感謝しよう。

そうしてからすかさずミカエルの方へ移動する。

見るとさすがにミカエルも熾天使、あまり剣技が得意な方ではないのにも関わらず、剣だけでなんとか下級天使を近寄らせてはいない。

わたしも下級天使を殴り倒しながら合流する。

そんなわたしを見てすつかり怯えたような目をした少年を無理やり抱えこみ、飛び立つ。

傍から見ればたぶんわたしの方が悪役にしか見えないだろうな。

少年もそう思ったろうが今は誤解を解く暇はない。

「させるかッ！ 追うぞ！」

もちろんアサエルたちも追って飛び、たちまち空中でレースを展開する。上昇、下降、

そして旋回だ。

わたしが少年を運んでいる分飛行にかなりの不利といえるかもしれない。

ただし元の馬力が違う。

熾天使の六枚羽は伊達ではない！

ほぼ同スピードになるが、そこでミカエルが身軽に飛び回り、適切な牽制をかけたおかげで引き離すことができた。

それでもアサエルたちが弓を使ったり剣を投げてきたりしたら大変にマズかっただろう。

だが向こうはそこまでしてくることはなく、最終的に逃げ切れた。

「弓は使うな！ あの少年に当たったらどうする」

そんなアサエルの声が遠くから聞こえてくる。

たぶん温情なのだろうな。

この少年を我らに持つていかれるくらいなら弓で射た方がいいに違いない。しかしアサエルはそういうことを決してしない。そもそも少年を無理やり天界へ連れていくことが嫌だったのだろう。それがブレーキになっていけば見逃しの格好になったといわけだ。

そういう奴なんだ。あいつは。

わたしは河川敷から相当離れた空き地を見つけて着地した。

少年は目を回してぐったりしているがそれは仕方ない。わたしもそこまで気を遣う余裕はなかった。しかし死んだわけではないので、ものの三分くらいで目を覚ましてきた。

「驚かせて済まなかったな。先ずは強引な手段をとったことを詫びよう。空中は怖かったのではないか。だがそれもこれも天界の者たちが君を拉致するのを阻止するためだったと理解してくれ。そして我ら二人のことだが……」

ん？

変だ。

この少年は聞いちやいない。というかこつちを見てもいない。

なぜかミカエルの方ばかり向いて、瞬きもせず目を大きく開けているではないか！

「ミ、ミカミカだ…… 三次元で、おっきい。動いてる！」

「……………」

なんだそれは。

一瞬の間を置いて、ミカエルがニタつと笑う。

わざとらしく薄灰紫の長い髪を手で上から下までふわりと広げたではないか。傾け

る顔の角度もいかにもそれっぽい。

おまけに足をそそそと動かし、いつのまにか少年から見たら斜め逆光の位置に回っている。

ミカエル、何の演出のつもりだ。

「うちのこと見とつてくれたん？ 嬉しいわあ」

「うわ！ エンジエルスってCGじゃなかったんだ！ どうして!? 凄い！」

おい少年。そこズレてるだろ。

言葉から察するとエンジェルスのウオッチャーだったんだろうが、ありがたいけれどそこに感動している場合じゃない。

本物だったら本物で問題があるとは考えないのか。

羽があるとか空を飛んだとかツツコミどころが他にてんこ盛りだと思うぞ。

まあ、あまりに非現実感があると脳がいったん逃避してしまうのは分かるんだが。

―― 僕の脳はキャパオーバーだ。

最初に天使を見たことや、天界へ行くという話だけでいっぱいいっぱいになってし

まった。本当のこととは思えない。

そしてどう返事をすべきか考えている間もなく、あの河川敷へいきなり別の天使二人が入ってきた、いや乱入してきた。

めちやくちやカツコよく剣で戦っていたようだが非現実過ぎてよく分からない。

だが途中からアルティメットソードとかいかにも中二病が思いつきそうなことを叫び、木の枝を振り回すのは意味不明だ。

これは重度の中二病患者の舞台劇なのか？ そうなのか？

そう思っていたらいきなり他の天使を殴りつけながら僕に突進してくると言うバイオレンス劇になり、そしてとどめに空中飛行だ。

はは、僕は何をどう考えたらいい？

ただし良い意味で驚いたことがあった。

ミカミカがいたんだ！

画面のままの姿で目の前にいる。身長は僕のクラスの女子とあまり変わらず、髪は長く、本当に可愛い。それが目の前で動いている！ この非現実だけはちよつと嬉しい。

そのミカミカが僕にいくつか説明してくれた。

ちなみにバイオレンス女剣士は *Virtual* で見た通りの仏頂面でミカミカに説明

役を譲ったようだ。

説明では、先に来た天使の一団が本当に天界なるところから来たもので、僕を拉致するためだったということを聞かせてくれた。

神というものは個人の事情など考えもしないことも。

自分たち二人はそれに対抗し、だから妨害にかかったことも。

僕はそれに対して半信半疑でうなずくしかできない。

理屈が通るといえば通るけど、本当かどうか確認のしようもないじゃないか。

しかし説明が僕自身のことには差し掛かるとさすがに異議を唱えたくなる！

「そんでな、君には異能があると思うんや。せやからうちらがここに来た。あの連中と戦ったのはたまたまかちあつたせいで、仕方ないことやつた。逆に言えばあいつらまで君を狙つたということは異能を囲い込むためとしか考えられへん。間違いない」

「よ、よく分からないんだけど…… その異能って何……」

「異能は異能や。どんな法則にも縛られず、使える特別な力のことや。もっぺん言うけど君もそれを持つとる」

「そ、そんなものが僕に？ まさか！」

「どんだん話が中二病になってきているぞ！」

「そんなことがあるわけが無い！」

そういう「自分は他の人間とは違う」とか、「見えている現実には真実ではない」とか、中二病の人間の典型的な考え方じゃないか。僕は中二だけどその恐ろしい病気にかかっていない……はずだ。

「ふーん、そういうものが無いと思うてるんか？ それも自分には。自覚がないだけで。実はな、ちよつと思いついたことがあるよつて、証明したるわ。暴炎熱威!!」

「……………」

「やつぱりやな…… なんも出えへん」

うわ、ミカミカも真正の中二病だった！

さっきの乱闘騒ぎの時にも同じセリフを聞いたような気がするが、いかにもラノベにあるような魔法詠唱という奴を恥ずかしげもなくまた言つてのけた。

でも別に何も起こらない。

起こるわけが無い。

むしろそれを聞いた女剣士が慌てたみたいだったけど、それだけのことだ。

「こつからな、少し離れるけどよく見とつてんか」

ミカミカは羽を一振りして、すつと浮かび上がった。

スピードを上げて言葉通り離れていき、たちまち小さくなった。もう声は聞こえない距離だ。

そして僕は驚いた!!

小さいミカミカの周りにその数十倍もの大きさの火球が出現したのだ!

きれいなオレンジの光、しかしそれはたぶん炎の熱によるものだ。

たつぷり十秒ほどしてからミカミカは炎を消し、また僕のところへ戻ってきた。

「あれがうちの出した異能や。炎が分かったやろ。でもな、君が側におるとあれが出せへんのや。これはもう事実やで。つまり君は異能を出せないようにする異能を持つとるというこつちや」

「え、僕の異能って…… あるとしてもそんなものなの?」

今のミカミカの話が仮に、本当に仮に真実だとしよう。

凄く微妙だ!

何て言うか、一番地味じゃないか! しかも使い道が見当たらないやつだ。

ちよつとだけ期待してしまつてたさっきの自分を殴つてやりたい。

「微妙やという顔しとるなあ…… でも、これは凄いんやで! ラファエルもそう思うやろ。うちら二人、さつきは無茶苦茶慌てたわ。あれほど慌てたこともないんちゃうか」

「ああ、ミカエル。少年のこの異能はまさに異能の天敵だ。思うにそういう性質の異能だから今まで自覚がなかったんだろう。周囲に異能者がいなければ悟られるはずがない」

「ほんまや。まあダダ漏れにされとるとちらも困るんで、使い方も覚えてもらわなあかんけどな。しかし何でやろ。そういう異能を持ったんは。たまたまかいな？」

実は僕に心当たりが全くないということはなかった。

僕の親はサラリーマンだけど、その親、つまりおじいちゃん神主なんだ。生きてる時にはその世界で凄い人だったらしい。もしかするとその道では結界みたいなものがあるのかもしれない。天使とは全然宗派が違うけど……

とにかく僕がその血統であることだけは確実だ。

第十話 一人の生徒

少年とミカエルのやり取りを聞き、異能の話がひとまず一段落したのを知る。

その不思議な異能の制御や使い方については後でゆっくりやればいい。

そんなことより、わたしは間近な問題を考えていた……

「ミカエル、先ずはこの少年をどうする？ 天界が目をつけている以上人間界に置いて

おくのは危険だ。諦めてくれればいいが、奴らがもう一度襲ってくる可能性が高い」

「そらそうやな。このまま置いておくのは無理やな…… そうはいつでもラファエル、

拉致したらそれこそ天界と一緒にやで」

「しかし……」

「いくらこっちが正義やと言ったところで、この少年にとっては同じことになってまうわ。連れ去るんなら」

だが、心苦しいけれども仕方のないことかもしれない。

同じ拉致とはいえ、天界へ行くよりは我々と一緒の方がこの少年にとっていいことである。それは確かだ。なぜなら我々ならばいざずれ少年をここへ戻す、それを決めているのだから。

しかし当座はいかんともしがたいことで、仕方なく失踪という形を取らざるを得ないのか。

「ここで思いがけずミカエルが答えてきた。この難題を解決する方法があると言う！」

「ラファエル、何とかできるかも知れん。その方法は二つ考えられるで」

「えっ！ ミカエル、何か思いついたのか！ 凄いな」

「いいアイデアかどうか分からんけど一応言うで。一つはこの少年を人間界で暮らせせるけど監視をつける。また天界が襲ってきたらいち早く逃がすためや。うちらから一人選んで、猫にでも化けてこの少年の家と学校を見張るつちゆうわけや」

「なるほどなあ…… しかしどうだろう……」

それも一つの方法だと思う。

だが実際には難しい面があるのではないか？

天界がさつきより大勢で来てしまえば守り切れないかもしれない。それに見張るといつても完全ではなく限界があるだろう。

「まあちよつと無理があるやろな。もう一つのアイデアが本命や。それはな、見張るんやなしにこの少年そのものに化けるんや。当座はそうやって少年の代わりに暮らせばええやろ」

「ば、馬鹿なこと言うなミカエル！ よつぽど無茶だ!!」

どう考えても無茶苦茶にしか思えない！

この少年に化けて暮らす？

こつちは誰が化けるにしろ人間界の作法はまるで知らない。正確に言えばこの時代のこの地域のことを知らない。無難な振る舞いができるものか。

家にいるだけならともかく少年は学校に行くのだ。

そこで大勢の人間の目をやり過ごすことなど無理無理、不可能に決まっている。

「アイデアを出してもらつて言うのもなんだが、破綻の未来しか見えないぞミカエル」

「逆に考えるんや。失踪で周囲を心配させるよりはまだマシやと思わんか。多少変に思われても」

「多少で済むわけがない」

確かにこの少年の姿をしていけば、一応失踪には思われないうことだけは確かだが……
怪しまれる。絶対。

しかし今は考えている暇もない。

とりあえず少年の家へ移動しなくてはならないのは、何のかんの言ってもう薄暗闇の時間だからだ。

少年には普通に帰宅させる。帰りが遅くなったことで何か言われたようだがそのまま自分の部屋に移動し、窓を開けてもらう。

少年の部屋は二階にあるのでわたしとミカエルが窓から入るには都合がいい。

「せ、狭いですがどうぞ」

少年はまだ非現実に対応できなくて目が泳いでいるな…… そんなことを思いながら少年の部屋にお邪魔したのだが、直ぐに見えた物がある！

机の上に大事そうに置かれている物だ。

「わ！… これフィギアや！」

「ん？ 何かと思えば人形か…… しかしこれはどう見てもミカエルだ」

すると少年は大慌てで隠しにかかったではないか！

別にそんなことはどうでもいいのに。

この少年がミカエルのファンで、わたしのファンではない…… いや別にほんつとにどうでもいいことだぞ！

「いやあ、ファンてのは嬉しいもんやな！　というわけできつきの話の続きや。うちがこのファンの少年をガブリエルたちのところへ連れて行くのがええやろ」

「む……　まあ……」

「というわけで自動的にラファエルが化けるしかないなあ」

「何でそうなる！　しかも化けるの確定か！」

く、くそ……

だがそれ以上のアイデアは確かに無さそうだ。

少年に身代わりのことを説明すると当たり前だが難しい顔をして黙り込んでしまった。

やはり不可能に近いと思っっているのだな。しかも訝しんでいるのは、よほどわたしに對して信頼感がないらしい。

とりあえずわたしは少年の姿に化けてみせる！

それもまた天使としての技法の一つなのだがコピーできるという意味ではない。

そのため完全に似せられるわけでなく、それらしい年恰好にして、髪や顔のパーツを近付けるというだけだ。

しかしながら、最初から違うと疑いを持って見るのでない限り見破られることはまず

ないレベルになる。

わたしとしては姿を変えると窮屈で、地の時より格段に能力を出しにくくなるのだが、この場合はあまり問題ではない。普通の少年として振る舞うだけなのだから。

化けたわたしを見た少年はもちろん驚いている。

たまたま部屋に入ってきたこの家の猫も驚いて腰を抜かしたようだ。

「どうだ少年。なかなかのものだろう。きつとうまくいくぞ」

「確かに見かけだけは僕だ……」

実は自分では身代わり作戦がうまくいくなんて思っていない。

いや無理だと確信に近いものがあるが、少年の手前見栄を張った。

「ラファエル、いけると思うで。ほな一日試して、そつから考えてみればええ。君もとり

あえず一日目の報告を聞いてから判断すればええねん」

他人事過ぎる言い方だが、ミカエルがそう口添えたことで、少年も渋々納得したようだ。

そして一日が過ぎ去り、翌日の夕方になる。

わたしは少年の姿で学校に行き、そこで過ごし、普通に帰ってきた。
約束通り少年とミカエルに学校での出来事を話す。

しかしわたしの気分は軽い！

なぜなら少年に化けて過ごすのは思ったよりも簡単だった。

我ながらうまくやり、無難に過ごせたという自信がある。

心配は杞憂に過ぎなかったのだ。

「どんなやった？ ラファエル」

「ああ、そんなに大したことはなかったぞ。自分で言うのもなんだがうまく適応できたと思う」

「人の世はそんなに変わっていないうちゆうことやな。せやけどようやったでラファエル」

「ではさっそく報告しよう。少年も聞いて安心するがいい」

朝はぎりぎりまで寝坊して朝食も摂らずに学校へ行くことにした。それは家族と顔を合わせるのを最小限にするためだ。

そしていよいよ学校へ行き、クラスメートを含む多数の生徒たちとの交流をした。もちろん会話無しというわけにはいかないが、それさえも十二分にこなしたということだ。

「先ずは学校に着いた時のことを言おう。愛想の良さそうな女子生徒から『おはよう、ソータ君』と声をかけられたのでな、『お、愛想がいいな。とても可愛いぞ』と気分よく返しておいた」

「へ!? ほんまか」「え! それきつとサキちゃんだ! 本当にそう返したの? 可愛いつて? うわああああ」

「いやいや向こうもかなり喜んでいたようだから何も問題はない。それで二年四組の教室を見つけて入り、教えてもらった場所の机と椅子まで行ったが問題があった。男子のグループらしい者が集まっていて先に座っていたのだ。わたしが『斬りたいのか貴様』と言ったら素直にどいてくれた」

「……」「ぼ、僕のキャラじゃない! どうしよう」

「学校というからには授業がいくつかあったが、どれもこれもさっぱり分からんな。特に数字のものはちつとも分からん。その上小テストというものがあつたのだが白紙で出した。それは仕方のないことだろう」

「当たり前や。知らんもんはしゃあない」「そんな! 困るよ! 先生を馬鹿にしたと思われたら! とうか天使って学力はその程度なの!?!」

「()からが面白いぞ。休み時間はさつきと違う男子グループが近くにいたのだが、何

やら面白いことを言っていた。『異世界』がどうかという話だったが、その中に『天界』という言葉があったのだ！」

「な、なんやて！」「あ、それきつと難しい話じゃなく、ヲタの人たちがラノベの設定の話をしてたんだ。まさかそれから……」

『天界』について語るとは殊勝な若者たちではないか！　そこでわたしは天界と天使について休み時間を目一杯使って説明しておいたぞ。特に熾天使について念入りに。な
あに、本人が言うのだから間違いない」

「まあそうやろな」「え……」

「グループ全員がとても真剣に聞いてくれて、最後には『ソータ氏、なかなか深くて感服奉った』とか、『拙者も感心したでござる』とか言ってくれた！　おまけにその周囲からも注目を浴びていたくらいだ。とても気分がいいな」

「へー、おもしろいな」「僕もヲタの仲間に認定されちゃった！　まずい、みんなにもそう思われた！」

しかしこんなことは序の口、本当の問題は放課後にあった。

僕はこのポンコツ天使の盛大なやらかしを聞かされてしまう。

第十一話 ダメかもしれない

な、何を言ってるんだろうこの天使は……

ポンコツ過ぎる。

ちっとも学校でうまくやっていないじゃないか！ いや逆に何でうまくいってると
思えるんだ？

……
そこからともんでもない話が続いていく。ああ、学校における僕のキャラはいつたい

「放課後は部活動とやらで球遊びをやっておいたぞ。まあ本当に遊びだ。最初のうちこそ
そ体に向かつてきた球を絶対切切断で斬って捨てたが、途中からはうまく対応できた。
あのラケットというものでも剣に見立てれば使えるな。ああ、心配することはない。
斬ったのは最初の何回かだけだ」

「ちよつとやり過ぎちやうか」「ま、まさか軟式テニスでボールを斬るって…… 絶対お

かしいでしょ!! しかも何回も!」

授業が終わってそれでお終いではなく、放課後にはそんなことまで…… 周りはいつたいどんな顔をしていたのだろう。

「いやそれよりも面白いことがあった。球遊びも終わって歩いていたら、目に留まったものがあつた。なんだ、学校というものにも剣を振るう場所があつたんじゃないか。少年、部活動でも剣を選べば良かったのにな」

え? 学校の中で剣? それはたぶん剣道部のことじゃないのか……

嫌な予感しかない。

いや、実際は予感以上のめちやくちや酷いことになっていたことを聞かされることになる。

このラファエルという天使はやはり剣が大好きなようだ。だからたかが中学校の剣道部の練習にも目が釘付けになつたらしい。それでも見ているだけなら問題はなかつただろう。

だが剣道場の横で、余計な言葉を言つてしまった!

「なるほど面白い。あの竹で作つた剣で打ち合ひをしているが、真面目にやつているようだ。しかしレベルとしてはだいたいバラバラだな。修練が足らんのだが、まあ学校の部

活動とかいうものでやっているのだから仕方がないのか」

「…… お前、今何言った？ どうして剣道部を上から目線で言えるんだ？」

ラファエルの言葉がたまたま聞こえてしまった剣道部主将が咎めてきた！

それはそうだろう。修練が足りない、つまり弱いと言われたようなものだからだ。

「ああ気を悪くしたのなら済まない。本当にそう思ったからつい口に出してしまったが含むところはないんだ。それに学校のついでと思えば悪くないぞ。百年も練習したわけではないのだから当たり前とも言える」

「だからそれが上から目線だつて言うんだ！ 本当に剣道部舐めてるだろ！」

「そんなことはないから気にせず修練を続けてくれ。そうだ、お詫びに一つアドバイスをしてやろう」

「何だそれは……」

「見たところ君は剣の引きが遅いな。それは重心の移動を意識していないせいだろう。そこを直せば技の切り替えがずっと良くなり、連撃がきれいに行くと思うぞ。剣の先輩として聞いておいてくれ」

しかしこれで剣道部主将はよけい苛立ってしまった。当たり前といえば当たり前だ。

「なに、先輩だど!? お前は同じ二年だろ！ ……なるほどそうか、今は剣道部ではない

が剣道をやった経験はあるということか。だったら自分で剣道部のレベルを確かめてみればいい。防具を付けて上がれ！ 現役で剣道をやってる者を馬鹿にできるか、俺が教えてやる」

剣道場は思いつ切りざわめいた。

ふらりと立ち寄った部外者が言いたい放題言つたせいで主将が激昂している。

良いか悪いかでいえばこの部外者の方が悪いかもしれないが、それは大したことではなく言い方だけの問題だ。それで剣道場に上げるとは普通では考えられない。

間が悪かったのだ。

たまたまこの時間、剣道部の顧問の教師がいなかった。そして主将も本来はそれほど気の短い人間ではないのだが、中総体が終わって主将に任命されたばかりで自負心が過剰だった。笑つて見過ごせる余裕がない。

ほんの少し落ち着きがあつたなら、そのアドバイスが本当に的確なものだと分かつたはずなのに。

そうではなく主将は剣道場以上に上らせて試合をやるうとしている！

「なるほど君はわたしに実戦形式で教えを請いたいのか？ それは殊勝なことだ。確かにお手本をやってみせた方が早いな。いいだろう。わたしも別に急ぐわけなし、少し

修練に付き合っつてやる」

ラファエルもその気になった。すっかり剣の手ほどきをするつもりだ。

その時、ラファエルを押しとどめるために飛び出てきた生徒がいる！

剣道の防具で顔は大半隠れているが、それはラファエルも知っている者だった。

「ソータ君何してるの！ 止めた方がいいわよ！ どういうつもりであんなことを言ったのか分からないけど、剣道つて防具があつても当てられたらけっこう痛いよ。主将が手加減してくれても少しは痛い目にあつてしまっわ！」

「手加減？ なんのことか分からないが修練は真面目にすべきだ。君はそういえば……たしか今朝挨拶をしてくれた少女だな。ということはわたしを心配して言ってくれたのか」

「も、もちろんよ。だってソータ君は剣道の経験なんて無いはずだもの。小学校からそうでしょ」

「ん、わたしを昔からよく知っているようだが」

「それは……」

その剣道部の女子生徒は少し下を向いて黙ってしまった。もちろんラファエルの側は女子生徒の複雑な気持ちに気付きもしない。

だがそこへ先ほどの主将が苛立って声を飛ばしてくる。

「おい女子部のサキ！ 邪魔するな！ そいつにちよつとだけ分かせてやるだけだ。剣道部が遊びじゃないっていうことを」

「何よ！ 女子部主将として言う権利があるわ！ 勝手なことしないで！」

女子剣道部主将のサキという少女はこの無謀な試合を止めさせようとする。

しかし肝心のラファエルはいえ、さつさと防具を身に付け、既に竹刀を持って道場の中央に向かっていているではないか。

「止めようとしてくれるのは嬉しいが、心配には及ばない。なあに他のことならともかく剣ならば経験の差は何千年もある。かすらせることもないだろう。それに実戦ではなく、マルコキアスが相手でもないのだから気楽なことだ」

全く意味不明の言葉を言っているが、なぜか物凄く自信を持っていることだけは伝わった。

ついに剣道場の中心に男子剣道部主将と一介の生徒に化けた熾天使ラファエルが対峙する。

もちろん試合になるわけではない。

この中学校の剣道部は強豪であり、その主将ともなれば力量も高く、この県では少しばかり名前が知られている。

だからこそ相手のラファエルの実力をその構えだけで推し量れるのだ。

まるで大滝を目の前にしたようなもので、竹刀を上段にしたまま動けない。

「馬鹿な…… 全く隙が無い。こいつ何者だ」

しかし言い出した側が何もしいわけにはいかず、それに周囲の目もある。

ついに主将は焦って攻勢に出ていく。

「ほう、思ったより真つ直ぐな打ち込みだな。筋は悪くない。ではもう一つアドバイスを言うが顎は常に引き、視野を広く保て」

「う、うるさいっ！ お前なんか！」

ますます激しく主将は竹刀を繰り出す、もちろんラファエルはその全てを余裕で躲す。昔、アサエルとこうやって剣の修練をした時があつたな、などのんびり昔を思い出しながら。

二分もこれが続いていると主将の方が息が切れてしまう。それなのに一太刀も有効に浴びせられない。こうなればもはや勝敗など誰の目にも明らかで、ラファエルから攻撃に出なくともその力量は冠絶している。周囲はその驚くべき成り行きに茫然として眺めるほかない。

ラファエルはそこで終了にしてもよかったのだが、この主将のために一度だけ攻勢に出た。

素早く前に出て竹刀を絡ませ主将の手から竹刀を奪い取ったのだ。剣道としてはかなりの高等技術であり、そうされた側はもちろんショックを受けてしまう。ラファエルは敢えてそうすることで実力の差を教え、主将がよりいっそう剣の修練に励むように仕向けたかった意図がある。

ところが主将はなおも引き下がらず竹刀を拾ってまで続けようとした。

内心では思わぬことに愕然とし、とても敵わないと思いつつも若さゆえの意地があるのだ。

「根性が必要な時もある。だが今はそうではないぞ。素直に実力を認め、これからの修練の糧とすべきだ」

「……」

「引つ込みがつかないのだろうが、きつかけを与えてやってもいい。いいか、今から絶対に動くなよ。動いたら首が飛ぶぞ。異能発現、絶対切断！」

アルケメットソード

何が起こったのか誰も分からない。

理解できる範囲をとづくに超えている。

主将が中段に構えていた竹刀、それが柄を残して根元から斬り飛ばされた！

第十二話 選手交代

もはや主将も竹刀の柄だけを持ったまま動けなくなる。いったい何がどうなって竹刀が折れるなんてことが起きたのか。

その様子を見届けるとラファエルは防具をはずし、悠然とその場を去っていく。

「か、かつこいい…… ソータ君、クラスでおとなしくしてるのもいいんだけど、今も最高……」

見守るサキという少女がそういう眩きを漏らす。熾天使ラファエルが化けたソータと分かるわけがない。

試合が始まる前はとても心配していたのだ。

竹刀がいくらただの竹の棒で、防具もあるといっても、打ち込まれたら痛い。これに分かるのは経験者だけだ。

明らかに剣道の経験のないソータが誘いに乗っているのも意味不明だが、たぶんその痛みを想像してないせいだろう。それにしてもうかつ過ぎる。普段はおとなしく慎重過ぎるような態度なのに。

そういえば今日のソータは、言うこともやることも何かしら変な調子だった。それは小学校で度々同じクラスになり、幼馴染を自称しているサキだからこそ気付いたことだ。とにかく、こんな無謀な試合は止めさせなくては。

だが心配は嘘のように消え去り、驚きが変わった！

ソータは竹刀を手にしたとたん、まるで熟練者のような動きをしているではないか！その構え、足さばき、経験者でないとは信じられない。気負いも無く無造作にしているのにもかかわらず無駄も隙もない。それをあのソータがやっていると頭が混乱するばかりだ。

試合が始まったらなおのこと強さが際立つ。主将ならではの鋭い打ち込みをひらひら躲し、あるいは軽くさばいて涼しい顔をしている。

もう技量において大人と子供ほどの差があるではないか。

この成り行きに驚くなという方が無理である。

サキはうつとりと眺めてしまう。ソータの雄姿に感嘆するばかりだ。

そして最後にクライマックスが用意されていた。

主将の竹刀がきれいに折られたのだ！しかも柄に近い根元の方だ。そんなことは通常にはあり得ず、折れるとしてもよほど強く打ち込み続けて先が割れるくらいなのに。

そんな常軌を逸する現象が起きる中、サキはかすかに聞いた。

ソータが何か魔法の詠唱のようなものを言ったことを。

そしてその直後、ソータの持つ竹刀が微妙に光を放ったことも見間違いだらうか？

ラファエルは自分でも思わぬ充実した学校生活を送り、意気揚々と帰ってきた。

最後に本領を発揮したのだから気分が悪いわけではないのだ。

「……というわけだ。学校というものも面白かったぞ。これは明日も楽しみだ」

「というわけじゃあらへん！ ラファエル、いくらなんでも派手過ぎやで。この少年がいかにもうやりそうなことだけしとったらええのや」

「でもまあ、とりあえず一日目だからな。少年もそう思うだろう？」

「……………」

も、もう勘弁して下さい

僕は心が折れそうだ。

このポンコツ天使は自分が何をやらかしたのかも理解していない。

僕の身代わりで行ったんじゃないのか？ 途中からその意識が飛んでいき、学校を工

ンジョイしてどうする！

とにかく明日以降もこんな調子では話にならない。

どんどん僕のイメージが違ったものになっていき、もはや別ものになってしまふ。これでは僕自身が学校に復帰した時どういう状況に置かれるか分かつたもんじやない。

「僕の意見ですが、ここは素直に失踪ということでお願ひします。まだマシだと思ひますから」

「ん？ 少年、なんだか目が死んでいるようだが気のせいか？ まあそうした方が楽といえは楽ではあるが……」

しかしここでミカミカが別の提案をしてきた。

「何言うてんねんラファエル。この少年は明日以降もラファエルが何するか分からんから心配しとるのや」

ああ、ミカミカは分かってくれている。

でもよく考えたら今日の無茶な身代わり作戦はミカミカが言い出したことだったよ
うな。

「いや馴染んでいただろう？ 悪くはなかったぞミカエル」

「ええから選手交代や！ うちが化けて学校へ行つたる」

「ん？ 明日はミカエルが行くのか？ まあそれでもいいのだが……」

僕はこの時、はつきりと作戦の中止を宣言すべきだったのかもしれない。しかしわずかな希望に縋り、その機会を失ってしまった。

ミカミカは僕に化け、やや身長が低いものの顔自体はいつそう似ていて、見分けがつかないほどの出来栄えだ。

「ではうまくやってくるで。報告を楽しみにしとつてや」

……　そして次の日、今度はミカミカが学校へ行ってきたわけだが、見たところ浮かれているわけでもなくしよげているわけでもない。

うん、それはきつといいことだ。

とにかく普通にしてくれればそれで充分なのだから。

「まあ普通に過ごしてきたわ。せやから特に言うべきこともないで」

「ミカエル、ではサキちゃんとも話すことはなかったのか」

「ラファエルの言つとつた子か？　やつぱり挨拶してきよつた。そんでな、『昨日の剣は凄かったけど、どこかで練習してたの？』と聞いてこられたんで、『練習はそうやな、昔からアホみたいにやつとつたかな』と返したわ」

「アホみたいとは何だミカエル。わたしの異能は剣を使うんだから仕方ないぞ」

「言葉の綾っちゅうもんや。そんなでな、どこでとか、いつとか、次々と聞いてきよってボロが出そうになった。ごまかそう思うて『まあええやん。おそらく剣はもうせえへんから』と言つても『できたら、私も一緒に練習したいし……』と粘つてこられてほんま困つたわ」

「確かに困るな。少年が復帰した時、剣など使えないのだから」

「今さら原因こさえたラファエルが言うなや。せやけどな、うちはラファエルほど鈍くないんでピンとくるもんがあつた。なんか別の意味があんのや。だから最後に言つたつた。『ははあ、たぶんやけど好きなんやな。そやろ』つてな。向こうは否定しよつたけど、『凶星やつたか。別にええと思うて』と言つたら離れていつたわ」

「ああ、そう切り返したのか。うまいな」

何がうまいな、だ!!

話が滅茶苦茶じゃないか!

僕のキャラでそんなこと恥ずかしげもなく言うはずないだろ!

そしてサキちゃんにどう思われた!? 馬鹿だと思われた? 自意識過剰? うわあ、

僕はもうどうしたらいいんだ。

そんな僕を見てミカミカは言つてのけた。

「向こうが好きなのはほんまやと思う。客観的に見れば分かるわ。君、隠れモテモテやん」

「馬鹿なこと言わないで！ サキちゃんとは家が近いから小学校も一緒だったただけだよ！」

「……ふーん。ならこれを一つのきっかけにしてもええんちゃうか。どっちも好きやつたら問題ないと思うけどなあ」

「……………」

「なあ」

「こ、この話は終わりにしたい。」

そこで僕は一つミカミカに確認したいことがあったので聞いてみた。

「普通にしてたとは聞いたけど、まさか異能とか使ったりしてない？ 昨日みたいな。もちろんそんなことはしてないよね？」

「……………」

「え!? どうして黙るの？ まさか使った！」

「いやラファエルのような派手なことはせんわ。人助けやからしやあない。それもほんのちびつとだけや」

「ミカミカの異能って炎のはず…… それで人助けとは全然意味が分からないんだけど

「！」

「いやほんまに大したことやなくて、理科の実験でのことや。」

ミカミカの話によると今日の理科はたまたま実験だった。

しかもそれは「炎色反応」という題目であり、本来ならけっこう面白いやつだ。これは理科が苦手な人でも楽しめる。

いろんな金属の入った水溶液を棒につけて火にかざし、金属の種類によつてそれぞれ赤とか緑とか違う色が出る。しかも澄み切った色でもとてもきれいなものだ。僕はそれを既に科学館でやったことがあるから知っている。

僕はもう話の先が読めるような気がした。

たぶん……間違いない。

「うちの実験班のガスバーナーだけ調子悪うてな。火がちっちゃいんや。どないしよか先生も皆も困つてしもうた。ここはうちがなんとかしたらなあかんと思つて、ストームフlea 暴炎熱威で助けたんや」

「……一応聞くけど、それ普通の火に見えたよね？」

「そんなに差はないで。ちびつとおつきいのは仕方ない。案外とな、最小限にする制御は難しいんや」

「ちびつと？ 机の上が火の海とか絶対してないよね？」

もう詳しく聞くのはよそう。心臓に悪い。

怪我人が出たとか学校が焼失したとかのニュースはないので大丈夫……だったのだらう。しかし天使というのはサービスピース精神があるというのか、理科の実験がうまくいかないとしてもそのままにしておくという選択肢は取れないのだろうか。

第十三話 探索

とにかく分かったことはミカミカも使えない。

昨日のラファエルほど酷くはないにしても、少なくとも僕の身代わりにはならない！
しかし周りも周りだ。いくら見かけが同じだといつてもこれだけのことをして全然
気付かないとは……

「ミカミカ、他には？ やらかしたことは他にもあるんでしょ？」

「なんか君、うちのこと疑つとるなあ。他には別に…… 敢えて言うと、学級会でのこと
があつたかな。今年の文化祭で何やるか話しとつたから」

「え、学園祭の話？ そういえば今ぐらいから決めて準備するんだよね。夏休み明けす
ぐだから。確か二年生はステージ発表だと思っけど、どうせやるのはダンスか演劇くら
いしか…… うちのクラスはおとなしいから大したことはしないはず。それで、何か
あつたの？」

「でな、うちとしては素直に意見言つたで。どうせやるなら天使が出る劇がええんちゃ
うかつて。そしたらな、昨日ラファエルが話しとつたグループの人らがえらい盛り上

がってしもたんや」

え?! うわ、それヲタの人たちのことだ…… 予想できる気がする。

「オリジナルの脚本書くって言うとしたで。衣装や小道具も考えるって」

「それあんまり良くないから! どんな劇か、だいたい分かるけど!」

この二年四組の出し物は無茶な演劇になってしまったのか。

かなり高い確率で舞台は異世界、主人公は転生しているのだろう。

そしてなぜか天使と魔物とモビルスーツが戦っちゃったりする。特定層には受けるかもしれない。

「僕のために学校に行ってくれて、二人の気持ちはすごくありがたいと思ってる。だから言い難いんだけど、僕の身代わり作戦は無理、充分分かったから。傷が浅いうちにそういうことはやめて素直に失踪にするよ。書き置きとかすれば、少しくらいなんとかなるだろうし」

「せやけどなあ…… では見とってや」

するといきなりミカミカは猫に化けた!

髪の色と同じ、紫がかった灰色のとても美しい毛並みを持つ。

こんなにも可愛らしい猫ならば誰もがほっこりする……はず。

大きさがこの半分ならば。

「デカい！ デカ過ぎる！」

とにかく大きさが全てを台無しにしてしまい、かわいいどころではない。うちの猫もこれを見て泡を吹いている。

どうしてこうなってしまうのか、それをラファエルという天使が解説してくれた。

「うむ、猫に化けるのはウリエルの専売特許だと思っていたのだが、ミカエルもなかなか上手いものだ。しかし確かに大きすぎる。少年、こうなるのは仕方がないのだ。我らは化けるといっても元の大きさからあまり大きいものや小さいものには化けられない。だからこそ今まで虫などに化ける作戦は考えなかった。とにかく、ミカエルは猫で学校に潜入する気なんだろうが、目立って仕方がないな」

すると猫の姿から元に戻ったミカミカが残念そうに言う。

「無理やったか…… よし、では最後の作戦や！ クラスでな、休んどの人間がおるやろ。今日聞いたで。二つ後ろの席の人間が長いこと休んどのってな」

「え…… 二つ後ろならきつとネイナちゃんのことだと思っけど、この学校に転校してきてから馴染めなくて半分不登校になってるのはその通りだよ」

「だからや。君は普通に学校へ行けばええ。うちかラファエルのどちらかがその人間に化けてクラスに入るんや。それなら見張るのもばっちりになるで」

「無茶だよ！ ネイナちゃんの顔はちつさな写真くらいしかないし。もし化けられても学校に行ったらすぐに連絡が行ってバレルよ」

結局はこの作戦が敢行された。つくづく僕は押しに弱い。

……そしてわずか半日で失敗してしまった。

誰かに見破られたのではない。不登校が長いと誰も顔をすっかり覚えていないし、そんな生徒はもちろん友達も少ないのだから問題はなかった。

そうではなく、この作戦はもともと僕を見張って守るためのものだったはずだ。

それなのに僕の方がハラハラして見張ったら本末転倒じゃないか！

ラファエルの方がネイナちゃんに化けて来たのだが、やつぱりというべきかその行動がいちいちおかしいんだ。

授業で体育があつたんだけど、それはたまたまバレーボールだった。

今のところ僕が傍にいれば天使も異能とやらを使えないらしい。だからバレーボールをぶった斬つたりはできないだろう。

そのために安心と思いたかった……しかしダメだった。

悪気は全然ないんだろうが、普通の女子中学生の力加減が分からないものだからやり過ぎたりする。おまけにこのラファエルというポンコツ天使は負けず嫌いなところがあるので始末に負えない。

僕は慌てて試合途中なのに「ネイナちゃん具合が悪そうだ！ そうなんだよね！」なんて言い訳しながら無理やり連れ出さなくてはいけなかった。またしても僕は全く本意じゃないのに目立ってしまおうとは。

そうしなければ、異能は使えなくとも飛ぶことはできる以上、この天使がグラウンド上空何メートルからスパイクを打つか分かったものじゃない。

そして僕がポンコツ天使の手をがっちり握って引いていったら、なぜかサキちゃんが凄く睨んでいた……

他にも注意はてんこ盛り、二日前には僕の姿で過ごしていたため、絶対やらかすと思ったことをやっぱりやらかしてくれた。ネイナちゃんの姿で男子トイレに入ろうとしていて、僕が全力で止めた。天使は本来トイレに行く必要はないのでどうでもいいことだと思っていたらしい。

これでは僕どころか姿を借りているネイナちゃんにまで激しく迷惑が行く。いずれ不登校から復帰してきた時に申し訳なさすぎる。

もう早退という形にして帰ってもらった。

僕の方もちょっと休むけど心配しないように皆んなに伝えてから帰った。しばらく失踪という形になっても仕方がない。

ミカミカも申し訳なさげだったけど、こうなれば小細工は止めて僕を安全な隠れ家に連れて行くしかない。

僕は簡単に荷物をまとめて、一緒に出発した。

「着いたで。んんんや」

そして天使たちの隠れ家というところに到着した。

あらかじめそこには他にも天使が二人いるという話を聞いていたのに、誰もいなかった。

「あれ？ おかしいなあ。ウリエルとガブリエルがおらん。ソータ君を紹介せなあかんのどこに行つたんや」

「ぼ、僕のことはいいいから…… 僕はその辺の隅にいるから」

「いや君が主賓やで。何べんも言うけど貴重な異能使いやから。しかも人間の。堂々としとつたらしいのや。あ、食べ物とかは充分用意したる」

そうはいっても……

僕は尋常じゃないアウエー感の中にいる。

その場所は例えていえばジャングルっぽいなものだった。やたらと葉っぱが大きくてよく分らない植物が生えていて、動物？みたいな鳴き声が時折聞こえてくる。

いやジャングルにしてもなんか妙だ。僕はジャングルなんか行ったことはないけれど、熱帯で暑いものだろう？ しかしここは決して暑くはなく、さつきまでいた初夏の岡山市と変わりない。結局、どこなんだろう……

「ああ、ここはどつかの国やないで。実はな、魔界の入り口や。人間界とちようど境目のあたりやな」

「ま、魔界！ そんなところ！」

僕はとんでもないところへ来てしまったのか？

悪魔とか絶対見たくないから！

「いやいや魔界いうても危険なことはあらへん。うちのルシファー姉様が用意してくれた場所やから。というよりもう天界が動き出した以上、人間界で安全なところはどこも無いのや」

え!?! ルシファーって、あの大魔王サタンの別名なんじゃ…… 怖すぎる。僕は思わずとつて食われる進○の巨人を思い出して身震いしてしまう。

そんなことを話しているうちに、ラファエルの方が仲間の天使たちの書き置きを見つ

けたらしい。それによると僕ではない別の異能使い候補を探しに出ってしまったのとどだ。つまり入れ違いになってしまっている。

実は、ソータを探すためにラファエルとミカエルが出発した後、ウリエルとガブリエルの元にルシファーが訪ねてきていた。

「異能候補者をまた見つけたそうよ。アシユタロトの異能^{ファインダー}見眼もやるもんだわ。よしよし」

「だったら今度はボクとガブリエルで行ってくるよ！ どんな異能なんだろう」
ウリエルはさっそく反応している。

しかしガブリエルはなぜかそこまで気軽な感じではなく、むしろ憂い顔だ。そしてルシファーに自分の聞きたいことを尋ねる。

「のう姉様。異能者をかき集める、その基本方針は正しいし、それしかないと思っただがどこまで集めれば戦いを始められるのか、先が見えんのじゃ。天使たちの護りを突破することは目算がつけられても、神を倒すにはそれこそ際限なく異能者が要るのでは」

この問いはもつともなことだ。ガブリエルの不安は言っても仕方のないことだとは

本人が一番よく知っているし、誰もそれに答えられるわけがない。それでもルシファーの姉様に言ってしまったのは、ガブリエルらしくもない甘えの発露であった。

「ガブリエル、それが気になるのね。もちろん、それも考えてるわ。たぶん十二人ね、ガブガブ」

「その口癖はやめ…… えっ!? なに? 十二人?」

「それはねえ、聖なる数は十二、決まってるでしょ。だから十二人の異能者が揃ったら始めるわよ」

「なるほど……」

ガブリエルの意に反し、姉様は目標を持っていた!

異能者を集めるべき数は十二人ということだ。ガブリエルとしては姉様が確かな根拠で言っているのではないことくらい理解しているが、十二が聖なる数であるのもその通りだし、そこにあやかかって悪いことはない。

だがそうになると、熾天使で四人、魔界で四人、今ラファエルとミカエルが捕捉しに行った一人を無事に確保したとしても三人は足りない。逆に言えばあと三人集めたらいい。

「よし、では行ってくる姉様。ウリエル、急ぐぞ!」

「わわ、ガブリエル急にせかさないでよ。その異能者の情報も聞かないうちに」

「ああそうだった。妾としたことが焦り過ぎたわ。それで、もらった情報はどんなもの

じゃ？」

そしてガブリエルとウリエルはアシユタロトからの情報を確認したが、それはなんとも意外なものだった。

第十四話 とても残念

「アシユタロトが見つけたっていう異能者の配信はこれみたいだよ」

ウリエルがそう言いながら、起動してV t u b e rの画面を映す。

聞いたところ、今度の異能候補者は姉様ユニットや熾天使ユニットのウオツチャーではなく、V t u b e rをやっている側にいたそうなのだ！

先ずは少しでも情報を得るため、その異能持ちがやっているというV t u b e rの配信を見る。ちなみに配信から住所を特定することは通常できないが、そこはアシユタロフアインダーの異能見眼、たちまちのうちに絞り込みに成功している。

「は〜い、ラッチーのお時間始まりい！ 今日と一緒に健康体操をするんだよい！」
そんなありきたりの配信画面だった。あまり工夫もなく、当然ウオツチャーの数もそこそこでしかない。

しかし、情報を得るには少し見るだけで充分、勘の鋭いウリエルだけでなく、ガブリエルにも配信者の見当がついてしまった！

何とそれは以前からよく知っている者だった……

「まさかそんな、自分の目が信じられない！　これはラグエルだよ！　あるとき死んでいたんじゃないの！」

「妾も信じられぬ。じゃがその通り、これは確かにラグエル……」

二人が揃って絶句するには理由がある。

かつて熾天使の四人が天界へ挑んだが、その時熾天使だけではなく少数の天使は説得に応じて味方してくれていた。そこには熾天使に次ぐ^{ケルビム}智天使が二人入っていたのだが、その中の一人ザドキエルは討ち死にしまった……

そしてもう一人の^{ケルビム}智天使がラグエルだった。

乱戦の中で行方が分からなくなり、その死を確認していないが、きつと死んだと思われていた。

「ホントにラグエルなら、生きててくれて良かった！　でもなんでV tuberなんかしてるのかなあ」

「ウリエル、それはたぶん我らが姉様を見つけようとしたのと同じことなのではないか？　V tuberという方法で合流しようと思いついたのじゃろう」

「でもそれは変だよ？　今まで会おうと思えばいくらでも会えたはずだし。隠れ家を今

の場所に移したのは最近のことなんだから。ボクとしては本当にラグエルなら会いに来なかつた方が不思議なんだけど……」

「そうじゃな……もしかすると会いたくない理由があるのか。我らを恨んでいるとか、な。あの気のいいラグエルに限ってそんなことはないと思うのじゃが、しかし……」

その可能性がないわけではない！ 悲しいことに。

せつかく熾天使たちの方に味方してくれたというのに、戦いでは天界の軍勢にあつさり敗れたのだ。もちろん戦いを引き起こした熾天使としては、敗れたとはいえ戦い自体は正義だと言いたい。

だがラグエルの立場で言えばどうだろうか？

ただ単に巻き込まれてしまったとも言える。

口車に乗せられ、戦いでは負け、もちろん天界での居場所を失ってしまった。確かにそう考えれば熾天使たちを恨んでも不思議ではないのだ。

「と、とにかく会えば分かる……」

これは非常に気の重いことかもしれない。

ただしラグエルを巻き込んでしまった以上、自分たちには恨み言でも聞いてやらなければならぬ義務がある。

そして二人が見つけたのは本当にラグエルだった！

丸眼鏡をかけて、小柄で茶色のショートカット、いい意味でラグエルは熾天使に次ぐ位階である智天使ケルビムとしての威厳を少しも持っていない。その姿は何も変わりなく負傷もないようだ。

「ラグエル、ボク本当に心配してたんだ！ 死んでなくてよかった！」
ウリエルがそう叫ぶ。心からの安堵の言葉だ。

だが、それを聞いたラグエルは予想外の行動に出た！

「スライディング土下座ー！ツッ!!」

「うわツ、ラグエル、何をしておるのじゃ！」

何とラグエルは出会うや否や、二人の前に思いっきり土下座をした。

これもまた予想の斜め上を行き、理由が分からない。

「す、すいませんでじだあああ！ お詫びのしようもなくでえー！」

「こ、これ泣くな！ いったいどうしたというのじゃ」

そしてラグエルから聞いた話は今となってはどうでもいいことだった。

あの戦いで、ラグエルは途中から逃げていたのだ！

戦いが激しさを増す中、自分の無力が恐怖に変わり、耐えられなくなってしまった。そして討たれていく味方を見捨てて逃亡したという。

「め、目の前でザドキエルがグサグサグサって矢に打たれて、怖くて気が付いたら全力で飛んでたんです…… もう天界にも行けず、皆さんにも顔向けできず、いつそ死のうかと……」

「そうだったのか…… 気にするなラグエル。むしろ巻き込んだのはこちらの方、済まなかった。ラグエルが土下座する理由はないのじゃ」

ガブリエルはラグエルをよしよしする。そんなことをずっと気に病んでいたのか。戦いが怖いのは仕方のないこと、気の小さいラグエルが天界を抜けて味方してくれただけで十分な勇気を見せてくれたのだ。途中で逃げてしまっても誰が責められよう。

いい光景だ。それを見るウリエルも嬉しくなる。

ただし、ガブリエルが呑み込んだであろう最後の言葉もまた容易に想像がついてしまう。

それは、どうせラグエルが頑張っても戦いの趨勢は何も変わらず、ザドキエルを救うことはできなかつたらう、と。

「ラグエル、しかしV t u b e rをしていたのは我らと合流することを思っていたのじゃろう？」

「そうですね、自分から皆様へ会いに行く勇気がなくって…… 見つけてくれて、もしも迎えに来てくれたらって…… で、でもこうして来てくれた以上、ラグエル誠心誠意頑張ります！ 武具現召ウエボンサブライを使って今度こそ役に立って見せます！」

「気持ちだけはありがたく受け取っておくぞラグエル！」

「え……………」

「応援してくれるのは嬉しく思う」

「……………」

ここには若干のすれ違いがある。

ラグエルの意気込みとは逆に、ガブリエルはとても薄い返事しかない、というのはラグエルを戦いに出す気持ちがないのだ。

それには理由があり、ラグエルは異能持ちなのにもかかわらず、その弱さに定評がある。

異能を持つ者がおしなべて強いのではない。

ラグエルの気が弱いこともあるが、異能の質に大きな問題がある。皆から残念に思わ

れているその異能は、ウエボンサブライ武具現召、これは敵に対し最適の武器を現出させるといふものだ。

そこだけ聞くととんでもなく強力な異能に聞こえる。しかし、これには致命的な制限があり、その武器を使えるのはラグエル本人に限られてしまう。つまりラグエルが有効に使いこなせなくてはせっかくの武器も何の意味もない。

以前、ラファエルとラグエルが模擬試合をしたことがあった。

まずはラファエルがすらりと剣を抜いて対峙する。

「絶対切断は使わないでおくが、そつちは異能を使ってくれ。かかってこい、ラグエル」
アルティメットソルト

「で、では後悔しないで下さいよお！ 遠慮なく異能を使わせてもらいます！ 異能発現、ウエボンサブライ武具現召!!」

そしてまばゆい光が出現した後、徐々に小さく形になっていき、ラグエルの手にそれが握られる。

ラファエルを相手にした戦いで最適な武器とは…… 一対のレイピアだった。

「なるほどな。それを知りたかった。ラグエルの異能では、わたしを倒すにはレイピアが良いということか」

レイピアは両手に一つずつ持ち、接近戦で非常に有効になる刺突武器である。軽く、間合いにいれれば手数で相手を圧倒できる。小柄なラグエルには実に向いている武器といえるだろう。

確かに武具ウエボンサブライ現召は最適なものを選んだのだ。

「ぎゃひっ！」

「済まないラグエル。手加減したのだが…… 痛かったか？」

だが模擬戦が始まると…… あっさりラグエルは長剣の腹で叩かれ、跳ね飛ばされてしまった。

つまりラファエルの間合いをかくぐるところか何もできないで終わり、レイピアを使う場面すらない。

万事がこの調子、せっかくの異能が何の役にも立たない。まさに残念異能だ。

しかしこれからの戦力になるかどうかはさておき、ラグエルが生きていたのは喜ぶべきことである。

「一緒に帰るぞ、ラグエル。お主の無事を知ればラファエルもミカエルも喜ぶじやろう。それに天界が動いている以上、このまま人間界にいるのは危ない」

そしてその通り、ラグエルの生還を知るとラファエルらも驚く。

その次は、逆にラファエルらがソータ君のことをガブリエルらに紹介していった。とにかく異能者が増えたことは一步一步前に進んでいることでもある。

これで異能者が十人揃い、あとはたった二人。見つけるべき異能者は残り二人になっ

た。

この調子で行けば……

だがこれと同じ時、天界では全てを無に帰す大軍勢が準備されていた。

史上初めて天界が魔界に対し鉄槌を振り下ろす。その侵攻軍は誰も聞いたことのないほどの夥しい数である。

圧倒的に過ぎるまでの数、まさに天界の総力だ。

巻き起こる戦いの中心は魔界城攻防戦、天界と魔界がその拠点を巡って激突する。

それはあまりに凄惨を極め、後々まで慟哭と涙によつて語られることになる。

そんな想像を絶する戦いが始まるまで、あと一日。

第十五話 魔界城攻防戦

「これほど壮麗だとは…… もはや言葉が見つからんな。まるで雲のようだ」

天界においてアサエルが感嘆の声を漏らす。

その眼前には整然と列をなした天使の大軍勢がある。

縦横12列、つまり144人の天使が一つの軍団を形成しているのだ。

その軍団が更に縦横7つずつ、つまり49個のかたまりになっている。数え上げてみれば、天使が何と総計7千人を超えてしまう物凄い数になる。

今までこれほどの天使がいたことはない。

ところが神は今こそ大軍勢が必要だと考えたらしく、そこまでの数を生み出している。むろん魂のある上級天使はそうそう増やせないの、増えたのは全て魂も意思もな以下級天使に限られる。しかしそれでも戦力は戦力、これだけの数の暴風には何ものも逆らえるはずがない。

この圧倒的戦力でいよいよ魔界を滅ぼす！

今まで魔界の方から度々天界にちよっかいを出しているが、天界は常に撃退にとどめ

ている。

その積年の因縁を一気に清算すべき時が来た。

もちろん天界にとって魔界とは拮抗する勢力ではなく、例えるならゴミ集積場のようなもの、見下すべき場所である。しかしそれだからこそ何があるか判然とせず、侵攻するにも厄介といえはそうなのである。

だが今や神は決断したのだ。

もう魔界を捨て置くことはなく、大戦力をもって攻め滅ぼそうとしている。

この軍勢の総大将には最もふさわしい者、アサエルが立てられた。

副官には同じく^{ケルビム}智天使のハムエルが務める。

むろん他の^{ケルビム}智天使たちも全員が招集され、それぞれの軍団を指揮しているのだ。

最初にその異変に気付いたのは、むろん魔界の入り口近辺にいた者たちである。

つまり熾天使四人組のことだ。

「天使の気配やつ！ な、なんかめちやめちやヤバイで！」

「凄い気配だよ…… 早く、とりあえず距離を置かないととんでもないことになると思う」

「隠れ家を出るのじゃ！　いったん魔界方向へ退くぞ！」

そして慌てて全員が隠れ家を脱し、振り返って魔界の入り口辺りを見る。

目にしたものは……　もちろん天使であることは既に分かっているが……

しかしその数は何だ!!

遠距離でも天使の気配が尋常でなかったのは当たり前である。

「妾たちが以前戦った時は、天使全軍でもせいぜい千人だったはずじゃ……　なぜこんなことが有り得る！　ここまでの数になる！」

口に出したのはガブリエルだけだ。

しかし他の熾天使は口に出さなかっただけで、みな同じ感想を持って愕然としている。

とにかく戦いが間近いのは必至、驚いてばかりもいられず、わたしもまた素早く決断する。

そういつた戦略判断をするのが昔から皆の中でわたしの役割だからである。

「むう、天界があればどの数でやってくるとは通常の作戦の範囲を超えている。魔界を滅ぼすために違いない」

「たぶんそうやろなラファエル。で、どうしたらええんや」

「ここでも食い止めるのは無理、水際防衛はできない。となればいち早く情報を伝えて魔界の者たちに迎撃準備をさせるのが最善だ。直ぐに姉様のいる魔界城へ退くぞ」

そして飛び去ろうとした寸前、向こうの天使たちもこっちの一団に気付いたようだ。

だがそれで捕捉されてしまうことはない。

下級天使たちの二枚羽デュアルの行軍速度には限度があり、熾天使の六枚羽ヘキサに追い付けるわけがないからだ。

ガブリエルがラグエルの手を引き、わたしもまたソータ君を抱き抱えて飛ぶ。むろんソータ君としてはミカエルの方がいいのだろうが……

わたしに気を使って表情に出さないようにしていても、その顔を見たら分かる。

だが純粹に飛ぶ力を比べたらわずかな差でミカエルよりわたしの方が強いのである。仕方がない。

直ちに魔界の深部にある魔界城へ行く。

もちろん姉様の居城であり、魔界で一番の拠点になる。

ちなみに深部とはいっても、魔界全体からすればむしろ入り口に近いといえる。なぜなら姉様たちでさえも魔界全体を把握していないのだ。本当の深部には何があるか未

だに分かっていない。

ともあれ魔界城では既にこの異変を察知していたらしく、誰もかれもが慌ただしい動きをしていた。

ほどなくわたしはルシファアの姉様を見つけ、より詳しい情報を与える。

「姉様、天界からの侵攻は本気だ。天使の数は馬鹿みたいに多く、ざっと見たところ五千から一万というところか。その中にはアサエルを中心としてバラキエル、シャティエルがいるところまで見えた。しかし他にも四枚羽クワッドがいるだろう」

「凄い戦力ね。神も本気なんだわ。でもラファエル、これは作戦がうまくいった証拠よ。しょこしょこ」

「へ？ この状態なのにうまくいったとは、姉様、どういう意味だろうか……」

「それはね。今、天界が攻めてきたのは、魔界と熾天使が手を組んだことを知ったからよ。こつち側の異能者が増えたから焦ったんだわ」

なるほど！ そうとも言える。最初は意味が分からなかったが、姉様の言う通りだ。確かにタイミング的に今攻めてくるなら、その理由としか考えられないではないから。

天界はやつと危険性を認識し、先手を打ってきたのだ。熾天使だけ、あるいは魔界だけが相手ならこれまでと同じように余裕で放置したのだろう。その二つが組んだからこそ、排除するために侵攻してきた。

もう一つ分かることがある。

もしも神と戦うのに異能者が数限りなく必要なのだったら、こんなに焦ることはないはずだ。

おそらく引き金はソータ君ではないか。たぶんソータ君を天界が確保できず、逆にこちらが手にしたことが大きな痛手になった。

ここにきて一人の異能者でも貴重になってきたのだ。

つまり、姉様が異能者を集める目標を十二人にしたのは当たらずといえども遠からずだといえる。その意味では喜ばしき証明なのかもしれない。

ただし、それもこれも今の天界の軍勢を撃退できたららの話であり、このまま蹂躪されたら話にならない。

あれだけの大軍勢、いったいどうやって防ぐ。

いったんは小城など捨て置き、最も防衛に適したこの魔界城に依るのが正しい。

むしろそれ以外の戦術はない。

天界の軍勢が少なければ地の利を活かした野戦も、縦深陣で出血を強いるという戦術もありえた。

もしくは魔界城を敢えて放棄し、占領させた後、罨にかけるといふ戦術もありえたか

もしれない。

だが今回、天界側はこんな数を擁してやってきた！

好きにさせてはそのまま蹂躪し尽くされてしまう。これでは魔界側が取れる戦術の幅は狭まり、どうしても魔界城を使った拠点防衛という形にせざるを得ない。

逆に言えば向こうにとっては拠点を攻め取らない限り戦役は終わらないのである。

大きな方針は魔界城の拠点防衛として、次に細かな段取りをどうするか。

特に我ら熾天使の戦力が魔界側に加わった今、それを防衛戦でどう活かすかが鍵となる。

「今から会議をして、取り決めるのは無理よ。魔界の者で防衛するからあなたたちは遊撃として戦って。そして天界の異能者がたぶん出てくるだろうから、それを抑えてほしいのよ。」

「分かった、姉様。我らは戦況を見ながら適時介入しよう。」

姉様もまた最適解を出してきた。

下手な連携はかえって時間をロスし、しかも間隙に付け込まれる。

我ら熾天使の力は独自の判断で振るえばいい。

そして魔界城攻防戦は始まった！

我ら熾天使組が到着してからわずか数刻も経たないうちにだ。

天界の軍勢は多少の脱落は覚悟の上、強行軍でやってきた。普通なら橋頭保を築き、着実に地歩を固めていくのが常道だろう。

しかし、そうではなく一気に心臓部を突く、つまり魔界城を制圧せんとする電撃戦を選んだのだ。

そして魔界城を臨む所まで来て、いったんとどまって陣を張ったり、最後の用意を整えたりすることはなかった。もちろん戦いの口上を述べることもない。

むしろ魔界側の準備が間に合わないうちに一気呵成に挑みかかる方を選んだ。

それは見敵必殺、神速を尊ぶアサエルがいかにも考えそうなことである。同時にとても有効だった。

しかも天界側は数の利を活かして別動隊を動かしてきたのだ！

別動隊とはいっても元が大きい以上、天使二千は下らない数になる。

魔界城は平原に座しているため、天界側の別動隊は遮られることなく大きく回り込み、ちやうど裏側から魔界城を挟み込んできた。

このため、ただでさえ大幅に劣勢である防衛要員は多方面に割かれることになるの

だ。

しかも魔界城はそこその大ききさを持つため正面と裏手では距離があり、かえって直接の連携が取れない。

「くつ、アサエルめ…… 上手い戦術を使ってくる！」

わたしの方も対応策を練る。

戦力バランスを考え、天界側本隊と対峙する正面方向にガブリエルとミカエルを置いた。

そこには姉様もいるからそうそう破られないだろう。

なんとといっても姉様は元天使長ルシファー、その異能、ハイパームーブ超動迅速は無敵の能力だ。剣

でも矢でも異能でも、姉様を傷つけることなどできはしない。

ただし物量で迫る敵に対する攻撃に限っていえば、物凄く有効ではない。

残念ながららひたすら数で来られれば押されることは避けられない。そんな場合はミカエルが暴炎熱威で近場を確保し続け、長距離戦でガブリエルが雷破撃壊をフォールンサンダー駆使するといい。

適切に防衛すれば、いったん攻め疲れを待ち、隙を突くこともできるだろう。

「さすがラファエルの案やな。それが一番ええと思うで」

「任せておけラファエル。妾が食い止めてみせようぞ」

わたしと他の残りは正面を離れて裏手へ回った。ここでの役割はとにかく時間稼ぎであり、向こうの別動隊に仕事をさせなければ目標は達成だ。

ウリエルの歪曲^{コンバージョン}夢幻で幻惑し、わたしは絶対切断^{アルティメットソード}で牽制をかけ、とにかく取りつかせないようにする。

わたしはそう計算し、最適な戦術を組んだつもりだ。

ただし戦いというものは常に相手あつてのこと、天界側も考えている。

そして天界の戦術は予想よりもはるかに高度なものだった。

第十六話 天界の異能

わたしやウリエルなどが裏手に着いたころにはもう乱戦が始まっていた。

天界側別動隊は魔界城裏手に回るやいなや、ためらいなく仕掛けてきたらしい。

下級天使たちが群れをなし、潮のように攻勢に出ている。

それぞれの塊が次々と押し寄せるところは正にその波濤に見えてしまう。いちいち数など数えられない。

それに対し、むろん魔界の魔物たちが応戦しているが……

しかしその戦力は向こうのせいぜい二割といったところか。数の暴威の前には明らかに旗色が悪く、そのオリハルコンの剣に次々と切り伏せられていく。天使の軍勢が味方なら拍手喝采ものだろうが、敵として相対するのなら禍々しいとしか言いようがない。

表情のない下級天使だからこそ余計にそう思える。

この短い時間の間に魔界側も魔界城の外へ防衛陣を幾重にも設置し、工夫している。だがそれらが全て破られて魔界城に取りつかれるのも時間の問題だ。

それほどまで数に差があり過ぎる。

「くっ ウリエル、直ぐに頼む！ いったん向こうを引き離してくれ！」

「ボクに任せて！ それじゃいくよ、異能発現、歪曲夢幻!!」

直後、そこから一帯の空気がゆらめき、尋常ではない力が働き出すのを感じる。

いつもながらウリエルの異能、歪曲夢幻コンバージョンは凄い。

戦場の様相がゆっくりと変化していく。

下級天使の怒涛の攻勢が捻じ曲げられ、その歩みがあらぬ方向へ転じる。

この時、下級天使たちは幻を見させられているのだ。

いや、見える見えないだけではなく音どころか気配さえも空間ごと歪められて伝わ
る。

これで現実を認識できなくなれば、本来の攻撃目標からまるで違う方へ逸らされても
仕方がない。

この異能は多数対多数の集団戦にこそ真価を発揮するものだ。

相手の陣形を崩し、トータルの戦力を大幅に減じることができる。

ただし天界側はそれでも攻撃を諦めたりしていない。

次々と新手を投入し、その圧倒的な数に任せて遮二無二押し迫ろうとしている。

「どういうつもりだ…… 同士討ちさえ恐れず進んでくるとは普通じゃない。下級天使をすり潰すのはどうでもいいのか」

戦いは止まらない。

ただし魔界側も少しは息を吹き返し、ようやく戦いらしい戦いができるようになった。

そして次にわたしは味方である魔界側の体制を観察する。

膨大な数の天使たちに怯むことなく応戦しているのは見事だが、それができるのはどうだろうか。

戦い面でも、士気の間でも誰がそれを可能にしている……

するとひときわ目を引く者がいた！

白髪の少女だ。

一瞬見るとミカエルに似ているが、それより華奢で一回り小さい。つまり幼く見える。

その少女が踏ん張り、一騎当千の戦いをしている！

下級天使たちを死に引きずり込む円の中心にいるのだ。

円の中には炎も剣もなく、それどころか動きすらない。

だが、下級天使がそこに踏み込んだ瞬間から剣を構えたまま動けなくなってしまう。そしてゆっくりと溶けていく。

それが進むと立つことも叶わず、音もなく崩れ落ちる。やがて原型を保つこともできなくなるのだ。その最後、わずかな土の染みに変わり、消えていく。

円の中は静かな死に満ち溢れている。

「あれは！ 魔界随一の実力者、ベルゼバブだね……あの異能、腐解溶熟は怖過ぎるよ」

「ああウリエル。全てを溶かすとは、見ているだけで恐ろしい異能だが、しかし味方であれば頼もしい。ベルゼバブが魔界城にいたのは幸いだっただな」

この魔界城の裏手にはベルゼバブが立ちただかっていたのだ。

小さな体躯に似合わず、強力無比の異能、腐解溶熟バッドソリユーションを持っている。それを駆使することで下級天使の数の暴威に対する壁になっている。それが魔界側が善戦している原動力なのだ。

一方で下級天使たちはそれを怖れることもなく、次々に死地へ踏み込み、溶けていく。短時間のうちに数百もの下級天使が斃されていった。

だからこそわたしは違和感を覚える。

なぜだ？ この状況、無理攻めとはいえ度が過ぎていて。下級天使に意思はないが、指揮官はいったい何を考えている。天界の別動隊は無策なだけなのか。

「おかしいな。向こうの狙いは何だ……」

考えろ。

物事には全て理由と理屈がある。絶対に何かあるはずだ。

「あ、もしかするとこつちの陣形を崩すのが目的か！ だとするとこの拮抗は作り出されたものに過ぎない！」

「え、ラファエル、それはいったい？」

「本来からいえばベルゼバブは後衛職のはずなのだ。広域殲滅は得意でも防御は弱く、前衛には全く向いていない。それが今は下級天使の無理な突進へ対処するため前に出ざるを得なくなってしまった」

「つまり、下級天使たちの突進は捨て駒…… ベルゼバブを引きずり出すための！」

「しまった！ このままではベルゼバブが危ない！」

そして恐れていた事態になる。

天界側の圧力が一瞬増し、ベルゼバブの周囲の魔物が討ち取られた。つまり、ベルゼバブは魔界側の陣営からいったん切り離され、前に出たまま孤立してしまったのだ。

気付くのが遅かった。

その瞬間を狙ったように一本の矢が彼方から飛来する。

もちろんベルゼバブもそれを分かる。

余裕をもって避けたはずだ。

しかし矢は過たずベルゼバブの胸に当たり、そのままの威力で突き抜けたではないか！

避けられなかった？ そんなことがあり得る!?

しかも遠距離からの矢がこれほどの威力を持つとは考えられない。普通ならば。

「くっ、あの矢はたぶんハムエルだ!」

「え、ハムエルの矢!? だったら今のは、ミラクルアロー神弓射矢…… これはまずいよラファエル!」

この場面で出てきたのか!

天界一の弓の名手ハムエル。

しかもただ上手いのではなくミラクルアロー神弓射矢という異能を使う。これはいったん放てば、そ

の矢はどんなことをしても避けられない必中になる。

ハムエルこそまさに遠距離戦のエキスパートだ。

いくらベルゼバブが実力者でもあまりに相性が悪い。一方的に射られるだけになる。

もう一本矢が飛んできた。

「くそつ、アルティメットソード絶対切断!!」

こうなったらわたしも躊躇なく参入し、異能を使うしかない。

絶対切断があればいくらハムエルの矢でもその斬撃によって叩き落とすことができ
る。

「どこだハムエルは…… それらしいところへ撃ち込むしかないな。異能発現、

アルティメットソード
絶対切断!」

遠距離攻撃に対してやり返すのならわたしが一番も適している。

思いつきり体内の神聖力を込めて絶対切断を放てば、その斬撃がはるかに飛んでい
く。

白い三日月の軌跡が天界側の陣営に深々と突き刺さる。

たちまち下級天使が十人や二十人も跳ね飛ばされるのが見えたが…… 向こうの陣

営を崩すには至らなかつた!

派手に見えたが、絶対切断の一撃がそれしか効果がない？ それはおかしい。前の戦いのように、向こうは全力で防御幕を構築し、幾重にも重ねたのか？ いいや、そこまで防御に全振りしたようにも見えない。

第二撃を放つても同じことになる。

かなりの損害を与えても、天使の陣営を決定的に切り裂けない。それはまたハムエルに打撃を与えられないことを意味する。

そしてよくよく観察してみると、防御のための大盾が幾つも光を受けて反射しているのが分かってきた。

「む…… 盾を使っているのか？ しかしわたしの絶対切断なら、あんな盾がいくらあっても防げるはずはないが…… 実際に止められた。これは何か工夫されている。そんなことができる者といえばバラキエルくらいか」

「えっ、バラキエルがいるかもしれないっ!? その異能といえばエンチャントメント質変改術！」

そう、バラキエルの異能は剣でも盾でも、本来のものよりはるか強化することができる。そういう特殊なものなのだ。ここまでの遠距離になれば、わたしの絶対切断といえども異能で強化された盾を全て斬り払うことはできなかつたらしい。

「バラキエルのエンチャントメント質変改術、なかなか厄介なものを用意してくれた」

「すると天界は本気で全戦力を繰り出したんだね……」

「ああ、そのようだ。魔界を叩き潰すためにたぶん異能持ちを全員……とにかくウリエル、先ずベルゼバブを救い出す方を考えよう」

ハムエルに続いてバラキエルまでがこの天界の軍勢にいる。

この侵攻、出し惜しみはしていないらしい。

急ぎベルゼバブをハムエルの矢から救い出さなくてはならない。

立て直しはその後だ。

さすがにベルゼバブも魔界の者だけあって矢の一本で死んだりしないが、負傷して動けなくなってしまうている。

第十七話 出番

天界の軍勢が別動隊を編成し、分けてくる前のことだ。

総大将アサエルは副官であるハムエルにその統率を命じた。

「ハムエル、別動隊の方を頼む。下級天使の四十九軍団のうち十五軍団を連れて行け。数にすれば二千にはなるだろう。直ちに魔界城の裏手に回り込んで攻勢を掛けてくれ。そうだ、バラキエルも連れて行くといい」

「よし、分かったアサエル。しかし気前がいいな。その数をくれるなら牽制なんてチャチなことはせず、別動隊だけで城を陥としてくれる。いいだろう？ 後で文句を言うなよ」

ハムエルは天界一の弓使いであるが、同時に積極攻勢の大好きな武闘派として知られている。

今回の魔界遠征を楽しみにしていた者の一人だ。

「ふつ、そこまでは必要ない。というより優先事項が違うんだ、ハムエル」

「何だアサエル。その優先事項というのは？」

しかしここでアサエルが妙なことを言った。

何か違う目的がある？ 単純に魔界を攻め滅ぼしに来たのではないのか。

「今回はただの侵攻ではない。この作戦が始まる直前、神が言われた。『魔界に赴き異能者を狩るように』とのことだ。つまり魔界の蹂躪は手段であり、最終目的は向こうの異能使いを叩くことらしい」

「何だと!? この大兵力を動かしたのがそんなことのためとは、なぜだ」

「聞くなハムエル。神の御意志であれば理由を詮索しても仕方があるまい。ともあれ別動隊は城を陥とすのではなく、むしろ魔界側の異能使いを見極めてほしい」

「……………」

「きつと応戦するために異能使いが出てくるはずだ。こちらの数の力に対抗するにはそれしか手段はなく、嫌でも前面に出て来ざるをえないからな。同情はするがそこが付け目になる」

「なるほど。それはそうだろう」

「ハムエル、その時は城を捨て置いて異能使いに集中してくれ。それを一人でも二人でも倒すことが最優先事項、これは神の命令だ」

この言葉にハムエルは完全に納得したわけではない。

果敢に戦い、すつきりと戦争に勝ちたいのに、むしろテロのようなことをするとは。

しかし神の命令であれば拝領するほかはなく、こうして智天使ケルビムハムエルとバラキエルは別動隊と共に出て行つた。

やがて魔界城の裏手で別動隊が戦いを仕掛けると、やはりアサエルの言う通り魔界の異能使いが出てきた。

それも屈指の実力者ベルゼバブだ。

だが矢を射るハムエルにとっては最も対処しやすい相手であり、その意味で幸運としか言いようがない。下級天使の損耗が恐ろしいほどの数に上ってしまったものの、計略を仕掛け、なんとかうまくいった。これで異能持ちを仕留めるというアサエルの言つたことを達成できそうだ。

ついでに熾天使ウリエルとラファエルがこの裏手にいるのも確認している。

通常なら大きな脅威であるが、相性という面において言えばこれも僥倖ではないか。ラファエルの絶対切断という圧倒的攻撃力を誇る異能でも、いわば物理攻撃の範疇であることには違いなく、近付き過ぎなければバラキエルの異能によつて辛うじて対処が可能である。

逆に別動隊にとつて不運ともいうべきことがある。

アサエルはハムエルに一つの情報を伝えていなかった。

それは未だ確認が取れていない不確定情報だったせいであり、軍事行動の際にはあやふやなことを伝え過ぎないのも常識であつたからだ。

「ラファエル、早くベルゼバブを救出しないと！」

「もちろんそうだ。今方法を考えるが、簡単ではないな」

一方でわたしの側である。

ハムエルの矢で射られ、防御力の弱いベルゼバブは重傷を負つた。それを早いところ助けたい。

しかし救出といつても単純に事は運ばない。

もちろんこうしている間にも魔界の者たちがベルゼバブの救出に一生懸命動いている…… だがしかし、ハムエルの矢に次々とやられていくではないか。

嫌でも気付かされることがある。

「くそつ、何という悪辣な戦術だろうか。天界側はわざとベルゼバブを殺さない程度にしておいて、こちらに救出を敢行させ、そこを矢で射る。これでは何度やつても戦力を失うだけだ」

「そんな汚い作戦を取られたらたまらないよ！ だつたらボクが行つてくるね！」

「いやウリエル、それも無理だろうな」

天界は大軍勢で来たが、憎たらしいことに人材の質においても豊富なようである。なかなかどうして戦い方も考えられているではないか。

そしてウリエルではベルゼバブを救出できない。

確かにウリエルの歪曲^{コンバージョン}夢幻があれば、例えハムエルの矢でも空間を捻じ曲げることによって当たらなくすることはできる。ただしそれは自分を守る時の話だ。

ベルゼバブまでは守り切れない。

つまり放たれた矢を遠くからどうにかすることはできない。

おそらくウリエルが辿り着きそうになった瞬間、ハムエルはベルゼバブだけでも殺す方へ切り替え、そっちを本気で射るだけの話だ。結局救出には失敗し、空振りになってしまう。

「かといってわたしが行っても……無理か」

わたしならば絶対切断によってハムエルの矢などなんともできる。同じ物理攻撃の異能同士でも、わたしの方が遥かに強力だからだ。目視できる範囲に限られるという制約があるが力負けすることはない。

ただし向こうの立場に立てばわたしへの対抗策がある。簡単なことだからたぶん分

かられている。それは下級天使たちを少しばかり前進させ、普通の矢も射かけさせることだ。そうすればどの矢がハムエルが放ったものかわたしに見分けがつかなくなり、絶対切断の手数にも限界がある以上、ベルゼバブを守り切ることはできなくなる。

「なら、どうするのラファエル！ このままでは…… そうだ、姉様を呼ぼうよ！ 姉様の超動迅速ハイバースピードだつたらなんともなるから！」

「その通りだがウリエル、それもできない」

「え……」

「ウリエル、魔界城の正面の方が主戦場であり、その姉様を引き剥がしてはならない。この裏手の方に姉様を呼んでしまったら本末転倒、戦術的に向こうの思う壺だ。もしかするとそれを狙って別動隊を送ってきた可能性もある」

「で、でも…… どうすれば」

「ここでわたしは考え、決断する。」

「上手いく……はずだ。」

「いや、ベルゼバブを見殺しにするものか。なあに、こつちには切り札があるぞ！」

「え、き、切り札って…… 何なのラファエル!？」

わたしはつかつかと歩み、戦いを見ながら震えている者に近付いた。

その肩を両手でがしつと掴み、逃げられないようにしてから、努めて優しく言う。微笑みまで付けてやろう。大サービスだぞ。

「少年よ。待たせてしまったが、やっと君の出番だ」

「ピョエツ！」

僕は間拔けな声を出してしまった！

というのも、このラファエルという天使は何てことを言ってるんだ!!

僕はわずか二日前には学校や家にいたんだ。もちろんどこにでもいる一般的中学生として。

それがこんな魔界に連れてこられ、ついには魔界城というところまでいく羽目になつたとは！

僕の意志と関係なく物凄いことに巻き込まれてしまった。

それで終わらない。

魔界城では否応なく本物の戦いというものを突き付けられている。

ゲームなんかじゃない！

ここでは本当に剣や矢で戦われ、傷付き、死んでいく者たちがいる。こんなことは……嘘だと思いたいのには現実なのだ。

しかもどうやら城側にいる自分たちの方が圧倒的に劣勢とは。

迫る天使の軍勢は物凄い数であり、果てしがない。いくら戦いに素人の僕でも戦いがマズい方向に行きつつあることは理解できる。

僕はもう呆然としてしまい、とにかく逃げたいだけだ。ここにきてシ〇ジ君の気持ちはよく分かる。

というのに、ラファエルという天使は明らかに無理な笑顔を作り、まるで僕が戦いに参加するのが朗報であるかのように語っているじゃないか！

おかしいだろ！ 嫌に決まっている。

しかし肩を掴まれてしまい一歩も下がれない。

「良かったな少年。これでヒーローだ。うらやましいなあ」

「あ、あばばば……」

「なに、やることは簡単だ。わたしと一緒にあの戦場へ飛び込み、ベルゼバブを救って連れ帰る」

「せ、戦場へ…… それで簡単なんておかしいよ！」

「難しいか？ 君は別に剣を振るうことはない。タイミングよく異能を発現させ、ハム

エルの矢を無効化すればいい。少年、初陣から功を立てるなんて願ってもないことだぞ」

僕は押しに弱いにも程がある。

それもあるが、敵を殺せというのならたぶん断つたと思うけど、あのベルゼバブという少女を救うためと言われたら仕方がないじゃないか。僕だって男、少女を助けるといふなら行くしかない。

僕はラファエルと共に魔界城を出て、戦場の叫び声と荒んだ空気に怯みながらも進んでいく。ああ、怖過ぎる。

多数の矢が飛来するようになったがラファエルがそれらを叩き落としてくれる。

「ハムエルは油断してまだベルゼバブを射つてこないな。思った通り、この少年の情報には伝わっていないかったらしい」

目的の少女はさつきまで口をへの字にして気丈に立っていたが、今はばったり倒れている。

その場所までもう少しの距離、するとラファエルは向こうの心理を読み、タイミングを見計らったようだ。

「よし、ここらでハムエルは諦め、ベルゼバブを射ってくるぞ！ 今だ少年！」
 「え、ええと、い、異能、発現！ スカイハイモ二 聖天調和!!」

僕は魔界の入り口にいた時にこれを練習させられていた。
 異能のオンオフを体に教えるため、呪文を唱える。

だがこの変な呪文といったら…… 滅茶苦茶に中二病くさい！ 僕の本意ではないのに。でもちよつとだけ気分が良かったのは秘密だ。

すると確かに何かを感じられた。

僕を中心にして光のさざ波が立ち、その粒子が輪となって広がり、そして消えていく。
 周囲の変化を感じ取れる感覚、これが僕の異能を使った感覚なのか？

もう僕は完全に中二病になり、あっち側の人間になったようだ。悲しいことに治らな
 いだらう。

しかし感覚だけのことはなかった！

あの少女に向けて今まさに矢が飛んできていたのだが、急に失速し、ポトリと落ちて
 しまった。

「いいぞ少年！ 今のがハムエルの矢だった。君が異能を使ったのでハムエルの異能、
ミラクルアロー 神弓射矢が効かず、普通の矢に戻り威力を失ったのだから。よし今のうちに」

そしてラファエルは一気にスピードを上げて少女に駆け寄り、抱きかかえた。

そこから魔界城に引き返すが、僕の走る速さに合わせてくれた。途中で矢が幾度か飛んできて、それほどの威力もなくラファエルの剣でさばける範囲でしかない。

こうして少女ベルゼバブの救出は成功し、僕も初任務をやり遂げたことになる。

第十八話 正面戦線

それと同じ時、天界別動隊では指揮官ハムエルが地団駄踏んで悔しがる。

「くそつ、これではアサエルに怒られるな…… 欲をかき過ぎてしまった。ベルゼバブだけでも早いところ仕留めていれば良かったのに、策に溺れ、エサに使おうと思つたのが間違いだった。しかし異能を消されてしまうとは…… 今のは何だったんだ」

「そんな異能殺しなんて面倒なもの、予想できるわけないよ。ハムエルのせいじゃない。でもこれからどうしよう」

「どうもこうもない。嫌がらせの攻撃を途切れなく続けるだけだ」

ハムエルは問いかけてきたバラキエルに対してそう答えた。

絶好の機会をむぎむぎ失つたのは痛手だが、切り替える必要がある。

「異能持ちを斃すのが優先というアサエルの命令は達成できずとも、陽動として魔界城への牽制はきつちりやらなくてはならん。その後は情勢による。バラキエル、続けて質変改術エンチャントメントを頼む」

ここで猛将ハムエルは持ち前の積極性をやや減じることになる。

下級天使たちの数で波状攻撃を仕掛け、疲弊させ、ここぞという場面で自分が前に出て魔界城に突入するつもりだった。それで戦いに決着をつける。その未来図に自信を持っていったのだ。

ところが、魔界側には異能を滅する者がいた！

こうなると下手な突入による接近は戦術的に致命傷になる恐れがある。

ハムエルはその少年が敵味方の区別なく全ての異能を滅するのを知らないのだから、負けない戦いへ舵を切ってしまったのは仕方がない。

こうして魔界城の裏手は再び地味な攻防戦になった。

救出されたベルゼバブは重傷で、直ちに戦線復帰できる見込みはない。小さな顔をしかめて口をへの字にしたまま治癒に専念している。

その分わたしとウリエルが積極的に戦線維持をして回る。

何といってもソータ君がいれば戦いやすい。その異能スカイハーモニー聖天調和によってハムエルの矢を時折封じてくれるだけでも脅威を与えられる。

とはいえ天界別動隊の下級天使はまだまだ尽きてはおらず、その圧力は依然として半端ない。それを押し返し、魔界城から打って出るのは不可能というものだろう。

その頃、天界側本隊でも別動隊のことを話している。

「ハムエルはよくやってくれているが……牽制としては申し分ないものでも異能持ちを仕留められなかったか。ではぼちぼち頃合いかもしれないな」

そう言つて天界側総大将アサエルはある決断をする。

予定されていた最終行動であり、たった一人の者にこのタイミングで出動命令を伝える。

「実は別動隊も、この本隊も両方が陽動なのだ。今こそこの手を使おう。シヤティエルはいるか？」

「アサエル、ここにいるよ……」

「そろそろ向かつてくれ。いったん惑わすから、その隙に頼む」

この時点では魔界城正面の戦い、つまり天界側本隊と魔界側主力の戦いもまた一進一退になっている。

魔界側の総大将ルシファーはやはり全体の統率者らしく戦線を飛び回り、その弱いところを補強し、決定的な綻びになるのを防いでいる。

守勢を整える役割がそれとすれば、攻勢を担当する主力は熾天使ガブリエルとミカエルになる。

二人は魔界城外郭の上に立ち、全力を尽くして天界側の軍勢に楔を打ち込み、攻勢を攻勢で弾き返しているのだ。

「しやらくさいわ！ 異能発現、雷破撃壊!!」
フォールンサンダー

「近くに來ると燃えるよ、異能発現、暴炎熱威!」
ストームフレア

どちらも強力無比な異能である。

特にガブリエルは最強の熾天使、今だけはポンコツV tuberの面影はない。その異能の威力はすさまじく、戦場を呑み込もうとする下級天使の大群を稲妻で薙ぎ払う。

しかしながら戦局を支配するまでには至らない。

なぜならこの頃までには天界側もガブリエルとミカエルの存在を察知し、それに対応した戦術を取っているからである。

さすがにアサエルは知っていたのだ。

拠点防衛をする側は防壁を使えるという利点があるが、逆に攻める側は位置を移動できるといふ利点がある。

すなわち機動力を重視している。

大兵力にもかかわらず、天界側の統率は見事であり、動きを止めていない。加えて中樞部を構成する上級天使たちはうかつに突出することはない。

これではガブリエルの雷破撃壊フォールンサンダーといえども簡単に致命の打撃を与えられないという

ことだ。そもそも万能型の攻撃である雷破撃壊は浸透力という一点だけは絶対切斷に劣る。

「異能発現、雷破撃壊！ くつ、また空振りじゃ！」

異能を繰り出し、まぶしいほどの雷撃がガブリエルを起点として幾筋も伸びていく。だがまたしても有効打にはならない。

おまけに天界側はこの時点からいつそう効果的な防御手段をとってきた！

うつすらと霧が立ち込め、中枢部の位置を覆い隠してきたのだ。これではガブリエルが照準の付けようとしても不可能になる。単純でも効果は抜群だ。

「厄介なものを使ってきたな……むろんこの霧は作られたものじゃ。さすればタウエルの異能、迷霧隠境じゃろうな。それしか考えられん」

天界側は上級天使のほぼ全てを動員している。

それにはもちろん異能持ちも幾人か含まれるが、ここでその中の一人、タウエルの異能を使ってきたのだろう。

その異能迷霧隠境は霧を自在に発生させ、しかもそれを動かすことができる。ガブリエルが魔界城を離れることはないのだから、そこ天界側首脳部とを結ぶ線の辺りに霧

を展開するだけで容易に目的は達成だ。さしものガブリエルも中枢部の動きを察知できなくなり、攻撃を手控えざるを得ない。

「仕方がないのう。一気に向こうの中枢部やアサエルを叩くことは叶わんか。とはいえ近くの霧だけでも払えば鬱陶しさも減るといふものじゃ。ミカエルにやつてもらおうとするか。ミカエル、ストームフレイア暴炎熱威でできるだけ霧を払ってくれ」

ミカエルの異能の熱でせめて近場の霧をかき消してもらおうと考えた。

そう頼んだのだが……返事がない。

妙に思つてガブリエルが首を回すが、どこにもミカエルの姿はなかった。

「あれ、変じゃな……ミカエル？ どこにいったのじゃ？」

そのミカエルは外郭を離れ、一人魔界城の内部にいた。

魔界城はほどほどの高さの外郭防壁を持つている。

飛行のよほど得意な軍勢に攻められたら防壁など意味がないかもしれないが、そういう場面は少ない。

現に今も天界の軍勢は地上戦を行っている。

その軍勢の大半を構成する下級天使たちの二枚羽デュアルでは飛ぶ力は弱く、剣や弓の反動に

よりバランスを崩しやすい。しかも空中では初動が遅いので狙い撃ちに対処できなくなる。

その結果、地面に足をつけての地上戦を選んでいるのだ。

ここぞという場面では一気に面状攻撃を仕掛けるために飛ぶが、それほど多くはない。

そして魔界城は堀を持っていない。外郭からわずかな間を空けただけで建物が建っている。

高さについてはさほどのものではない。なぜなら物見としては飛行できる者を上げればそれで済むからである。とはいえ建物内には居住施設、武器の収納、病院がまともて含まれ、中心に行くに従ってそれなりの高さになっている。

ミカエルは正面の戦線から一番近い入り口からその建物に入り、大きならせん階段の前にして佇んでいる。

今、そこにはミカエルの他に誰もいない。生きているものは。

ミカエルはらせん階段の直下の床を見ているが、そこに倒れている者がいた。

既に死んでいる。

それはメフェイストフェレス、魔界軍の中でも剛将として知られた将帥だ。それが何と背後から一突きにされて絶命しているではないか。

「たぶんそうやと思ったが、やっぱりやな……」

死体を確認したミカエルは溜め息を一つ吐いた。

そこから大きく息を吸い込み、塔に声を響かせる。

「おるんやろ？ シャテイエル。おらんはずないわ」

残響がやがて収まり、静寂に戻る。しかし返事はない。

それでもミカエルの確信が揺らぐことはなく、声を紡いでいく。

「今、その戦線は膠着しとる。姉様とガブリエルは凄いなあ。でもそんなことをあのアサエルが予期しとらんはずはあらへん。だから必ずャテイエルを送ってくるはずや。そやろャテイエル。ぼちぼち潜影シャドウドライブ同化を使わんと姿を見せてみや」

すると今度こそ返事があった！

それは何とらせん階段の作り出した影の奥からだ。誰もいないように見えたのに。建物に幾つかある小窓から差し込む光が複雑な影を作っているが、その一点から返事がある。

「ミカエル…… そこまで読んでいたんだね」

「シャテイエル、そのメフィストフィレスはたまたま会ってしまったんで殺ったんやろな。けれど本当の狙いは姉様やろ」

「……………」

「姉様は強過ぎてまともに戦つたんでは無理や。せやけどアサエルはアホやない。姉様を斃す唯一の方法を知つとる。それは、すぐ近くに忍び寄つて油断を突くことや。だからこそ戦いの隙にシャティエルを忍び込ませるはずやと思うた。シャティエルの異能、シャドゥワイク潜影同化は影に潜み、影の中を移動できるもんやから、これほどうつてつけのものはないわ」

「……見事だよ、ミカエル」

「そして複雑な影といえば建物の中や。待ち伏せには絶好やないか。どや、この読みは凶星やろ」

魔界城内部で熾天使ミカエルと天界の切り札シャティエルが対峙することになる。

この戦いでも屈指の悲劇が今、幕を上げていく。

第十九話 さらば友よ

ミカエルの指摘は全くその通りだった。

天界の総大将アサエルの作戦では、下級天使の大戦力を駆使するのはただの目くらましに過ぎない。

確かにその戦力で力押しにすれば、なるほど戦いに勝てるかもしれない。しかし魔界側の異能使いを逃がしたら中途半端になる。神の命令は異能使いを斃すことが含まれているからだ。

だったら逆にする。

大戦力を案山子に使って潜入作戦を行えばいい。そうすれば異能使いを斃すとともに防備を崩し、完全に勝てるではないか。

そして遣わされたシャティエルの異能潜影同化は今回の任務にはおあつらえ向きのものだ。影の中を移動し、すぐそばに忍び寄り、隙をついて背後から剣を突き立てる。隠密行動という面においてこれほど優れた異能もない。

いくらルシファーが超動迅速ハイバームーヴを持っていても、常に動いているわけではない以上、死

角から致命の一撃を加えたら終わりだ。

ミカエルにその作戦を見抜かれてようやくシャティエルはらせん階段の影から実体化し、姿を現した。

「ミカエルは凄いね。昔からそうだった」

「どんなもんや。そんでシャティエル、もう一つ知つとるで」

「それは何？」

「シャティエル、そんな暗殺なんかしようはないのやろ。ほんまは誰も傷つけたくない、そう思うとるはずや。今も心で泣いとるんや」

「……………」

この指摘にシャティエルも言葉を失う。

二人はお互いのことをよく知っている。だからこそミカエルは確信を持って言えたのだし、間違いなく真実なのだ。

ミカエルとシャティエルは幼馴染ともいえるべき関係だった。

どちらかというと活動的なミカエルにおとなしいシャティエルが振り回されていたものである。その意味で性格がかなり違うように見える。

しかし二人に共通しているのは平和主義だ。

どちらも心の奥底はとも優しく、他人を傷付けたり争ったりするのを嫌う。ミカエルの場合それは恥ずかしく思うので外面上皮肉っぽく装ってしまうだけのことだ。

ともあれ二人は長く行動を共にしている。

その絆は強く、互いに一番の親友と思ってきた。

「で、でもミカエルだつてそうでしょ？ 戦うならとつくにミカエルは暴炎熱威ストームフレアを使つてははずだよ。暴炎熱威ストームフレアは僕の天敵、影ごと全て燃やせるからね。かないっこない」「分かつとるやないか。せやから話がしたい、シャティエル」

これが完全な奇襲ならシャティエルにも戦いようがあつたらう。しかし、もう存在を知られていればそれは望めない。そしてまともに戦えば結果は目に見えている。

異能同士の争いは相性がものをいうからだ。

ルシファアストームフレアやガブリエルが相手なら比類なく強いシャティエルの異能潜影シャドウダイブ同化も、ミカエルの暴炎熱威の前には無力でしかない。一気に広い範囲へ光と熱をバラまかれれば、潜むべき影を失つてひとたまりもないだろう。

「シャティエル、このまま退いてくれんか。頼むわ。幼馴染と戦うのはおかしいやろ」「……それはできないよ。天界の者は神の御意志が何よりも優先、そのために作られたんだもの」

「それが間違いや。なあシャティエル」

ミカエルは説得を繰り返す。

諦めず、戦いをしないために、何度でも。

やがてその努力が終わる時が来た。

シャティエルが強引にそれを打ち切ったのだ。

「こんなことになるなんて……でも神の命令には逆らえない」

話し合いをやめ、シャティエルは異能を使って影に潜入する。

「さよならミカエル。異能発現、シャドウタイプ潜影同化！」

「シャティエル！ シャティエル！ 話は終わつたらん！」

叫びは止まらない。

この時のミカエルの表情は何か。もちろん本人には分からないし、誰も見ている者はいない。

最大限の悔恨と悲しみに彩られたものだったろう。

「分ならず屋が…… 異能発現、ストームフレイア暴炎熱威！」

するとシャティエルが短剣を持って影から飛び出した！

ミカエルの右横に伸びた影へ移動していたのだ。短剣を真つすぐミカエルに向け、突入する。暴炎熱威ストームフレイアに先んじるという可能性に賭けて。

だがしかし、直ぐにシャティエルに分かったことがある！

ミカエルの暴炎熱威ストームフレイアはもう発現していたのだが、ほんのわずか身の回りをくすぶらせる程度のものでしかない！

つまりミカエルは最小限にしか炎を出すつもりがなかった。

もちろん、シャティエルを害さないためだ。

そのことに気付いた時には遅かった。

シャティエルが短剣の軌道を変えようと思っても間に合わず、そのままミカエルの右脇腹を深々と抉ってしまっていた。

淡く光る流れだ。

ミカエルの傷からさらさらとこぼれていく。

それが天使たちの力の源泉、神聖力である。

限度以上、その神聖力を失ってしまった時に天使は微粒子に分解し、天に還る。すなわち死ぬ。

シャティエルはミカエルを見つめ、驚愕の表情のまま凍り付く。先に言葉を出したのはミカエルだ。

「笑うてまうわ。人間界でな、炎を小さくせいとソータっちゆう少年に言われたんや。それが役に立ったとはなあ。シャティエル、大丈夫か？」

「…………… ミ、ミカエル、なんで！ どうしてー！」

ようやく言えたのはそれしかない。シャティエルは短剣を床に捨て、狂乱する。
なぜミカエルはわざと異能を小さくし、負けたのか！

致命傷を受けたミカエルの方が落ち着いて、あやすように言っている。

「どうしてって、決まっとるやろ。友達を傷つけるわけにはいかんのや。甘いと思うか？ せやな、自分でもそう思う」

「違う！ ミカエルは僕のために自分を………… どうして僕はこんなことをしてしまったんだらうー！」

「シャティエル、泣くなや。そしてアサエルのところに帰るんや。姉様を斃せなかったが熾天使ミカエルを斃したといえ、帰ってもアサエルに言い訳が立つ」

「そんなことで！」

「シャティエル、うちらは友達やろ。最後までそうやったろ。シャティエルにそう思ってもらえたら満足や。そうやなかったら、死んでいくうちがアホみたいやしな。シャティエル、うちの分までしつかり生きてもらわんと困るで」

「ミカエル！ ミカエル!!」

もはやミカエルは力を失い、ぐったり横たわる。

「…… ああ、ガブリエルは怒るかなあ。こんな体たらくで済まん。いや、うちもみんなと一緒に神を倒すところを見たかったで。でも、友達を殺してまで見とうはないのや。うちがこないなへタレで、ほんまにごめんな……」

ミカエルは涙の線を残したまま目を閉じる。

それに縋りつくシャティエルもまた涙でぐしゃぐしゃになっている。

「帰ろう…… また二人して遊ぼうや……」

最期の時が近付いている。

もうミカエルの意識は混濁し、うわごとを言うばかりだ。何か懐かしいことを夢見ているのだろうか。

「うおおおおおー!! 異能発動、クラッシュユバワ 打力碎塵!!」

その時のことだ!

大声と共に建物の外側から強力な力が打ち付けられた。

たちまちその壁は薄紙のように破られ、細かい塵になり果てる。

この圧倒的破壊力こそが魔界の軍団長マルコキアスの異能、クラッシュユバワ 打力碎塵だ。

「ふん、メフィストフェレスの奴が遅いから見に来てやれば、つまらないことになっていたようだな。メフィストフェレスどころか熾天使ミカエルまで斃されていたとは。実に下らん」

そんなマルコキアスの言葉を聞いてもシャティエルは身じろぎ一つしない。

ミカエルのところに縋りつき、俯いたままだ。涙の雫だけが動いている。

「貴様がやったのか? 影に潜むとかいう天界のシャティエル。だがこれならどうだ。クラッシュユバワ

打力碎塵!」

マルコキアスは何も動じない。

揺るぎない実力者としていつもと何も変わらない。

そして異能を発現させるや否や、辺りの壁も床もかまわずその異能で打ち付け、バラバラに砕く。

これで遮るものがなくなり、外からの光がすっかり中にまで差し込む。この場に影はほぼなくなってしまうた。

建物そのものを壊すのは無茶苦茶だが、シャティエルの異能による思わぬ方向からの奇襲を防げる。これがマルコキアスなりの解答なのだ。

戦いの舞台は整った。

「つまらないことしなくていいよ魔界のマルコキアス。戦うつもりなんてない」

「む？ 貴様何を言っている。敵地に潜入した戦士が戦わないとは、馬鹿なのか？」

「馬鹿で構わない。それよりお願いがある」

だが、シャティエルはそれでも動かない。

言葉通りもはや戦う気はない。そんなことより、早急にしなければならぬことがある。

「僕は今から異能を使ってミカエルの傷口に入り、内側から塞ぐ。その後で傷口をクラッシュユバワー
打力砕塵で砕いてほしい。ちょうどいいくらいに」

「何だと!？」

「そうすれば、僕の体は壊れ、神聖力がミカエルに行く。この方法でミカエルを助けられる」

「……しかし、そんなことをすれば貴様が代わりに死ぬぞ」

「構うもんか! 僕は、何よりもミカエルの友達だ。ミカエルがそう言ってくれた。だから僕も誇りをもってそれに応える」

第二十話 涙を糧にして

マルコキアスは鋭い目でシャティエルを見る。

もちろん、シャティエルが崇高な目的のために頼んでいることくらい分かっている。友を救うのは何より気高い行為ではないか。ただしマルコキアスはマルコキアスなりの美学と信念があり、今一度確認しなくてはならない。

「敵地深くまで攻め込む勇敢さがありながら、自殺など戦士にあるまじきことだ。友を救うといえば恰好いいが、すなわち戦いを投げ出し、信頼を損なうということでもある。違うか」

「戦いをしなくちゃいけないことが既に歪んだ。何よりも、僕は天界の者として、友を救うのが一番の正義だと思っている。それにマルコキアス、これは自殺じゃないよ。ミカエルがその分生きてくれるからね」

「むう、あくまでそう言うか……」

「頼んだよ、マルコキアス」

そしてシャティエルは立ち上がり、その最も大切な友のため、生涯最後の異能を使う。「異能発現、シャドウタイプ潜影同化」

まるで吸い込まれるかのようにシャティエルは沈み込む。自分が作ったミカエルの脇腹の傷へ。

影と同化し、内側から傷口を押さえる。

その覚悟を見届け、マルコキアスが力を加減した打力碎塵クラッシュユバワを打ち込んだ。加減したといつても異能で打ったからには、その部位のシャティエルの体は砕けている。そこから神聖力がミカエルの体へ溢れ、受け渡されるのだ。普通なら神聖力の融通などできない。しかし、唯一この方法なら与えられる。

「…… まだまだ！ 傷口をふさいでおかないと！」

今度はシャティエルが命の限界まで踏ん張って傷口を塞ぎ続ける。そうしなければせっかくシャティエルの体から与えられた神聖力が失われてしまい、甲斐がない。

だが、やがて力尽きる。

シャティエルは異能を保つ力を失った。

その発現が解け、もう影として傷口の中にいられずミカエルのすぐ脇に横たわる。

その行く末は明らかだ。

神聖力をほぼ失った今、既にシャティエルの体は微粒子へと分解を始めている。あと数瞬で消え去る運命だ。

その時、ミカエルが目を開けた。

シャティエルの神聖力を受けて持ち直したのだ。

そして傍らのシャティエルと目が合う。

微笑むシャティエル、驚くミカエル。この瞬間、あらゆる感情が伝わる。

しかし言葉を交わす時間はなかった。

シャティエルの体は全て微粒子となつて立ち昇り、消えていった。ミカエルはようやく指先を伸ばしたが何も掴むことはできず、ただそれを目で追うしかない。

「シャティエル、なんでや…… なんでうちの代わりに死んだ…… どないしたらええのや？ シャティエルのおらん世界で、これから」

何にも代えがたい莫逆の友はもう存在しない。シャティエルはミカエルの代わりに逝った。決然として、友のために。

もう思い出の中にしかないのだ。ミカエルが嘆いても嘆いても…… 取り返しはつかない。

これを見つめていたマルコキアスが、やがて怒鳴るように話す。

「馬鹿なことを言うな！ 漢が、一度志を持ったら捨てていいものか！」

生きている者はまだこの世界にいる。そして動くことができる。

ならば、生きながら死んでいるような状態は許されない。マルコキアスの言いたいことは単純明快なことである。だからこそはつきりと、大声で言っているのだ。

「どんな道を行くにも悲しみの一つや二つ転がっている。当たり前だ。それがない道などない！ 悲しみを全部避けて進めるかッ!!」

「マルコキアス……」

「死んだ者のためとか、供養になるとか下らんことは言わん。死んだ者は死んだ者だ。だからこそ生きている者はそれに捉われることなく、生きている者のために動け。ミカエル、全てを乗り越え前へ進め！ 生きているうちは進め！ なにがなんでも歩みを止めるな!!」

「……」

そこまで言うとはマルコキアスは口を閉じる。

これ以上語る必要は無く、短いけれどそれに尽きている。

後はミカエルの目に光が戻るのを待つ。それが優しさというものだ。

「……なんやそら。そもそも漢ちやうし。マルコキアス、そつちこそ魔界城を壊しよつてアホやろ。前から思うとつたけどな」

「必要経費というものだ」

「せやけどマルコキアス、似合いもせん説教やつたけど、なんちゆうかええことも言うな。めんどくさい奴やでほんまに」

そういういつもの憎まれ口を聞いて安心したのか、マルコキアスがふん、と一言残して立ち去った。今は空元気でも構わない。口が回るなら大丈夫だ。もう一回くらい泣いてから戻れと言わんばかりに。

その頃、魔界城を巡る攻防戦は佳境に入っていた。

どうしても天界側の数に勝てる決定打はない。

ガブリエルらが踏ん張っても、徐々に押し込められていく。防衛し切るのは難しい。そこでルシファーはわたしを含め、主だった者たちへ方針を伝える。

「状況はよくないわね、向こうのアサエルが最終攻勢に出てくれば危ないわ、だか

「何じや姉様!? 東方城へ退く? では初めから魔界城は捨てるつもりで……なるほ

どのう。向こうの疲労を誘うには魔界を広く使つて転戦するのも方法じやな」

ガブリエルが驚き、そして納得するのも道理だ。

ルシファアの姉様はただ遮二無二防衛をしていたのではなかつた!

魔界にも防衛拠点は幾つかある以上、それを臨機応変に使うことを最初から考えていたのだ。

そこで今、魔界城に次ぐ規模を誇る東方城への撤退を指示している。

東方城は本来ベルゼバブの居城だ。

姉様は側近である魔界公爵アシユタロトに全権を与え、既にそこへ遣わしていたらしい。次の本拠として防衛態勢を構築させるために。

「どうせ魔界城はマルコキアスちゃんが半分ぶち壊しちやつたし、いい頃合いだわ〜」
「……」

これには誰も答えない。当事者の一人であるミカエルも複雑な表情だ。自分が悪いと思つてないマルコキアスが一番傲然としている。

そして魔界側は肅々と撤退に入っていく。

わたしやガブリエルがひときわ激しく長距離攻撃を仕掛け、いったん天界側を守勢に回らせた隙に城から撤退する。それも正面戦線にも裏手戦線にも遠い、ちょうど死角になる辺りから出て行く。

逆に攻める天界側にとつては追撃の好機でもある。

だが、追いつ追われつの追撃戦は実現しなかった。

なぜなら天界側は追撃の前に正面の本隊と裏手の別動隊を合流させなくてはならぬ。そうしなければ魔界側が素早く一丸となつて各個撃破を図ってきたら慌てさせられる。その可能性を排除するため、天界側の方もまた速やかに一本化する必要があるのだ。

それともう一つ、天界側の総大将アサエルが超急戦に出なかつたのは純粋な戦術面の判断だけではない。

やはりシャティエルの訃報が明らかになつたからである。

「シャティエル……可哀想なことをしてしまつた。お前のことだから最後は優しさが出てしまつたのだろう。戦いには向いていないのに、異能だけで判断して送つてしまつた。本当に罪深いことだ」

アサエルもまた反省し、ひどく落ち込む。

もちろんシャティエルの最期を詳しく知っているわけではない。しかし、シャティエル

の繊細さを分かっているからには、かなりの部分を正確に推測していたのである。

しかしいつまでも精彩を欠いてはいられない。

アサエルは総大将として追撃を命じた。

それに従い、天界勢は潮のような流れでその態勢を取り、移動を始めた。

ここまでの戦いで下級天使のかなりの部分を失っているのだが、それでも五千を数える大軍勢だ。

野戦に持ち込んだらまず負けることはなく、まして追撃戦であれば一方的な戦いになる。

魔界側の移動先は東方城と判明している。

逃げ込まれるのを完全には防げないだろうが、その前に叩けるだけ叩いておけば今度こそ攻防戦に方をつけられるだろう。

だが、戦いの行く末はどちらにとっても思わぬことになった。

第二十一話 総員、突撃!

アサエルは気を取り直して追撃をかけたのだが、それは実を結ばなかった。

決して行軍速度が遅いわけではないのに、東方城へ向かっている魔界側の軍勢を不思議にも捉え切れなかったのだ。

「おかしい…… もうじき東方城が見えるくらいのところへ来ているのに手応えが無さ過ぎる」

そう疑念を呈し、全方位へ向けて今一度斥候を放とうとした。さすがにアサエルはそういうところも抜かりがない。

しかしタイミングとしてほんのわずか遅かったのだ!

まさにその瞬間、わたしの声が響き渡る。

「総員、突撃! 狙うは天界側の中心部!」

わたしはルシファアの姉様が言う転戦による漸減作戦には感心する。

それは地の利を活かしたとても優れた作戦だ。天界側は大軍勢といえども無限ではなく、広く分散してローラー制圧まで行うにはリスクがあり、事実上無理だ。

ということとは天界側にすれば、あくまで大兵力同士が決戦しか戦術上とりようがない。つまり魔界側が転戦するのなら、仕方なく追いかけてここに付き合うしかないのだ。それが続けばいつかは天界の大軍勢といえども物心両面から疲弊するだろう。

姉様はかつて天使長だったが、それは単にとりまとめ役という意味ではなく、同時に天使全軍を率いる将帥だったという側面を持つ。

個人的な戦闘力に加えて将帥としての力量がある。

その優れた戦術センスは今もなお健在であり、この戦いでも魔界城を捨て石にしてかなりの出血を強いている。あれだけの戦力差があっても渡り合う、いや先手を取って翻弄しているのは見事としか言いようがない。

ただし、それでもだ。

根本的なことを言ってしまうと城砦による防衛戦というものは援軍の存在があつてこそそのものだ。

この場合はそれが望めず、むしろ天界側の方へ後詰が到着する可能性すらある！

そうなれば更に差が開いて絶望的になる。こちらがちよこちよこ動けば動くほど拠

点を失うだけになり、自分で自分の首を絞めてしまう。

長期持久戦がいいとは限らない。

だからこそわたしは姉様に奇襲を提案した!

天界側は猛追をかけているつもりだ。

当然、東方城へ向かって最短距離を来るので、そのルートを容易に計算できる。ならば狙いすましての奇襲ができるではないか。

東方城がこの場合囨役になってもらう。

もちろん過小な戦力で奇襲などすれば戦力の逐次投入と何ら変わらず、あつという間に取り込まれて磨り潰され、少ない戦力を余計に減らしてしまうだろう。それこそ天界側の思う壺である。

やるなら大戦力で仕掛ける!

つまり、のるかそるかの大博打にならざるを得ない。

わたしの提案にルシファアの姉様も同意してくれた。

「そういえばラファエルちゃん、私の後でずつと天界勢を率いていたんだものね、いい策だわ、ラファラファ」とまるで教え子の成長を喜んでいるようだった。面白そうに、笑って。

今、わたしは奇襲攻撃の火蓋を切った!!
放った言葉はそのためだ。

思わぬ方向から肉薄し、天界側の防御を一気に切り裂き、今度こそ中枢部を叩く。劣勢からの勝利を掴み取ってやる。

すると続けて魔界のマルコキアスの声がした。

「魔界は魔界の者が守る。熾天使などに大きい顔をされてたまるか！ それがあったら、全員俺に続け！」

マルコキアスもまた自分が先頭に立ち、魔界勢を率いて突撃を開始している！

驚いたことに予備戦力もクソもないではないか。温存などせず文字通りの全戦力で挑みかかっているとは、やはり尋常な胆力ではない。

「とうかアホなだけやろ。あいつは」

「まあ確かにそうだ。しかし案外最適解かもしれないぞ。それよりミカエル、お前は傷がある。ここは無理せず後方においてくれ」

「ラファエル、それはあかん。うちも行くで。シャティエルの敵討ちや。いや、実は何が敵なのかよう分からんけどな」

「……何だそれは」

結局、こちららも熾天使四人が揃っての急進だ。

ミカエルのことは心配だが、シャティエルの神聖力を受け取ったせいでもなんとか動いている。そしてたぶん何ももしないでいれば、亡きシャティエルのことを考えて余計塞ぎ込んでしまうのに違いない。ここは無理しない範囲で戦いに参加した方が気が紛れるのではないか。

一方、奇襲を受けた天界側では急ぎ対応を考えている。

「く、ここぞ逆撃か！ 思い切った規模だな…… だが皆落ち着け。これは逆に最高のチャンスをくれたようなものだ。防御陣を直ちに構築し、それで凌げば返り討ちにできる！」

アサエルはさすがに間髪容れず防御態勢を整えていく。

言っていることは空元気ではなく全くの事実である。

戦力差は最初から明らかであり、天界側としては奇襲の勢いを一度止めさえすれば必ず盛り返し、後は何とでも料理できるのだ。

「下級天使による多重防御を確保！ バラキエル、質変改術エンチャントメイクトによる強化を最大限で頼む。逆にタウエルは迷霧隠境アライブミストをまだ使いな。あれは大軍の方に不利になる。もし使うとすれば、万が一の退却時だ。今は自分の身を守れ。それとハムエル、下手に突出するなよ。お前の矢は近接戦闘には向いていない」

矢継ぎ早に指示を出し、そのどれもが理にかなっている。

実際アサエルは剣の達人でもあるが、戦術指揮においてもひとかたならず自負心を持つている。

なぜなら、熾天使たちが皆反逆してから今日までアサエルが天使全軍を任されることが多かった。

つまり天使長ルシファアの戦術面の教え子がラファエルならば、そのラファエルの後継者がアサエルなのだ。今もアサエルは本来の姿である剣士として立っているのではなく、剣を指揮杖に変え、それを振りかざしている。

ここで負けるわけにはいかない！

どちらにも意地がある。

「異能発現、コンバージョン歪曲夢幻！」

奇襲の嚆矢はウリエルの異能から始まった。

急速に接近し、指呼の間に臨めばこの異能が活きる。いったん天界勢を惑わせ、間合いと方向を誤認させてやる。

先ずは確実に突撃を成功させて強引に戦列へ躍り込むのだ。

その次はガブリエルの番である。

「妾が道を拓く! 異能発現、フオーレンサンダー雷破撃壊!」

異能による稲妻を使い、幾重にも重ねられた防御陣をこじ開け、中枢部への道を明らかにする。

ただし完全にうまくいったわけではない。

天界側もそれくらいは予期していたらしい。

下級天使は止まって防御しているのではなかったのだ!

常に軍団単位で渦を巻くように動いている。つまり、いくらガブリエルが強力に攻撃してもそれによって開いた穴は見る間に塞がれてしまう。

憎たらしい工夫ではないか!

下級天使を斃していくことはできるが、進行はままならず、これでは奇襲の利点を削がれ、やがて数に呑み込まれる。一気に中枢部を叩くのが肝要なのに。

「くそ、アサエルめ上手いな…… ガブリエル、闇雲にやってもダメだ」

「む、それは確かに…… ではラファエル、どうするのじゃ?」

「考えがある。ここは同時攻撃だ」

「な、何と同時攻撃!!? ……面白いぞラファエル。では絶対切断を乗せてくれ」
アルタイムットソード

どれだけの威力になるか分からない。

前の戦いでもこんなことはやったことがないのだ。

しかしぶつつけ本番、ここでやらずにどうする。

「異能発現、雷破撃壊！」フォールンサンダー 「異能発現、絶対切断！」アルティメットソート

斬撃が雷光を放ち、電撃をまとう。

これまでにない威力の攻撃が撃ち込まれた！ それは下級天使を次々と吹き飛ばし、天界側の中枢部に近付く。

だが残念だ。

あと一步のところまで届かなかった。

下級天使の数にものを言わせた防御は厚過ぎる。その重厚さは前の戦いの比ではない。
い。

いや、それだけでもない。

アサエルはこういうリスクさえも予期していたというのか。バラキエルの質変改術エンチャントメントでしっかりと中枢部周辺に絞って護っていたらしい。しかもそれは硬化だけではなく、雷撃を通さない性質まで付与しているのかもしれない。うまくこちらの攻撃のタイプまで分析し、忌々しいほどそれに対応させてあるとは。

しかしものは考えようである。

あと一步なのだ。もう少しの力があれば到達することができる。

なにかないのか……

いや、方法がないことはない!

「力を貸せ! 魔界の脳筋!」

「…… まさかと思うが、熾天使ラファエル。貴様は俺を呼んだのか?」

「他に誰かいるとも思ったか。いいからさっさと手を貸せ、マルコキアス」

「熾天使の中でも間抜けなお前にそう呼ばれる筋合いはない! 俺一人でも突破口を開いてやる」

「馬鹿、そんなことを言ってる間に魔界の者はどんどん討たれているぞ! 奇襲で逡巡は致命傷だ」

「……」

「だったら一つ提案してやろうじゃないかマルコキアス。わたしはついこの前、人間界の中学に通っていたんだ。嘘じゃないぞ。だからわたしが本物の女子中学生の姿を教えてやれる。ああ、残念だなあ。そうすればあんなクソ演技V t u b e rではなく本物に近付けるのに」

「……………」

これでマルコキアスが協力してくれた！

もちろんわたしが演技指導なんかする気はない。いや、それができるほど器用だったから最初からソータ君も納得していただろう。

そもそもマルコキアスだって魔界の軍団長としての面子があるため、少しばかり抵抗してみせただけであり、力を併せるしかないと分かっているはずだ。わたしと取引する形となればそんな面子が守られ、周囲も納得する。

まさかマルコキアス、本当に演技指導に期待してるわけじゃない……よな？

細かいことは後でいい。

熾天使と魔界の共闘、その成果を確認する。

さあ行くぞ、最大火力だ。

第二十二話 決着

声が重なり、高らかにこの戦場へ響き渡る。

「異能発現、フォールンサンダー雷破撃壊！」

「異能発現、アルティメットソード絶対切断！」

「異能発動、クラッシュユパワー打力碎塵!!」

ガブリエル、わたし、マルコキアスの三人が同時に異能を発現させ、それぞれの攻撃を重ねる。この三人の異能はほぼ攻撃に特化したものであり、それらを相乗効果で使うのだ。天界に属するべき熾天使と魔界の軍団長が同じ目的のために力を合わせる、歴史始まって以来の出来事だろう。

それは予想以上の力となった。

さしもの堅牢な天界防衛陣も次々と薄紙のように破られていくではないか。

ついに、ついに攻撃が天界側中枢部まで届いた！ ようやくだ。

生じる余波も凄まじく、その通り道に沿ってまるで嵐のように砂塵が巻き起こる。

そのため広く視界が利かなくなってしまう、誰かを倒せたのかどうかも確認できない。だが少なくとも中枢部まで遮るものは何もなくなったはず、今なら突撃も可能だ。

「ヨキエル、ヨキエル、しつかりしろ！ 傷は浅い。早く後方へ行つて休め。おのれ反逆天使ッ！ 積年の敵である魔界と手を組むとは、そこまで堕ちたかッ！」

天界側中枢部ではハムエルが激昂している。

今の一撃で中枢部は多少なりとも被害を受けたが、その中に偶然ヨキエルが含まれていた。直撃を食らつて吹き飛ばされてしまったのだ。

これを見たハムエルが黙っていられるはずがない！

ハムエルにとつてヨキエルは長年の友なのだから。

気の短いハムエルとおっとりヨキエルは天界でもウマの合うコンビとして知られている。

いつにも増して力を込め、異能を使って反撃に出た。

「熾天使だつたくせに今では魔界と同じクズども、生かして帰さんぞ！ 死ね！ 異能発現、ミラクルアロー神弓射矢!!」

わたしの方はやっと攻撃が通ったことで安堵してしまい、それに気付くのが遅くなつてしまった。

「ラファエル危ないッ！」

一本の矢だ！

うつすらと光をまとい、ただの矢ではないことが分かる。

それは砂塵をもともせず、鋭くわたしに向かっているのだ。側にいたミカエルが気が付いてそう言ってくれたがもう近過ぎる。

絶対切断を出して迎撃するには間に合わない！

かといってこの矢は単純に剣を振るつても墜とせない。神弓射矢ミラクルアローの異能による矢は

必中であり、簡単なものではないのだ。

「暴炎熱威！ストームフレア ふう…… 間一髪やな」

「本間に間一髪だった。助かったぞ、ミカエル」

ぎりぎりで助けてもらった。

先に気が付いたミカエルが慌てて異能の炎熱をばら撒き、それで矢の威力を減じてくれた。おかげでなんとか剣一本で弾くことができたのだ。剣はあっさり折られてしまったが、矢の軌道をほんのわずか変え、かろうじて命中を防いでいる。

油断は大敵ということだ。

むろんこれで安心ではない。

ハムエルの矢が次々と連射されてくるではないか。わたしにもガブリエルにも、マルコキアスにまで矢が射られている。

「異能発現、フォールンサンダー雷破撃壊」「異能発動、クラッシュユバワー打力碎塵」

だが、しつかり身構えていれば対処ができる。

ハムエルの矢を見据え、こちらにも異能を使って叩き墜としていく。

目を向けるとやがて弓を引き絞るハムエルが見えてきた。

ハムエルもこちらを斃さんと砂塵を抜けて向かってきていたのだ。そのハムエルの凄まじい気迫に驚いてしまう。もちろん神弓ミラクルアロー射矢の威力は高く、決して過小評価するものか。

だが、それでもだ。

もはやこつちのものである。

矢は隠れたところから射られるから途轍もない脅威なのである。しかし今やハムエルは後先考えず出てきてしまっている。つまり、わたしはハムエルを直線状に視界へ捉

えているのだ。

アルティメットソード
そしてわたしの絶対切断は目に見える範囲で全てを斬り飛ばすことができる。

この勝負、ハムエルには悪いが結果は見えている。

もはやわたしの勝ち揺るぎない。

「ハムエル…… 済まん。異能発現、絶対切断」
アルティメットソード

再び一直線に矢が向かってきたがもの数ではない。異能の斬撃が矢を斬り墜とし、そのままハムエルに向かって飛ぶ。

しかし、それがハムエルを斬ることはなかった。

「だめだハムエル!!」

ハムエルに飛び付き、抱き抱えたまま横になぎ倒し、辛くも絶対切断アルティメットソードの軌道から逃れさせた者がいる。

ハムエルはそれで助けられたが、逆にその者が斬られてしまっている。

「ア、アサエル! そんな!」

「前に出るなど言つたらうハムエル。重大な命令違反だぞ。詫びは後で聞かせてもらう。しかし良かった…… お前は無事か……」

ここでハムエルを助けたのは総大将アサエルだ！

逆上して突出してしまったハムエルの身を案じ、アサエルはここまで追いかけていた。

シャティエルを失ったアサエルはこれ以上仲間を失いたくはない。それを怖れ、自分もまた危険を承知で中枢部から出ていたのだ。

「アサエル、悪かった。お前が代わりに斬られたのか…… しっかりとくれ！」
ハムエルが慌ててアサエルを抱き起こす。

しかしアサエルの傷は浅くなかった。

左肩からざっくり斬られ、死には至らないが一人で歩くことはできそうにない。

わたしの方は二人をすぐさま斬ってしまうべきか、一瞬の迷いが出てしまう。中枢部をなんとか倒さねばとは思っていたが、まさか急にハムエルとアサエルに対面するとは想像せず、驚いてしまったからだ。むろんその二人のどちらとも旧知の仲である。

だがこれも武の習い。

一度戦いに身を投じたからには迷うことは許されない。

迷うことは美点どころか欺瞞そのものだ。

優しさや甘さは今、偽善にしかない。

ここまでの戦いで逝った者たちに対して言い訳が立たないではないか。傷つける痛みも傷つけられる痛みもすっかり甘受するのが武人の矜持であり、同時に責任なのだ。

「……アサエル、覚悟。しかしこれで戦いは決着する。異能発現、絶対切断」
アルティメットソード

しかしわたしは無意識のうちにブレーキがかかり、ワンテンポ遅れてしまったようだ。

斬撃が発現する直前、辺りの様相が変わった。

突然の深い霧が辺りを覆い隠し、すぐさま視界が利かなくなっていく。考えるまでもなく、これはタウエルの異能迷霧隠境によるものだろう。

そして天界側はいったん戦場を放棄して仕切り直すことにしたようだ。

タウエルの霧に紛れ、中枢部をしっかりと保持したまま退却を始めている。

結果我ら熾天使と魔界側の共同で行った奇襲攻撃は一定の成果をもたらした。

雌雄を決するまでには至らなかつたが、下級天使の相当な数を減じ、また少なくともアサエルを負傷させた。

尚もミカエルの炎熱を利用して霧を払いつつ、中枢部を追っていく。

それに対して天界側は惜しみなく下級天使をぶつけ続け、その隙にいつそう大きく後退している。

さあ、ここから再編を終えて向かってくるのか……

もちろんわたしは調子に乗った深追いが危険だと知っている。ここは奇襲の成果を台無しにしてしまう前に正面衝突を避けるべきだろう。早いうちに東方城に入る算段を考える。

ところが、天界側は向かってこなかった！

そのまま肅々と退いていくばかりではないか。

誘い、あるいは罠かと思つたが、どうもそうではなく本物の撤退のようだ。

やがて天界勢は魔界の入り口にまで到達し、そのまま全て出ていく。

とてもあつさりしたものだ。

過去に類を見ない大規模な戦争の幕切れとは思えない。

「ラファエル、この魔界防衛戦は成功したようじゃな。苦しいことの連続だったが、勝利には違いない。お主の奇襲作戦が功を奏したのじゃ」

「……ガブリエル、しかし解せない……」

「何がじゃ？ 天界側は総大将アサエルの傷が深く、これ以上は無理と判断したとしか

思われぬ」

「いやいやガブリエル、そんなことはあり得ない！ アサエルの性格からして負傷のためには弱気になるなど考えられない。自分が負傷したからこそ、いつそう戦闘継続を命じるはずだ。そういう奴であることは賭けてもいい」

そうだ。わたしの違和感はそれに尽きる。

どうにも撤退の理由が分からない。余力を十二分に残したまま撤退するものだろうか。

第二十三話 何者

これについて、実のところ天界側でも戸惑いは大きかった。

総大将アサエルから撤退方針が伝えられると上級天使は皆そろって驚いた。

次には安堵した。

むろん誇りある天界の軍勢だ。そこに戦いを避けるような柔弱な者はいない。それでも、やはりヨキエルやアサエルの負傷を案じていた。その負傷が決して軽いものではないことを知る以上、無理を重ねて命を失わせてはいけない。

仲間を死なせたくないのは誰もが一緒だ。

ここで素直に撤退し、その二人に傷を癒してもらおう方が嬉しい。

ただし全員がそう思ったのではない！

武闘派のハムエルは撤退に納得しなかった！ 自分の短慮が原因でアサエルが負傷してしまつたからこそ、この戦いを勝利で飾りたい。

いや、アサエルにどうしても勝利を飾ってもらいたいのだ。

「アサエル、ここで撤退とは何かの冗談か？　ちつとも面白くないぞ。魔界まで勝ちに來たんだろう。負傷で指揮が執れないなら、私が代わって全軍の指揮を執ればいいだけだ。そのための副司令だろうが」

「気持ちをよく分かる。アサエル、お前は戦うことで償いたいのだろうか。まったく素直じゃないお前らしい言い方だ。しかしこの場合は無用なんだ。撤退は別に負傷のためではない」

ハムエルはアサエルの気持ちを理解した上でそう言った。では撤退の理由はいったい何か。

「実はハムエル、これまで秘匿していたことがある。戦いに出る前、神は撤退の条件についても伝えておられた。『下級天使を半分以上失えば、無条件で帰還する』、こう命じられていた」

「……　神が、そんなことを？　確かに今は下級天使も三千を切り、大半を失った計算になるが……　しかしここまで苦勞して戦ってきたおかげで、魔界の多くの者を倒してきたからには、戦力比で言えばむしろ最初より有利になった。撤退せず戦いを継続すれば勝てる」

「その意見は正しいと思うし、悔しいのは同じだ。それでも神の命令は絶対だ。状況の

良し悪しは判断の材料ではない」

「むう……」

アサエルは自分の感情を優先せず、愚直に神の命令を守る。そこまで言い切られればハムエルも唸りつつ同意するしかない。

そのアサエルは天界に帰りつくと傷を癒す間もなく神殿に入る。

神に対し、今回の戦いの総大将としてしつかり報告する義務がある。戦役の結果があまりかんばしいものでなくとも義務から逃れることはできないし、むろんアサエルは撤退に至った経緯を正直に報告するつもりだ。

「で、ハムエル、何でお前までついてきた。一人で充分だぞ」

「神に釈明するなら二人でやるべきだろう。副司令として当然ではないか」

ハムエルまで一緒に神殿に入ろうとしている。

せめて目的を達成できなかった責任を共に取るつもりなのだ。ハムエルは自分のためにアサエルが負傷したことを未だにひきずっている。

そんなハムエルの気持ちを思いながら、アサエルは同行を許可する。

そして神殿の奥深く…… 釈明を言うより早く神の言葉が響いた。

—— ご苦労であつた。アサエル、そしてハムエルよ

「神よ、魔界侵攻の大役を仰せつかり、七千もの大軍を与えて下さつたのにもかかわらずこの体たらく、釈明のしようもございません。魔界を制圧するどころかあたら軍勢を損ない、しかも命じられた異能使い討滅も成し得ず、無能なる指揮ぶりを晒しました」

「アサエルが悪いのではありません神よ。このハムエルが命令違反を犯し、そのためにアサエルが負傷し、撤退せざるを得ない契機となつたのです。魔界制圧失敗の非は全てこの身にあります」

二人とも言い訳せずにきつぱり言い切る。怒りを受けることは覚悟の上だ。

ところが神は二人を責めることは一切なかつた。

それは寛大さから来たものではない。労りや憐憫でもない。

—— 戦いの目的は十分に達成している。その指揮について何も言うべきことはな

「は？ 魔界に勝ち切れず、撤退を余儀なくされたのですが…… 目的達成とは神よ、そ

れはいったい」

アサエルはもちろん不思議に思う。凱旋とは程遠い状況で帰ってきたのではないか。神の言うことが全く分からない。

もちろん、それはハムエルも同じだ。

二人に言うが今回の目的は魔界の威力偵察に過ぎない。ある程度の事情を掴めばそれで充分である。制圧する必要などないのだ

「これほどの戦いが威力偵察とは！ しかも魔界を制圧する必要がなかったとは、どういうわけでしょうか。浅学非才の身にお教え賜りますよう」

そのままである。魔界を滅することはいつでもできる。今回は反逆側にいる異能者をあぶり出し、把握するだけでよい

これにはアサエルもハムエルも驚いた！

だがここで二人の驚きには大差がある。忠誠心の厚さによる温度差がそのまま考え方に出してしまうからだ。

忠誠心に溢れるアサエルは純粋に驚き、神の深慮を測りかねてしまう。しかしながらハムエルは違う。

戸惑いよりむしろ怒りに似た感情があるのだ。

なぜなら、言葉を重々しく飾ろうと何だろうと今回の戦役がただの偵察だと言われてしまった。

だが激しく戦ったからこそアサエルやヨキエルが深手を負ったのだ。アサエルは当面剣を持つことができず、ヨキエルに至っては起き上がることもできない。

何よりもシャティエルが失われてしまったではないか！

それはもう何をどうやっても取り返しがつかない……

全ての世界からシャティエルという優しい天使は消えてしまった。

さすがにハムエルも神に直接問いただすのは憚られたが、とはいえ相槌の言葉を言う気にもならず黙り込む。

それよりも次に行くべき行動を示す。遅滞なくこれを行え

二人の感情に構うことなく、何と神は新たな命令を与えてきた。

ここからの言葉もまた二人にとって衝撃だった。

だがしかし、感情はどうあれ神の命令には従わなくてはならない。

一方、魔界ではこれから膨大な手間をかけて復興を行う。

しかしわたしは今、そのことを忘れ、代わってやり切れなさに似た感情に支配されることになった。

目の前の小男のセリフによって。

「いやあ、堪忍したってや。二度手間で済まんがよろしゅう頼むで」

「二度手間……くそ、確かにそうだ……よりにもよってまたその場所へ行かねばならんとはな。わざとかアシユタロト」

「んなこと言われても……仕方ないでまんねん」

戦役が終わりとりあえず皆は東方城に入った。

そこにいた魔界公爵アシユタロトが駆けつけて、わたしを含めた皆へ告げてきたことがある。

何とアシユタロトはまた一人の異能者を発見したらしい！

新たな異能者を発見、それ自体は間違いない喜ぶべきニュースであり、アシユタロトを大いに褒めてあげるべきなのだろう。

ただし……その異能者のいる場所を聞いたら褒める気を失くしてしまう。

その場所はまたしても人間界、しかもピンポイントでよく知っている場所だったから

だ。

岡山市立第四中学校!?

つい数日前にわたしとミカエルが赴いた場所ではないか!　そしてソータ君を保護したのはいいけれど、さんざんすったもんだの大騒動になってしまった。わたしも学校の中まで化けて行ったり、一生徒として苦勞というか面白い経験というか、とにかく色々あった。

たぶんマルコキアスなどには垂涎の任務だろうが……　特殊な意味で……　だがわたしやミカエルはけっこう大変だったのだ。

どうしてまたそこに行く羽目になるのか!　凄く嫌という程ではないが、本当に二度手間だ。

わたしが普段に増して仏頂面になったのでアシユタロトは怖くなったのか、言うだけ言ってそそくさと逃げようとしている。

その逃げ道を塞いで追加情報を聞き取りにかかろうかとした時、姉様がとりなしの声をかけてきた。

「ラファエルちゃん、アシユタロトに悪気はないと分かるでしょ　本当に仕方がないわ」

「姉様、それはもちろん理解できるのだが……」

まあ実際理屈は通っているからには仕方がない。

それは実に簡単なことなのだ。

つまり、ソータ君が自分の異能であるスカイハイモーター聖天調和をダダ漏れにしていた結果なのである。

本当はソータ君の近くにもう一人異能者が存在していたが、しかしスカイハイモーター聖天調和のおかげで覆い隠されてしまっていた。だからアシユタロトも気付くことはなかったというわけだ。今、ソータ君がこっちに來たから発見できるようになったのだろう。

「しかし今回はわたしが行かなくてもいいだろう。道案内にソータ君は必要だろうし、それならミカエルがついていくのが妥当かもしれない。ソータ君はミカエルのファンだからな。しかしもう一人か二人護衛が要るのならウリエルやガブリエルが行ってみてはどうか」

わたしの提案により、今度はウリエルかガブリエルが行くことで話がまとまりそうになった。

しかし話は二転三転、結局またわたしがミカエルと行くことになった！

その異能者候補の名が明らかになったからなのだが、何の因果かわたしが幾度も会話をしたことがある者だった！

「え!? 新しい異能者って、まさかサキちゃんのこと! どうして!」
一番驚いたのはソータ君であり、裏返った声を出している。
そう、今度の異能者候補とはあの愛想のいい少女だったのだ。

第二十四話 救世主

私は昔から孤独だった。

あまり人と深く接することができないせいだ。

それもこれも、私が他の人とは違う力を持っているから。

幼い時は誰もがその力を持っていると思いきんでいたものだが、早い時期にそうではないことが分かった。

私が生まれながらにして持っている力を他のどんな人も持っていない。私だけの力なのだ。

その力とは、「流れが見える」ことである。

空を見上げれば、遠くの気流を目で見ることができ。だから雲の動きも予測できるし、雨が降り出すタイミングも分かかってしまう。

そういうことだけなら問題はなかった。ただちよつと便利というだけの話で。

しかし問題は「人の気持ちの流れとして」見えてしまうことだ！

もちろん他人が具体的に何を考えているかまで分からず、大まかな感情が見えるに過ぎない。ただし、良い感情か悪い感情か、はたまた無関心なのかぐらいはしっかりと把握できてしまうのだ。

これはとても辛い！

他人がどういう感情状態にあるか知るのには拷問に近い。人は口で何とでも言うが、実は全く違う思いを心に隠し持っている。本当は嫌っていて外側だけは取り繕うのが人間というものであり、幼児の頃はともかく小学校に上がる頃には皆そうなっている。私は友達とうまく接することができない。いや、友達を作ることができない。

知らない方が良かった、あるいは知らないからこそ築ける関係があるのだ。下手に真実を知ると、もう友達関係は維持できなくなる。

口で友達と言いながら内心悪感情を持っている人は多く、とても傷ついてしまう。かといって戦々恐々と媚びへつらつて接するのは疲れてしまつて無理だ。

むしろ教師に対しても、親に対しても、心からの信頼を持ってない。

しかし、この私に一人の救世主が舞い降りた！

それがソータ君だ！

ソータ君がそばにいてくれさえすれば私は流れを読むことができな

とても不思議なことだが、事実そうなのだし、言葉にできないほど助かる。他人の感情を見ることができない、それだけでどんなに幸せか。

私の家とソータ君の家が近所だったのはたぶん奇跡だ。

だからこそ同じ小学校に通うことになり、四年生の時に出会えたのだ。

それ以来、今の中学二年生に至るまで私はソータ君に救われ続けている。

私は皆から明るい性格になったと言われている。友達もできたし、むしろこの流れを読む能力がプラスに働くこともある。

私は部活で剣道をやっているが、この力は試合でアドバンテージになる。例えばこちらが攻勢に出た時の相手の焦り方で弱点が分かったりするのだ。学校の部活練習ではソータ君のためにあまりそういうことはないが、剣道の大会に赴くと普通に勝ててしまう。本番の大会でやたら強いところからいつの間にか私は不思議のサキと言われ、女子剣道部の新部長になってしまった。もちろん、試合と練習であまり大きな落差があつてはいけないという思いから練習も一生懸命やるし、それがいい循環になったのだ。

私はソータ君に対して積極的に押しかけ友達になった。

当然、いつでも近くにいるためだ。

同じ学校の中にいるだけで、おぼろげにしか分からない程度になるのだが、近くにいるほど完全に感情の流れが読めなくなつて楽になる。

逆に言えばソータ君が離れてしまうと読めてしまう。

幸運なことにソータ君の方は私を嫌がることはなく、普通に友達として接してくれている。たぶん、単純に近所の幼馴染み程度に思っているのだろう。

私にとつて決して手放してはいけない救世主。

私はいつしかソータ君を別の意味でも必要とするようになった。自分の感情を自分で見ることができたなら、どう見えるのだろうか。それは言うまでもない。

しかしある日突然、ソータ君が変わつた！

見かけは同じなのでクラスの誰も変化に気付かない。

しかし私には分かる！ ソータ君がそばにいても私が流れを読むことができるとは、重大な変化があつたに違いない。

そしてもちろん、ソータ君の感情の流れも見えてしまう。

一言で言えば妙だった。

その日のソータ君は変なことに強い興味を持つたり、とにかく尋常ではない。例えば給食で物凄く感動していたりするのだ。もはやソータ君かどうかという範疇を超え、普

通の生徒とも全くかけ離れているレベルだ。

いや、別に感情の流れを読む必要すらないのかもしれない。

ソータ君はクラスのヲタの人たちに少し距離を置いているのが常だったが、この日はなぜか積極的に交ざっていて、しかも自分から熱弁を振るっているとは！

また成績がそんなに悪くないはずなのに、小テストを白紙で出したのを見た時には驚いた。しかもソータ君は白紙でも何も悪びれず、平然としている。

客観的に見てもあまりにおかしい。

疑いが決定的になったのは、ソータ君が剣道部をなぜか熱心に見ていて、とうとう模擬戦になってしまった時だ。

そこでソータ君が勝ってしまった！ それも見事な剣さばきを見せての圧勝だった。

絶対に有り得ない。

これはソータ君ではない。

姿は同じでも別の者だ。私はそういう確信を持つ。へんてこな考えに取りつかれたといえはそうなのだが、それしか考えられないではないか。

とすれば本物のソータ君はどこへ行ったのだろう。

しかしそんなソータ君もどきもまた、二日後に姿を消したのだ。

私はもうどう考えたらいいのかも分からないし、どうしたらいいのかも思いつかな

い。人に話しても分かってくれるとは思えない。

人間界のその場所へ到着したのは夜半だった。

熾天使であるわたしとミカエルはともかく、ソータ君はさすがに戦役で気を張りつめていたのでクタクタだし、今はとても眠そうである。

とりあえず熾天使として自分の神聖力をソータ君に分け与える。よく天使が癒しの力を持つというアレだ。実際のところ人間の病気を完治させたりする程の力はないが、疲れを取ることくらいは簡単である。

明朝を待つて目的の異能者候補を待ち伏せることにする。

「しかしサキちゃんが…… 異能を持つてるだなんて信じられない。だったらどんな異能なんだろう」

「そんなことは予測もつかんで。でもこの街で突拍子もない事件が起きることがないなら、ソータ君が心配するほどのもんやない。例えばうちの暴炎熱威ストームフレイアみたいなやつたら大変なこつちやけど」

学校の理科室をその大変なことにしてしまったミカエルが涼しい顔で言っている。まあ、言っていることは本当のことだ。自分の異能をしっかりと見据えて、訓練しなければ

ば異能のオンオフはできない。

そして朝日の中、大きな川の土手で目的の少女に話しかける。

時間はソータ君が知っていた。伊達に幼馴染みではなく、少女の登校する時間を知らないはずはないのだ。少女は部活の朝練というか軽い筋トレのためにかなり早い時間に登校する。

もちろん最初はソータ君のみで近付く。

わたしやミカエルがいきなり出て行ったら不審に思われるだろう。

「や、やあ、おはようサキちゃん」

「ソータ君?! どうしたの! とうより本物のソータ君?」

「え……」

逆にソータ君の方が面食らって言葉を繋げない。

ちよつとした間が空いてしまったが、その後は慌てて少女の手を取って河川敷へ引張っていく。

「サキちゃん、理由はめんどくさいんだけど、ちよつと来て!」

「手を…… あ、そういえばネイナちゃんにもこうしてたね、ソータ君は」

「なんのことう?」

ソータ君が分からなかったのも仕方がない。ソータ君が手を引いたのは不登校のネイナという少女の姿を借りたポンコツ天使の話だから。もちろんソータ君にとつて女の子の手を引いたという意識はなく、化けているポンコツ天使をバレーコートから慌てて退場させただけと思っている。

「ええと、天界の天使というのが危険で凶暴で、サキちゃんをこのままにしておけなくて、それはサキちゃんが異能を持つてるからで、」

「何言ってるのソータ君？ 天界？ クラスのあの連中みたいに変な妄想しちゃだめよ。現実を見た方がいいわ。もう中二病に影響されてるの？」

「違うよー！ と、とにかくこのままだと襲われるんだ。僕の時みたいに」
説明は難しく、ソータ君も頑張っているがうまく伝わらない。

その様子を見かねてミカエルが助け舟を出そうとしやしやり出ていく。

第二十五話 探検隊

「ソータ君は君を守るために言ってるんやで。ここは喜ぶところやろ。まあ、来てもらえればうちらも助かるけどな」

「……」

「とにかく異能持ちは天界から狙われとる。このままにしておく選択肢はないんや」
「……」

ミカエルの説明も省略が多くて伝わっているか怪しい。というよりこの少女はソータ君と仲良さげに登場した銀髪の美少女に驚くばかりだ。そしておそらくVtube rは見ておらずミカミカも知らないんだらうな。

「ほんまはそないな理由も要らないんとちゃうか？ ソータ君と一緒にいたいはずや。めちやめちや好きやからな。そやろ？」

「え!? そ、そんなこと!」「急に変なこと言わないで! サキちゃんがそんなわけ……」
二人の慌てた反論を聞き、余計ミカエルがニマニマしているが、今はそんな風に話を逸らして場合じゃない。

説明が進まないじゃないか。

そこへ何と都合のいいことか！

説明に利用できそうな者がやってこようとしている！

四枚羽クワッドをひらめかせ、天空から猛スピードで下降し、見る間に近付いてきた。その後ろにはぞろぞろと二枚羽デュアルが続いているようだ。

「ミカエル！ ラファエル！ その少女を連れて行くな！」

「やはり来たなハムエル。だが連れて行くなと言われているいそうですかと言えるか！」

「とにかく話を聞け、馬鹿！」

いいタイミングじゃないか。

おあつらえ向きにハムエルがやって来たとは、今回ばかりは褒めてやろう。少女もこれで追手の存在が分かるというものだ。事実、少女はこの天界からの一団を見て目を丸くし、警戒を強めている。

そしてこの一団と戦う必要もない。あのソータ君の時とは違ってこちらが先手を取っている以上、このまま逃げればいいだけだ。ハムエルとまともに戦うのも危険が伴い、避けられるのならそれに越したことはない。おまけにソータ君の異能があれば逃げるときにハムエルの矢を射かけられても無効化できるのは実証済みである。

「おいこら逃げるなラファエル！ 話を聞けと言ってるだろうが、この脳筋！」

「何を！ お前とかマルコキアスにだけは脳筋と言われたくない！」

「そこだけに反応するのか貴様！ いや問答をしている場合じゃないんだ。簡単に言うが、その少女を連れ去ったら人間界が滅ぶぞ。それでもいいのか！」

「何だと……」

ハムエルはあまりに意外なことを言ってきた！

こちらを引き留め、少女を天界の方へ連れて行きたいのは分かる。しかし、その理由がよく分からない。

人間界が滅ぶ？ どういうことだ。

ハムエルは腹芸ができるほど器用な奴ではなく、いつでも直球勝負だ。

頭はアレだが騙すことはしない。この期に及んで嘘を言うことはないだろう。

「どういう意味だ？ 話せハムエル」

「神が言ったんだ！ 人間界の異能者を連れて来いと。もちろんその少女のことだ。そしてもしも少女を貴様らに取られたら、人間界を滅ぼすとおおせられた」

「神が、人間界を滅ぼす……」

「あの戦役の後のことだ。『魔界への威力偵察により異能者が相当数いると分かった。』

これ以上向こうに集合させてはならない。その可能性があれば人間界を滅ぼそう。今度は地を揺るがし、痕跡も残さず』そう語られたんだ！　嘘じゃない！　こっちだって人間界には愛着がある。滅ぼしたくはないんだ。だから神を怒らせるなラファエル！」

「そんなことが……」

これは驚きだ！

我ら熾天使は神が理不尽にも人間界を滅ぼすから決起したので。

神というものはいつ何時人間界を滅ぼしにかかるか分からず、どこまで観察にとどめるのか分からない。猶予があるのか、限界に近いのか、神以外は誰も知らないのだ。神が勝手な理由で滅ぼすことを決める。

しかしそれはまだまだ先のことだと根拠もなく思っていた。今の人間界にはあまり問題はなく、我らでさえ充分に猶予があると思っていたのだ。

それが何と至近に迫っていたとは！

しかも理由がまたもや理不尽である。

こちらが神に対抗するために戦略を考え、異能持ちをかき集め始めたのが発端になったらしい。神はあの魔界での戦争を起こしたことにより、こちら側に異能者が多いと知ったからこそ危機感を持ったのだ

そして確かに異能者は人間界へ稀に出現する。なぜか理由は分からず、神の力が漏れ

出ているのかもしれない。

神でさえその把握は完全ではないのだ。だからこそ短絡的に人間界を滅ぼせば禍根を絶てるとでも思ったのか。きれいさっぱり刷新してから再興させれば別に問題ない、と。

そんなことが許せるものか！

命というものはそれぞれ一つしかないもので、今人間界で生きている者は全てかけがえない。神がそれを理不尽に吹き消すとは絶対に許せない。

ハムエルは神の絶対的権威と力を知るがゆえに、屈服し、従うことで何とかしようと思っただろう。

だがわたしは素直じゃない！

わたしだけではなく熾天使と姉様は全員意見が一致するはずだ。

なおさら神を倒してくれる！

むろん状況はいっそう悪くなったといっている。神が人間界を滅ぼすと決めてから実行するまでの時間はいかばかりか。数日か、数年か。あるいは数時間か。

それは分からないが、とにかく早いうちに神と対決しなければならなくなった。

「ハムエル、生憎だがこっちはそれでもためらわない。どうせ神がいる限り人間界はい

つでも風前の灯なんだ。この少女を渡してもそれは変わらないことだろう。だったら戦うしか選択肢はない」

「馬鹿な……貴様ら熾天使は気が狂っている。神と戦って本当に勝てるか？ 絶対に無理だ！ だからこそ素直に従うしか人間界を延命させる術はないッそれがなぜ分らないんだ！」

「延命か。なるほどハムエルはそう考えるのか」

ハムエルは神の言うことだからと無批判で受け入れているわけではなさそうだ。それだけが収穫とも言える。

まあとにかく長居は無用、少女とソータ君を連れて帰る。

「うくん、ソータ君のいる方が正義っぽいわね。だったら上等！ 一緒に戦うまでのことー！」

「おい少女、なんだか前向きだな」

事態はかなり深刻なんだが……ただでさえ困難な戦いにタイムリミットまで付けられてしまった。

しかし渦中の人である少女がそう言っている。ソータ君とはまるで違って割り切りがいいのは、たぶん良いことなんだろう。

この少女の持つ異能、後に分かった明流フローサイトアイ覚醒がどういうふうに役に立つのかは置いておくとしても。

そして一度あることは二度もある。

何とソータ君と少女が魔界に到着する前に、アシユタロトが異能者候補をもう一人見つけていたのだ！

「あゝ またアシユタロトが見つけたそうよ。うまく合流すれば異能者が十二人！
ようやく目的達成よ〜」

「また時間差か。しかし良いこととはいえ何でこども次々見つかるのじゃ？ ここにきて急過ぎるわ。姉様、おかしいのではないか？」

「んゝ、異能者が増えると引力があるのかしらねゝ でも今度も理由があるわゝ 場所が場所だからゝ」

その場所が問題だった。

今度、異能者候補のいる場所は人間界ではない。

何とこの魔界、その最深部だったのだ！

そこに僅かな反応があるらしい。つまり先頃の大戦乱が起きた結果、人員や資材をそ

ここから全て引き抜いたために、アシユタロトが見つつけやすくなったという可能性がある。

ではなぜ魔界の軍勢が魔界の最深部に配置されていたのか？

実は姉様を始めとして魔界の者といえどもその最深部に行ったことはなく、様相が分からないのだ。時折分類不可能なモンスターがそこから出てくることだけは確実なので、境界線を引き、常時一定数の魔界の軍勢が警戒に当たっている。

「分かった。姉様、異能使いを見つけるため、今度は魔界の最深部へ探検せねばならないわけじゃな。ならば妾とウリエルで行けばよからう」

「どんな様子か分からないわ、だからみんなで行きましょう、ウリガブ」

魔界の深部へ行く探検隊が編成された。

ガブリエル、ウリエルの他、姉様、アシユタロト、ラグエルの合計五人である。

戦力として頼もしいマルコキアスは天界の再侵攻を警戒して残さざるを得ず、またベルゼバブは矢傷のために療養が必要であり、参加できない。

第二十六話 神を殺す槍

異色の合同探検隊は魔界の深い深いところへ進んでいく。

そこにはわけのわからない植物が生い茂り、見たことのない昆虫が飛んでいる。時折妙な動物が跋扈しているのも観察できる。魔界をやつと見慣れてきたばかりのガブリエル、ウリエル、ラグエルは驚くばかりだ。いや、ルシファーやアシタロトにとってさえ予想を超える奇怪な様相なのである。

普通ならこんな探検は心細いし、少なくとも慎重になるだろう。

しかしこの場合は別である。臆病なラグエルやアシタロトはともかく、他の者は恐れもなく進んで行く。

「先を急がねばならん。こんなに広いとはな…… しかしなぜこれほど広いのじゃ？」

魔界とはもつと小さい世界だと思っておったが」

「ガブリエル、それについて仮説があるわよ」

「姉様、何じゃその仮説とは」

そしてルシファアの姉様が語ったところによると……

魔界とは要するにゴミ捨て場である。言い方を取り繕おうと难道ろうと、その一言に尽きる。

神がいったん創造したが役に立たないと判断したもの、あるいは後で不要になったものを放り捨てた場所である。

それには全く不要として叩き込まれた場合もあれば、一時的に置かれた場合もある。はたまた自分から神を恐れて逃げ込んできた場合も含まれる。

その中でも、姉様のように個人のレベルということもあれば、種族丸ごと移動してきたということもあるのだ。

とにかくこの魔界という場所はただのガラクタ収容所である。神にとって。

「なるほどそうなんじやろうな。今通ってきただけでも面妖なものがいくつも見えたわ。これが全て神に捨てられたものとすると思える」

魔界が神や天界に対して歯向かうのは理の当然かもしれない。神に対する怨嗟が深いところまで根を張っているからだ。

「ところでアシユタロト、目的地は近いのかや？」

「ガブリエルはん、心配せんでもよろし。どんどん異能者の反応が近うなってきたで。あ、そこや！　そこにある……よう分からん壁の向こう側や！」

「壁の向こう側とは何じゃ？　ああ、確かに何やら壁のようなものがあるな」

アシユタロトの指示通り一行が進んで行くと、いきなり壁が立ち塞がってきた！

それは半透明で、先の様子は見えない。

多くの板が幾何学的に組み合わされて構成され、全体を大きく見渡すと、ゆるやかにカーブを描いているようだ。つまり、まるでドームのように壁の向こうを覆い隠している。

これを迂回はできない。アシユタロトが壁の向こうに目的があると言う以上、否が応でもドアを探すか壁を壊すか、どちらかをする必要がある。

「何じゃこんなもの。異能発現、フォールンサンダー雷破撃壊!!」

ガブリエルは手つ取り早く壁を壊す方を選び、自信満々で攻撃を仕掛ける。

フォールンサンダー雷破撃壊の威力は強力無比だ。まずたいがいのは砕け散るだろう。

ところが、そうはならなかった！

壁は崩れるどころか傷一つ付いていないではないか。

「な!?　こんなことが……　いったい何なのじゃこの壁は！」

「ガブリエル、次はボクがやってみるよ。曲がつて砕けろ！ 異能発現、歪曲夢幻！」

…… あは、ダメみたい」

「ウリエルの歪曲夢幻でもダメとはいったい…… どうしたらいいもんかのう」

熾天使が二人揃って壁をなんともできないとは、驚くべき事態だ。強力な異能でも歯が立たない頑丈な壁とはどういうことか。なぜそんなものがある。

だが驚いてばかりもいられず、このままでは立ち往生してしまう。

ルシファアの姉様は無敵の超動迅速ハイパームーブを持つていても、それは直接的な打撃力ではなく、壁をどうこうできない。

「姉様、せっかく異能者候補の近くまで来たのに、阻まれるとはの…… 一度戻り、改めてラファエルを連れてきて絶対切断アルティメットソードを使うしかないやもしれぬ」

「あら、諦めるのは早過ぎるわく ここにもう一人いるじゃないの」

「あ、姐さん、せっかくやけどワイでは力になりまへん。済まんこつて」

「アシユタロトちゃん、全然違うから気にしないで」

「…… そうはつきり言われてまうと、ワイかて泣きたくなりまんねん……」

姉様は攻撃力のないアシユタロトのことを言っていない。かといってここには魔界随一の攻撃力を誇るマルコキアスなどいない。

しかし姉様はまだ可能性を信じているらしい。

ということとは最後の一人は、自ずと決まってくるのではないか！

「ふえっ！」

間拔けな声はその場に流れる。

皆の視線がゆつくりと自分に集まってきたのが分かると、ラグエルが後ずさる。

「えくとみんな、いや、でも、ちよつと」

「やってみるのよー、ラグエルちゃん頑張つて、ラグラグ」

「そう言われても……、皆さん、期待しないで下さい！ 一応ですからね！ 一応、異能

発現、ウエボンサブライ 武具現召！ うえッ！ ぶへッ！」

姉様に促され、ラグエルが自分の異能を発現させるや否や、真つ白になった！

正確には真つ白い粉がドサドサとラグエルの頭上から降り注ぎ、一瞬で粉だらけになったのだ。

「何なのじゃこれは…… とても武器には見えん。相変わらずよくわからんの」

ラグエルから一歩引いて粉を避けたガブリエルが言う。まったくラグエルの異能は分かりにくい。解決する最適解を差し出してくる異能とはいえ別に説明があるわけではないからだ。

しかしこの場合に限っては、少し考えれば予測がつく。

相手が壁なのだからたぶんそこに粉をぶつけるのではないか？

ガブリエルにせかされ、ラグエルが壁に粉を塗りたくる。

結果は直ぐに現れた。

「冷たっ！ うわあ、壁が溶ける……」

それをやったラグエル自身が驚く。

何と、粉をつけたところから壁がはかなく溶けていくのだ。

そして溶けた液体が物凄く冷たい。この壁自体に触っても冷え切っていたというわけではないのに不思議なことだ。

「なるほど分かったよ。この壁は氷だったんだ。めちやくちやに硬く、しかも溶けない工夫がされてた。でもラグエルが融雪剤を塗ったから溶けてきたんだね」

ウリエルがそう看破した。たしかにこの白い粉は融雪剤だったらしい。

「なるほどのう！ いやあラグエルの異能が役に立つ日が来るなど夢にも思わなんだわ！ ……ラグエル何を凹んでおるのじゃ？ 褒めておるのじゃぞ？」

「……………」

「ラグエルはん、なんかお気持ち分かりまっせ」

「アシユタロト……」

ラグエルは得意になって然るべき結果を得た。しかしそれよりも期待されていなかったことをヒシヒシと感じてしまったのだ。そしてなぜだかラグエルとアシユタロトの間にシンパシーが通じてしまう。

「ま、まあみんな、早く壁の向こうに行きましょ〜」

とにかく一行は壁を抜け、今まで誰も行ったことのないところへ足を踏み入れる。

するとその場所は……一面の銀世界だった！

どこまでも雪原が続いているではないか。

粉雪が風に巻かれて踊り、また地面に戻り、それを繰り返す。気温もまるで北国の厳冬のようなのだ。

しかしこの一行の面々にとってそんな寒さは何ほどのものでもない。

驚きは別のところにある。

いきなり槍を突き付けてきた者がいたからだ！

「オラの世界に入ってくるとは、お前ら何者だべ！」

それは輝くようなブロンドを無造作に束ね、身長はラファエルのように高く、軽装騎士のように皮の防具を着けた少女だった。

背に羽が一对ついていて人間ではないことが分かる。だがその羽はほんの申し訳程度の大きさでしかなく、つまり天使でもない。

むろん顔につけられた表情は硬い。なぜこの硬い壁を壊して入って来られたのか訝しがっているのだろう。

「異能使いはあの者でっせ！」

「そのようねー アシユタロトちゃん。あの槍を見れば分かるわー」

「姐さん、槍が？ どういうことでっしやる」

「あの槍はね、グングニルの槍と呼ばれてるわー こっちで言うロングヌスの槍ねー」

第二十七話 決戦の地へ

その槍は特別なのか？

確かに見かけは立派だ。素朴でも力強さを感じさせられる。その少女の身長ほどもあり、穂先は澄んだ空色で鋭い。赤い布がネックの部分に付けられ、わずかな風のためにはひらりと浮かんでいる。

しかしそういう問題ではない。皆はルシファアの言葉によりあつげにとられる。ルシファアの姉様は何か槍にまつわる物事を知っているようなのだ。さすがは天使たちの中で最も古く、知識も多いだけのことはある。

グングニルの槍とは？

そして姉様の言うこつちの世界とはどういう意味なのか。

そこに捉われてしまったゆえに、誰しも少女への返事が遅くなってしまう。そしてわずかなタイミングで少女の我慢の限界を超えてしまったのだ。

「何者だと言うのが聞こえねのすか！ 敵か、敵なんだべ！ 天威還降、ライトニングスピア 槍術閃突！」
槍を真つすぐ向けてきたかと思うと何かの攻撃を仕掛けてきた！

おそらく異能によるものだ。槍の穂先が煌めき、明らかに危険な力が発現しようとしている。

それをいち早く察知した姉様が反応する。

「あ、待って、ハイパームーブ超動迅速!!」

さすがに姉様だ！ 瞬時に移動し、その姿が掻き消える。

再び姿を現したのはその少女の懐に飛び込み、槍の先を上捻じ曲げている姿だった。

そのおかげで槍の穂先から生じた光の嵐は上に向かって空しく伸びた。

一行の誰にも当たっていない。だがもしも命中すれば一撃で消滅させられたかもしれない。圧倒的な防御力を誇る歪曲コンバージョン夢幻を持つウリエルでさえ無事に済んだらうか。

それほどの威力だと一目で分かる禍々しさだった。

しかし姉様によって防がれた。少女は一瞬驚いたが、敵愾心が更に燃え上がっている。

これに対しガブリエルが慌てて火消しにかかる。

「済まぬな。ここから名乗るべきだったのう。失礼を認める。じゃが決して敵ではないぞ。妾は熾天使ガブリエル、異能使いを探してここまで来たのじゃ」

「オラは大神オーデイン様の第一のしもべにして空騎兵、ワルキューレ！ ……ん？
今熾天使と言ったか？ まさか異教の者か！」

「オーデインとな!!? ならば邪教の輩ではないか!」

これは逆効果だ。話が余計ややこしくなってしまった。

誤解が解けるまでしばしの時間が必要になってしまう。

だがそもそも敵対しに来たわけではない以上、話し合いでどうにかなる。姉様が古の知識を引っ張り出し、推論し、丁寧に説明したおかげで。

それはとても長い筋道の通っている話なのだ。

魔界には神が良しとしなかったガラクタが詰め込まれている。

そこには世界ごと押し込められた場合があるのだ！

この白銀の世界もその一つなのだろう。

しかし神が完全に破壊して無に帰さなかったことからすると、おそらく古い時代、神がプロトタイプとして作ったものかもしれない。単なる試作品であり、別に神に逆らった経緯があるわけではないので壊されなかったのだ。

つまり根本的なところは同じなのである。

天界も人間界も、この白銀世界も神が作ったという点においては。

そして崇めている神も同じものである。

白銀世界でオーディンと呼ばれているものも、天界にとつての神と同じであり、ただ捉えかたが違うに過ぎない。もしも魔界をくまなく探索すれば神をもつと別の名前で呼んでいる世界が見つかるに違いない。

すると、このワルキューレなる者はまさに天使と同じ立場ではないか。神によつて作られたしもべという意味では。

そしてこの世界は長いこと神に打ち捨てられても、信仰は失われず続いていたようだ。ワルキューレはそれを受け継いでいた。神の声も聞こえなくなって久しく、意義のある命令も仕事もないのに。

既に神はこの白銀世界を捨てた、それを嫌でも理解しつつ、頑なにそのしもべの立場を守っていた。確かにそうしなければ存在意義もなくなってしまう。

「忠義は見事じゃが、時と場合によりけりじゃな。そこは怒らんで聞いてもらいたい。ところでワルキューレとやら、ここには天使、いや空騎兵は何人おるのじゃ？」

「オラの他には誰もいねえ」

「何?!」で、ではたった一人で過ごしてきたのかや!」

「皆、長いこと命令が無いのに耐えきれず、出て行った者もいれば、自死した者もいたべ」
「……可哀想なことよの」

何とこの白銀世界にはワルキューレ一人しかいなかった！
どれほど孤独な時間を過ごしてきたのか。

「同情は要らね。オラにはこのグングニルの槍があるべ。オーディン様の武威の欠片を鍛えて作られた槍を預かっているからには、守り通さねばなんね。壁を越えてきたのはおめえらが初めてじゃねえ」

「そんなことがあったのか？　で、そういう輩はどうしたのじゃ？」

「バアルの使徒とかケツアルコアトルの将とかいうのが来たこともある。そこそこ強かったが、全部退治したべ」

どうやらワルキューレは槍の保持を心の支えにして生きてきたらしい。しかも他の勢力と戦ったことがあり、そして勝ってきたのだ。

たった一人でそれを可能にしたのは、おそらく槍の力を引き出せる異能のおかげなのだろう。

言い換えれば槍の力は尋常なものではない。神の力の一部が宿されているのは本当である。

この頑固そうなワルキューレを説得するのは骨が折れた。

槍を決して奪わないこと、こつちに味方するのは外の世界を見てから決めてよいことを条件にして引つ張り出した。

逆に言えば、それでも引つ張り出せたことが驚きである。

それにはワルキューレ自身も白銀世界に独りであることに耐えられない思いがあったからだ。おまけに神に対する不信感が本人は否定しながらも、やはり重なっているだろう。

一行は魔界の深部からワルキューレを連れて戻った。

既にもそこには人間界から戻ったラファエル、ミカエル、ソータ君、新たな異能者の少女が待っていた。

またしても人数が増えたことによりソータ君は怯んでいたようだが、逆にサキと呼ばれる少女は堂々としたものだ。元の性格かもしれないがソータ君と共にいるという安心感がそうさせている。

ともあれ素早く情報交換を済ます。

最大の問題は神が人間界を滅ぼすつもりでいる、この一点だ！

もはや猶予はない。

「異能者が十二人揃ったわく、今こそ攻め入るわよく」

「じゃが姉様、魔界での戦役が終わったばかり、あまり戦力を揃えられないのではないかな？」

ガブリエルの慎重な意見の方が真つ当だ。

今度の侵攻作戦こそあらゆる意味での決戦になる。不退転の決意を持ち、最大戦力で挑むべきなのだ。

だがわたしは姉様の意見にこそ賛成する。ここは時を置かず戦いに赴いた方がいい。

「時が経てば人間界が心配、それもある。だが何よりも天界の方が先に戦力を回復してしまう。時間が経てば、この前のように下級天使が七千、いやそれ以上になってしまい、それこそどうにもならなくなる。ここは一気に行くべきだ」

「こんな脳筋のラファエルの言うことだが、その通りだ。今すぐ攻めた方がいい。馬鹿の熾天使でもたまには正しいことも言う」

「喧嘩を売ってるのか？ マルコキアス、そうなんだな」

「ほう、貴様の意見が正しいと褒めたつもりなんだが。聞く者の耳が悪いとそう聞こえないとみえる」

相変わらずだこいつは！

この物言いは長年に渡る熾天使との確執が原因ではなく、単に性格がひねくれているのだろう。

それならそれでわたしにはマルコキアスに対する反撃法があるぞ。

「…… サキちゃんとやら。いいことを教えてやろう。このマツチヨでオツサンのマルコキアスは何と！ あのV t u b e r ヘルヘルちゃんの中で女子中学生を担当し、」

「うわ、貴様今それ言うか！ 黙れ！」

「黙って下さいだろ？ マルコキアス。好きなお菓子わあ、虹色マカロン！」

「ぐ、ぐぬぬ……」

とりあえずマルコキアスをやり込める。ちなみにサキちゃんはエンジェルズもヘルちゃんも知らず、目を白黒させるばかりだ。

ともあれ議論は決まった。

直ちに天界を攻める！

今こそ全てに決着をつけるため、最後の戦いに挑むのだ。

第二十八話 謎の要塞

今こそ天界を攻め、神を倒す戦いに挑む。

さあ、そこからはどういう方法を取るか。戦術の話だ。

「攻めるのなら少人数、この十二人でもいいくらいよ〜」

「要するに姉様、ここにいる異能持ちだけで!?! ……なるほど、少数による一点突破というわけか」

ルシファアの姉様は大戦争を仕掛けても勝算は薄いと見ている。戦力の総数では我ら熾天使と魔界の軍勢を併せても、明らかに天界の軍団に見劣りする。

それよりも少人数でスピード勝負に出るのだ。なるほど、確かにその方が現実味がある。

わたしもそれには賛成だ。

「姉様の案がいいだろう。まあ陽動と後詰めは必要としても、基本は一気呵成の電撃戦で行く」

「ラファエル、また大博打になりそうじゃのう」

「いいじゃないかガブリエル。というより他に選択肢はないからな」

そして我らは天界へ向けて飛び立つ。

最終目標は天界の中心にある神の神殿だ。

この異能持ち十二人は一気に天界へ侵入し、迎撃態勢を整えられる前に進めるだけ進む。

その後は時間差を付けて魔界の軍勢に陽動を頼む手筈だ。その後は状況に応じて素早く判断しながら戦うしかない。

「な、なんやて！ 天界があんなふうになってるなんて……」「あれは何!? ボクらの天界が……」

しかし作戦はのっけから修正を迫られてしまう！

途中の哨戒を素早く潰し、天界の入り口が見えるところまで来たのはいい。

だが天界が……

本当なら可愛い花たちが咲き乱れ、蝶が舞う、のどかな草原が見えるはずだった。それが我ら熾天使の慣れ親しんだ牧歌的な天界の姿である。

それなのに今ミカエルやウリエルが驚いたのも当たり前、目に入ったのは…… あまりに立派な城砦だったのだ！

天界の入り口を完全に塞ぐ形で存在し、高くそびえている。おそらく奥も相当深い大城砦だ。

それを突破しなければ天界へ乗り込むこともできない。

「ミカエル、ウリエル、こんなものが造られているとは読まれていたようだな。我らが天界へ攻め込むことを予想し、手早く城砦を構築された。つまり、神は最初から我らを引き寄せて戦う算段だったのだ」

「どうするのラファエル……」

「このまま行くしかなからう。時間を置いても仕方がない」

「そうだよ、ラファエル。だけど外壁を破るのにガブリエルの雷破撃壊フォールンサンダーを使っても、ラファエルの絶対切断アルタイムツートドを使っても、気付かれないわけがないから。奇襲にはできなくなるよっ。」

「むっ……」

確かにウリエルの言う通り、あの城砦に入れないわけではないが、激しく音を立てればまるで警報を出しているようなものだ。

それだけでも城砦の意味があるのだろうか。

「待て待て。ラファエルも皆も、熾天使だけで考え過ぎなのじゃ。ここには十二人おる。解決策も自ずと見えてこよう」

「なるほどそうだった。ガブリエル」

「妾としてはベルゼバブに頼むのが良いと思うぞ。お願いできようか」

その魔界のベルゼバブはようやくハムエルから受けた矢傷を癒し、この遠征に参加していた。

相変わらずの幼女姿で口をへの字にしている。

それがガブリエルの言葉を聞き、黙つて首をコクコク動かしている。人見知りというのは本当のようだ。

トン、と軽く一度跳ね、そこから身をかがめ、滑るように城砦へ近づく。

外壁の下へ潜り込み、城砦から見たら死角になる場所まで来ると、恐るべき異能を展開させる。

「異能発動、バッドソリユーション腐溶解熟」

この異能なら音もなく城砦を崩せるのだ。

あまり崩し過ぎててもいけないので、ちょうど一行が侵入できるくらいにとどめてもらう。

城砦内に入るが、そこは細かく区切られていて進みにくいものだった。

見通しのいい廊下というものは存在せず、いちいち扉を突破しなければ真つすぐ行けない仕組みになっている。

これは思ったよりも時間がかかりそうだ。

最初は姉様の超動迅速ハイバースピードによって歩哨の下級天使を倒しつつ侵入していったのだが、悟られないうちに抜け切るといことは有り得ない。

とすれば速度優先で突き進んだ方が良いのだろうかと思いだめた時……

やはり天界側は気付き、手を打って来た。

とはいえ半端な策では、こっちにこれだけの強者が揃っている以上、そうそう倒されはしない。

天界側もそれが分かっているらしく狡猾なやり方をしてきた。

急に深い霧が立ち込め、視界を遮断してきたのだ。これはもちろんタワーエルの迷霧隠境アライズミストによるものだろう。

同時に下級天使たちの大攻勢が始まった！

四方八方から数を頼んで押し寄せる。向こうは城砦の構造を知っているのだから断然有利、隠し扉などを使って思わぬ方向から怒濤のごとく仕掛けてくる。

「フオーレンサンダー」
「クラッシュユパワー」
「雷破撃壊！」「打力碎塵！」

だからといって斃されるようなことはない。やはり個々の力が強いからだ。

わたしもソータ君やラグエルなどを守りつつ、剣を振るって戦う。残念ながら視界が悪いためにわたしの絶対切断アルティメットソードを使うのは難しい。だが純粋な剣の勝負でも下級天使に後れを取ることは有り得ない。

だが悪手を打ったのかもしれない。

最初からソータ君の聖天調和スカイハーモニーを駆使して霧をなんとかすべきだったのだ。そうしなかったのは、こちらの異能まで同時に封じられるデメリットを考えたからだだった。

結果……

分断されてしまった。

乱戦のためこちらは数人ごとに切り離されてしまう。いや、おそらく天界側は最初からそれを狙っていたのだろう。まったく頭のいいやり方をしてくる。

「くそつ、全体が見えんな。ここにいるのはわたしとウリエル、ソータ君、サキちゃんという少女、そしてワルキューレ、この五人か」

「どうしようラファエル」

「今、他を探して合流を図るのは良くない。それよりも城砦を一気に抜けた方がいいだ

ろう。皆が皆、探し回って動いたら却って合流できなくなる」

わたしはそう判断した。離されてしまった皆も同じ判断をするだろう。戦いにくい城砦を突破し、天界の中へ躍り込んでから改めて合流すべきだ。

そこまでの突破は、わたしの剣とウリエルの異能によってなんとかなる。

だがちよつと気になるのがウリエルの怯えたような様子だ。

もちろんウリエルが臆病ということは有り得ないのだが…… たぶんトラウマなのだろうな。以前の戦いでウリエルは下級天使に四方八方を囲まれてしまい、飽和攻撃を受け、絶対の信頼を置いていた歪曲^{コンバージョン}夢幻の防御を破られた。その結果負傷して動けなくなったという苦い経緯がある。

今の様子もそれと似ている。視界の悪い中、下級天使に四方から攻められているからだ。

「ウリエル、気合で行くぞ。だがわたしが先頭を行くから、ウリエルは皆をカバーするだけがいい」

「う、うん、ラファエル」

ウリエルもトラウマを自覚しつつ、それを振り払って頑張ろうとしている。

そんなところへ別の者から声が掛けられる。サキちゃんという少女のものだ。

「ふうん、この霧がたぶん問題なわけね」

「ん？ 少女、確かにそうなんだが。いや、やけに落ち着いているな」

本当に堂々としている。普通、これほど日常生活からほど遠い状況に放り込まれたら冷静にしていられるはずはないのに。

不思議なことだと思うしかないが、これもまたソータ君と一緒にいるためなんだろうか。

そのソータ君の方はというと、まるで逆、青褪めて膝が震えてるようなんだが大丈夫か。

「霧は誰かが作っている？ そこを止めたらいいと思うわ」

「それはその通りだ。説明しなかったがこの霧は自然のものではなく、タウエルという天使の異能のためなのだ。しかし霧のせいはどこにいるかは分からん」

「だったら見えるわよ。異能発現、フローサイトアイ明流覚視！」

ああそうか、サキちゃんという少女にはこの異能があつたんだな。

霧の奥深くの流れが読める。

「そつちにいるわ！ この指で指すところから霧が出てる！」

「よし、よくやった少女！ では先にそこへ向かって霧をなんとかしよう。はぐれた皆も戦いやすくなるはずだ」

わたしは剣を振るいつつ、少女の指し示す方へ向かって走り出す。

第二十九話 へっぽこコンビ

だがその時、わたしに声がかけられる。意外なことにワルクユーレからだった。

「走る必要はないべ。オラの槍なら直ぐにそこを潰せる。唸れ剛槍グングニル！ 天威還降、ライトニングスピア 槍術閃突！」

わたしは実のところ話に聞いていただけで、ワルクユーレが槍を使うのを見るのは初めてになる。

これは凄い威力だ！

ワルクユーレの持つ槍からまるでガブリエルの雷破撃壊フオーレンサンダーを束にしたような光が放たれ、そのまま霧を貫く。

「ぎゃっー！」

直ぐにそんな声がする。

間もなく霧が薄くなつて視界が回復してきた。

そして見えたのは…… 腰を抜かしてへたり込むタウエルの姿だった。

おそらく少女の指さす方向という曖昧なものでは若干の誤差があり、槍の力はタウエルに直撃しなかったらしい。

そのことにちよつとばかり安心している自分がいる。タウエルは目を回して異能を維持するどころではなくなっているのだから、それ以上攻撃する必要はない。

「済まん。横を通るぞタウエル」

槍の威力で開けられた道筋がある。その先へわずかに天界の中が見えている。

少なくともこの五人は城砦を抜け、天界内部へ踏み込める。

その少し前のことだ。

天界側の作戦である霧に紛れた全方位攻撃により、分断させられたもう一組があった。

その中の一人が呟く。

「アホなことになつてもうた。悪いことが二つもあるわ。一つはラファエルや姉様とはぐれたことや。もう一つはこいつと一緒にしたことやな」

「……何が言いたいミカエル。その言葉そっくり返してやるぞ」

ミカエルが嘆息すると、マルコキアスが答えてきた。

「ここにはその二人しかいない！」

何の偶然かそうなってしまったのだ。

「マルコキアス、足を引つ張らん程度に頑張りや」

「喧嘩を売りたいならはつきり言え！ 貴様こそ足手まといになつたら置いていつてくれる」

そんな毒舌を言いながらも、二人は協力して下級天使たちの攻撃を凌ぎ、とにかく前進を始めている。

ただし天界側は何も考えず分断だけ行つたのではない。

結局のところ各個撃破を掛けるための分断工作だ。次に来るものこそが本命なのである。

いきなり霧を抜け、矢が飛んできた！

「ストームフレア暴炎熱威！ ……ふう、危なかつたわ。これはもちろんハムエルの矢やな。どこや

！ どこにおるんやハムエル！」

「……出ていけるか馬鹿め。ミカエル、この神弓射矢をいつまでも躲せると思うなよ！」

「前は出てきたやんハムエル。足りん脳みそで少しは学習したつちゆうわけか。少しは」

「そこ強調するか！ やっぱり馬鹿にしてるだろ！」

それでも言葉を返してきたのはハムエルも律儀とか間抜けだ。それに対しミカエルもまた軽口を投げたはいいものの、実はかなり困った事態である。

とりわけ異能の相性が悪いハムエルが相手だとは。

以前、魔界での戦いにおいてハムエルはうかつにも突出してしまい、敗退の原因を作ってしまった。それを反省したのか、今度は霧の深くに隠れたまま矢を放ってくる。それで一向に構わないのだ。ハムエルの射る矢は異能神弓射矢、霧などもとせず正確に狙えるからである。

むろんミカエルは矢を暴炎熱威ストームフレイアによって防ぐことはできるが、いつまでもそれが可能かどうかは分からない。一瞬の油断から防御をかくぐられるかもしれない。そうならお終いだ。

しかも攻撃しようにもミカエルの暴炎熱威ストームフレイアはあくまで近接戦闘にしか使えない。

ハムエルが距離を保って矢を使う限り、どうにも分が悪い戦いを強いられてしまう。
クラッシュユバワー
「打力碎塵！」

マルコキアスもまたハムエルの矢を叩き墜とす。

だが、それだけだ。

マルコキアスの強力無比な異能もまた近接戦闘でしか活かされない。以前遠距離型

の異能と組み合わせられた時にはそれなりの意味もあったが、今はそうではない。どちらも近距離型であるミカエルと組んでも仕方ないのだ。結果、マルコキアスも力は余るほどありながらハムエル相手に仕掛けることもできない。

そこへどんどんと矢が射られる。

ハムエルは自分だけではなく下級天使たちにも矢を雨のように射かけさせ、動きを封じ、いよいよ追い詰めていく。

二人は矢を防ぐだけで手一杯だ。

「くう、これでは何もできません。ミカエル、何か手はないか」

「マルコキアスこそ何か考えてや。このままではあかん」

「……ではミカエル、恨むなよ」

「え？ マルコキアス、何やて？」

マルコキアスが何かを決断すると、ミカエルの胴体をガツと掴み、そのまま持ち上げる。

そしてぐるぐると回し始めたではないか！

「ちよと待ちい！ うわわわわわわーッ」

「ミカエル、異能を出せ、早く」

「何ちゆうことさらすねん!! 暴炎熱威、わわわわーッ!」
ストームフレア

ミカエルの放つ炎熱が同心円状に広くバラまかれる。それはいつもよりもずっと広い半径だ。そして同時に円の中心にいるマルコキアスに炎熱は届かない。ぐるぐる回すにはそんな意味があった。

近くに寄り過ぎていた下級天使たちが炎熱で焦がされ、いったん矢の雨が止む。

「くそ、なんなんだあれは!」

そんな声ができる方向、それでも飛んでくる矢の方向、それこそが指揮官ハムエルのいる場所だ!

「行けミカエルーッ!」

「わあアアア!」

最後の最後、マルコキアスはミカエルを力任せにぶん投げた!

マルコキアスの剛力とミカエルの軽い体重のため一直線に飛んでいく。

遠距離攻撃をする異能が無いなら、遠距離まで行ってしまえばいいのだ。異能を発現させたミカエルをハムエルにぶつけ、包囲を突破する。

それは上手くいった。

ハムエルは暴炎熱威をすんでのところでは避けたが、驚いて大きく退いた。その隙を突

き、マルコキアスが一気に突破する。

「おいミカエル、いつまでも寝ているな。置いていくぞ」

「うう、無茶苦茶や…… 絶対殺すで…… マルコキアス」

投げられたミカエルは床に伸びている。

正確には床が開き、上半身が埋もれている。しかも目が回って直ぐには起きられない。

ミカエルは恨みがましいことを言うがむろん本心ではなく、それよりピンチを脱したことでマルコキアスに礼を言うべきなのだが、こうされて素直に言えるものか。

よろよろとミカエルは立ち、とにかく二人は進み、この城砦を抜けた。その先にある天界の平原に行く。

「あ、ラファエルがおったで！ みんなもや。おーい！」

皆を見つけた。やっと合流できる。もちろん喜んでミカエルとマルコキアスはそのこへ駆け寄ろうとする。ラファエル以外にも、ガブリエル、ウリエル……最初に城砦に入った全員が欠けることなく揃っていたのだ。

しかしミカエルは気付いた。

皆はただならぬ雰囲気の中にいる。

第三十話
戻れ、友よ

皆は立ちすくみ、やっと合流できて喜ぶミカエルとマルコキアスに声も掛けない。

その原因はただ一つ、仲間のうち一人だけ倒れている者がいるからだ。

それはルシファアの姉様だった！

倒れ伏し、動けなくなっている。

そうさせたのはすぐ横に立つ者、アサエルの仕業だ。

皆はその有り得べからざる光景を見て驚愕している。

「な、何やて！ アサエルが……やったのか？ でも、あの姉様がなんで…… アサエルがいくら強うても剣士や。姉様にかなうはずあるか」

今、声を出しているのはミカエル一人、だからその声は皆に聞こえている。

誰しも思うことは全く同じだ。

こんなことは有り得ない。

わたしも見たものが信じられない。

事は天界内部の平原において、わたしがガブリエル、ラグエル、アシユタロト、ベルゼバブ、姉様を見つけた時に遡る。

その五人は先に城砦を抜けて待っていたらしい。わたしやウリエルなどの五人が合流すると十人が揃う。後はミカエルとマルコキアスが合流するのを待てば、また十二人の全員になる。

城砦の存在というアクセシブリティを乗り越え、天界内部へ駒を進められたと安堵してしまつた。

そこへふらりとアサエルが来たのだ！

おそらくアサエルはまた天界側の総指揮を任されているはずで、一人で来たのはちよつと解せない。

不思議に思いつつもアサエルが敵であるのは確かであり、邪魔をしてくるのなら討ち取るまでだ。わたしも絶対切断を出す用意をして身構える。

ところがアサエルは少しも気負つた様子がなく、ゆつたりと構えているではないか。そして顔にはぞつとするほど禍々しい笑みが浮かんでいた。

これはいったい……

そして一瞬のうちにアサエルの姿が掻き消えた！

「ハイパームーヴ
超動迅速！」

その声は姉様だ！ この奇妙な事態に対して最初に反応している。

いち早く異能を使つてアサエルの攻撃を防いだらしい。

しかしそこから二人の姿はわたしも誰も目で追うことができなかつた！ 劍撃の音だけが遅れて届き、二人が戦っているだろうことを伝えてくる。それはあちらこちらから、5、6回も聞こえただろうか。

その音が止んだ時、再び二人を見ることができた。

倒れた姉様と、やはりニタリと笑うアサエルの姿として。

姉様は負け、剣で重傷を負わされている！

いきなりこちら側の最高戦力である姉様がやられてしまった。

しかし驚くところはそこではない！

姉様の^{ハイパームーヴ}超動迅速は無敵、その超高速の世界に誰もついていけないはずがない。

だが今、結果がからずれば、アサエルは姉様を打ち負かすほどの速度を出して戦っていたことになる。

アサエルがどうして？

アサエルもまた超動迅速ハイバースピードの異能を使ったのか？
わたしはその事実をうまく受け止められない。

だからわたしは遅れて到着したミカエルとマルコキアスを認めても、声を掛けるゆとりがなかったのだ。

ところが、この場にもう一人が飛び込んできた。

ミカエルたちを追いかけてきたハムエルだ。

そのハムエルもまた、アサエルと倒れている姉様の姿を見て愕然とする。

「やっぱりそうなのか、アサエル……」

ただし、ハムエルはそこからまさかの行動に出る！

「頼む、戻ってこいアサエルーッ 異能発現、神弓射矢!!」
ミラクルアロー

ハムエルが声を上げると、その手に白銀の矢が生じる。光の粒子をわずかに纏って美しい。これこそハムエルの異能、必中の矢だ。

それを弓につがえ、放つ！

それを何と我らの方ではなく、アサエルの方へ向かって！

もはや驚き過ぎて何がなにやら分からない。

だがしかし、この矢はアサエルを傷つけることはできなかった。矢はアサエルをスル

りと通過し、あっさり後ろに抜けていったではないか。

その瞬間、わたしはアサエルがかすかに呟いた言葉を聞いてしまう。

「歪曲夢幻……」

馬鹿な！

それは誰でもなくウリエルの使う異能だろうが！

なぜアサエルが呟く！　そして確かに効果は歪曲夢幻コンバージョンのものであり、空間を曲げて矢を無効化して見せた。またしてもアサエルがそんな奇怪なことを……

「おいハムエル!!　どういうことだ！　なぜお前は味方のアサエルを狙った！　そしてさつきの言葉は何なんだ！」

わたしは事情を知っているだろうハムエルに向かい、慌てて問いただしにかかる。

何か禍々しい異変が起こっている気がする。

今すぐ対処しなければ、我らがあっさり全滅すると思えるくらいに。

「ラファエル……　あそこにいるのはアサエルじゃないんだ……　いや、アサエルではあるんだが、依り代になって神に憑かれた」

「何だと！」

「あれはもうアサエルの形をしているが、アサエルじゃなく、神だ。そしてたぶん全ての

異能を使える」

ハムエルは呆然とした表情で、恐るべきことを語った。

時は少し遡り、神殿においてアサエルとハムエルが神の言葉を賜っている時のことだ。

神は初めに人間界にいる異能使いの少女を確保するように命じてきた。そしてそれが叶わなかった時、人間界ごと滅ぼすという言葉を加えたのだ。

これはアサエルにもハムエルにも衝撃的なことだった。

なぜ人間界にいる何十億もの民が消されなければならないのか！

天使としてずっと見守り、時には導き、時には手を貸してここまで発展させてきたのだ。人間界に愛着がないはずはない。

しかしこれは神の言葉、二人の内心は納得できず嵐のようでも、従う他はない。

とりあえず、少女の確保が先だ。初めにアサエルがその任に就こうとした。そこを押しとどめてハムエルが行こうとする。

「では必ずやその少女を天界へ連れて参ります、神よ」

「いやそれはダメだっ！ 神よ、アサエルは肩を負傷しており、得意の剣が使えない有

様。おそらく任務は難しいでしょう。このハムエルが承ります」

それが良し。ハムエルが人間界へ行き、アサエルは残れ。そしてアサエルよ、改めて聞くが忠誠の心はいかほどか

「それは？ 神よ、このアサエルの忠誠はよくご存じのほうです」

良し。では特別な榮譽を授けよう

その後のことをハムエルは知らない。

しかし、少女を拉致できずに天界へ戻ってきた時、友であるアサエルが既にいないことに気付いた。

正確にはアサエルの姿は残っているが別の者である。怜悯な雰囲気も、近寄らせない姿勢も、いつもとはまるで違う。

ハムエルの知るアサエルはぶつきらぼうでも気さくであり、根底には深い優しさがあ

る。それらの異変と神の言葉と考え合わせれば容易に答えは導き出せる。

アサエルは、神に体に乗っ取られたのだ！

いかな神でもあまりに…… アサエルは忠誠心が強かったが、だからこそ乗っ取るの

に適していたのだろう。

アサエルが哀れではないか。

思いもしない形で無二の友を失い、ハムエルは戸惑うばかりだ。

そして最後の最後、ハムエルは考えた。

アサエルを助けたい。元のアサエルに戻したい。

もしかしてアサエルの体が更に負傷して役に立たないものになれば、神は用済みとして取りつくのを止め、アサエルの魂が復活するのではないか？

それで矢を射ったのだ。あっさり無駄になり、神の力を再確認するだけになったが。

「そういうことだったか…… くそ、アサエルの忠誠を利用するとは何という悪辣な！

しかしなぜそんな方法を取った」

「それは、たぶん神は神殿から出られないせいだわ。出られるなら最初から天使の軍勢は必要ないし…… それでも自分が直接手を下そうと思えば、誰かに取りつくしかないのよ」

わたしの疑問に答えてくれたのはルシファアの姉様、起きられないほどの重傷を負いながらも伝えてくる。

それが真実なのだろう。

「取りついただけでは、神は少しの力しか出せない……はず。ラファエル、みんな、頑張って……」

「姉様…… よし、皆気を取り直せ！ 一足早く神と戦うだけだ！」

姉様はそこで力尽き、昏倒している。

ならばわたしが皆を勇気付け、戦いに入らせなくてはならない。

しかし神の方が先手を取ってきた。

「絶対切断……」
アルティメットソード

そう眩くやいなや、神の取りついたアサエルが持つ剣から圧倒的威力の剣撃が飛んできた！

「くうっ、絶対切断！」
アルティメットソード

わたしも直ちに自分の絶対切断で迎え撃つ！ 自分の異能を自分で対処するなども

ちろん初めてであり、想像の範囲外だ。

しかし、二つの威力がぶつかり合った瞬間、明らかに押し負けてしまう。

アサエルに取りついた神は本来の万分の一の力しか出せないかもしれないが、それで

も余りに強く、同じ絶対切断なのに地力が違う。

押し返すどころか相殺もできず、わたしは逸らすだけに集中することでかろうじて凌ぎ切った。

ところが神は余裕の笑みで見送ると絶対切断を連撃で放ってきたのだ！ わたしにはできない芸当である。

しかも今度はわたし以外に向けて放たれてしまった。

それをガブリエルは雷破撃壊を全力で使って逸らし、ウリエルは歪曲夢幻でなんとか事なきを得る。

ただし、避けることができなかった者たちがいた。

マルコキアスが負傷し、崩れ落ちた。

アシユタロトもまた同様に倒れ伏していた。

第三十一話 問題はない!

わたしが見たのは神の放つ絶対切断を喰らってしまったマルコキアスとアシユタロトの姿だ。

「なぜだ、非力なアシユタロトならともかく、マルコキアスなら打力碎塵クラッシュユバワーで何とかなるはずでは……」

マルコキアスとわたしは過去幾度も対戦し、互いにその異能を知った仲である。

だが途中まで言つて気付いた。マルコキアスもアシユタロトも、自分の身を守つてな
どいない。

既に倒れている姉様を守つたのだ! 身を挺して神の攻撃から姉様を庇い、代わりに
自分がその威力を受けている。

「なるほどな…… マルコキアスの脳筋にしてはよくやった」

「ふん、馬鹿天使は素直に褒めることもできんのか。そんな貴様に後を託さざるを得ん
とはな…… だが頼む。俺はこれ以上戦えそうに、ない」「非力で悪うござんした! せ
やけど姐様を守るのはわてらヘルヘルちゃんの仕事でんがな。後のことは任せたで

……」

「分かった…… マルコキアス、アシユタロト、見事な最期だ。安らかに眠れ」
「馬鹿、くたばるものか！」「無茶苦茶言いなさんな！ 死んでへんわ！」

そんな会話を続けていられる暇はない。

やはり薄笑いを浮かべたまま、向こうはまた攻撃を仕掛けようとしている。

次に使ってくる異能は何か。フォールンサンダー 雷破撃壊か、ストームフレア 暴炎熱威か。

アサエルに憑いた神は全ての異能を高威力で使える。異能とは元々神の力の切れ端なのだろうから、たぶん造作もないことなんでしょう。

だが、この状況は決して絶望ではない。

圧倒的な神の力、しかしそれが何だというのか。

「ラファエル、問題は無いなあ」

「ああミカエル、問題は無いようだ」

そう、このピンチは切り抜けられる！

「ソータ君、また出番だ。しかも最大出力で頼む」

「ヒエッ!」

情けない声を出すのは絶対のお約束らしい。しかしソータ君は頑張って異能を発現させようとしてくれる。

今のピンチを乗り越えなければ自分もサキちゃんも危ないと理解しているんだろう。神にとってはこの二人も邪魔者であり、熾天使と同様に片づけにかかると思われる。

「やってやる! 異能発現、スカイハート聖天調和!!」

この異能が発現し、辺りを覆いつくすと、神の憑いたアサエルの表情が変化した。余裕たっぷりからぎゅつとしかめたように。

「どうしたんだアサエル、いや神。この異能殺しが意外だったか。全ての異能を使えるのは神として当たり前なのかもしれないが、それならソータ君の異能も使ってみたらどうだ。意味はないが」

そう、神がソータ君の異能を使っても仕方がない。こっちも神も異能を使えないという状況は変えようがないのだ。

この異能だけは先手必勝である。今の時点で我らの勝ちが決まっている。

「ここからは異能ではなく剣の勝負だ。気の毒とは思うがな」

さあここから反撃だ!

わたしはオリハルコンの剣を閃かせ、剣技の勝負に出る。
アサエルに取り付いた神が相手だ。

想像するまでもなく神は剣においても冠絶した力を持つているだろう。当たり前だ。ましてやただでさえ剣の達人であるアサエルの体を使っている。

今でなければ、わたしは剣の勝負を挑まなかったかもしれない。

都合がいいことにアサエルの体は負傷が癒えていないと知っている。魔界での戦いでざっくりと右肩を斬られたばかりであり、本当なら剣を持つ力もない。これではいか

に技があろうともわたしに勝てるはずがない。
打ち合つて間もなく均衡を破り、わたしはアサエルの剣を撥ね飛ばした。

「ちよつと待つべ。さつきから話を聞いていると異教の神がこいつに取り付いているんだべか。だったらこのグングニルの槍でイチコロにするべ」

「へ？ しかしワルキューレ、残念だが今は全員が異能を使えないぞ」

「異能？ オラの力は槍の威力を飛ばすのに使うだけで、槍そのものの力は関係ないべ」
「それにしても、アサエルを殺したいわけじゃないから困っている。憑かれているのを何とかしてやりたいんだ」

こんな時にワルキューレが口を挟んできた。彼女なりに今の状況を分析し、理解した

のだろう。別に頭は悪くないようだ。

「だからそれっ」

だが、ここで何と槍をぶん投げたではないか!

止めようもなくそれは飛び、アサエルをまともに貫いて抜けた!

あまりに自然に行われたため、誰も反応できない。

「アサエルーっ!」

ハムエルが最も早く叫びを上げる。友の魂ばかりでなく体もまた失われてしまったのか。

「……………ふう。ハムエル、慌てるな。まったくお前らしいが」

「え? アサ…………エル? おい、アサエルなのか!」

「ああ。どうやらそうらしい」

「元に戻ったのかアサエル! 良かった! しかし傷はどうした? 槍が貫いたはず

……………」

あれ? おかしいな。走り寄ってきたハムエルへアサエルが普通に答えているぞ。

事は大団円に終わりそうだ。

しかし不思議なことだが、アサエルはまともに槍を受けたというのに倒れる様子もな

い。

どこからも神聖力が漏れていることはなく、つまり負傷はないということだ。

「天界のアサエルだ。お前は魔界の者か？ 見たことがない者だな。とても感謝するが、しかしどうやったのだ。あの槍はいつたい？」

「とにかくオラがいて良かった。このグングニルの槍は突きたいものだけを突く。憑かれているなら、それだけを刺し殺すようにしただけの話だべ」

そんなことができるのか!? なるほど、あれが特別な槍だということには分かった。神の力的一端から作られたのなら、それを使えば神に干渉できるということか。

神の本体は天界の中心である神殿の、その最奥にいる。

そこに赴き、アサエルに取り付いたようなわずかなものではなく、今度は本体を倒さねばならない。

その神のおわす場、かつて最強の天使である姉様さえ何もできずに逃げ帰った。

今度は我らで挑むのだ。

「行くぞ。皆、覚悟はいいか」

「ファイナーレや。盛り上がるぞ」「ボクらの力を見せてやる!」「やつとここまで来たの

じゃな。後は全力を尽くそうぞ」

我ら熾天使四人は悲願達成のため気合を入れる。他はどうだろう。ラグエルは足がすくみつつもなけなしの勇気を出しているようだ。ベルゼバブは黙って首をコクコク動かしている。

「お、おー！ ほら、ソータ君も一緒に」「サキちゃん……無駄に前向きだけど……」

ついに神の神殿に入る時が来た。

むろん熾天使にとって神殿は慣れた場所、その造りも知り尽くしている。

大胆に奥へ奥へと進んで行き、やがて神のおわす場に入ったのだが……

そこには想像以上の神の「威」が満ち満ちていた！

神は我らが戦いに来るものと察知し、それ相応のもてなしをするつもりらしい。のっけから気分が悪くなるほど威圧している。

「凄い威圧感や……でも負けへん。ラファエル、やっと仇が討てるで、ザドキエルの。そしてうちのシャティエルの」

「ああ、そうだな。絶対に勝とう」

ここに来たというだけでは意味がないのだ。

神を倒し、今や累卵の危機にある人間界を救わねばならない。

そして神に相対した。

姉様は今、負傷のためここへ来られない。だが我らは事前に聞いていた通りであることを確認する。

まるで樹のような構造物が見えるではないか。はるか彼方に、霞んだようにして。

あれこそが神そのものだ。

むろんそこに急行しようとするのだが…… やつぱり近付けない！

これもまた姉様が言っていたことだ。

神は世の法則さえ曲げて、距離を自在に変え、下々の者を近寄らせることはない。

絶望的になってくるほど完全なる防衛だ。

「積極的に攻撃してこないようだが、いずれ必ずしてくる。今はおそらく余裕で防衛しているつもりなんだろう」

「どうするんじや、ラファエル。様子を見るか、とにかく仕掛けるか。ともあれここで手を誤るとお終いじや」

「確かにそうだ、ガブリエル。絶対切断!!」

わたしは試しに絶対切断を放つてみた。

白銀の刃が一直線に飛んだが、届くこともなく、小さく霞んで消えた。神の距離によ

る防御は単純だが鉄壁だ。

「やはりか…… よし、方策は決まった。向こうの手を封じるのが先だ。ソータ君、また頼む！」

「へ!? い、異能発現、スカイハイモ二 聖天調和！」

わたしはこの時、もの凄く幸運の中にいたに違いない。

ソータ君が異能を発現させたとほぼ同時、神が攻撃を仕掛けてきたのだ!

それは真に黒い、球体だった。

神の方から撃ち出され、見る間に大きくなる、というか元々大きなものが我々の方へ凄く速度で近付いてきたのだ。

それは禍々しく、触れたらただでは済まないものだと言いきる。瞬時にして無に帰されるか、あるいは別次元に封じ込まれるか分からないが、いずれにせよ終わりだったろう。

我々全員を? み込んでみても余りあるその球体は、しかし届くことはなかった。あわやというところで消滅させられる。

ソータ君の異能は世の理を曲げることが許さない。

「ほんま助かったで…… ギリギリやな」

「ああ、しかしチャンスだ。今なら近付けるはず！」

今度こそ距離を縮められる。本当にソータ君の異能のおかげだ。

やがて巨木にしか見えない神に近づく。

だがしかし、それでも触れることはできなかつた。今度は距離の防壁ではなく、何か物理的な反発力を持つ盾が出てきたことによつて。

第三十二話 最後の秘策

くそつ、あともう少しなのに、それ以上進めない！

その物体とは、平たく、あたかも大きな盾のようなものだ。

我らの前に立ちほだかり排斥の力で近寄ることを許さない。近付いて剣で切りつけようにもそれができないのだ。

いくら熾天使の六枚羽ヘキサを使い、力の限り突入しても、最後は跳ね返されてしまう。

そこへ突入せず、回り込んで神の方へ向かおうとしても無駄である。それに合わせて盾もまた正面に移動してくるのだから。音もなく、滑るように、しかも我々よりも速く。

不思議な盾だが、重要なことは何かの物理力によるものだろうから、ソータ君のスカイモニ聖天調和でも消せない。神もまた味な対応をしてくれる。

これもまた難攻不落の防御だ。

「ぬう、これは…… 神にはこんな防御まであったのかや。ラファエル、どうしたら良いかのう。一度ソータ君の異能を解いてもらい、手早くこっちの異能で盾を片付けるのはどうじゃ」

「ガブリエル、それも考えた。だがその手はたぶん一度だけだ。ソータ君の異能を解いた瞬間に神は攻撃に転じてくるだろう」

「そうはいっても手詰まりじゃ。時間が経つほど不利になる」

「それにガブリエル、異能を使つてもあの盾を壊せるのかは分からんぞ。余りにも危険な賭けになる」

だが、間もなくガブリエルの言う事が現実となつてしまう！

神がもう一つの手を打ってきたのだ！

防御の次は攻撃ということか。

周囲の空間にぼうつとした光が幾つも灯り、そこから下級天使たちがまるで産み落とされるように生じているではないか！ それらは形を成すや否や直ぐさま我らの方へ向かつてくる。

なるほど、異能を使えずとも軍勢を生み出すことならできる。そう来たのか……

こちらが異能を使えるなら撃退も難しくなかつたろうが、今は剣で戦うしかなく、はなはだ厄介だ。

剣でも簡単にやられてしまうことはないだろうが、たぶん神は下級天使をいくらでも生み出してくる。それなら消耗戦をさせられた上で全滅するのは必定だ。

くそつ、盾による守り、そして増える一方の下級天使、いったいどうする……
わたしは改めて一行の皆を見渡す。

「何か打開策は…… ワルキューレ、その槍でどうにかならないか」

「…… 槍の調子がおかしいべ。手から離れたらどうなるかオラにも分からん。一度きりなら無理やり投げてでもいいけども」

「そうなのか。その槍はいわば神の力の欠片だったな。互いに干渉を受けるのは仕方がないか」

しかしその時、わたしの目にワルキューレの横で震えている者が映った。
これだ！ この手しかない。

「さあ行くぞ！ 失敗はできない！ ソータ君、今だ！」

わたしは掛け声と共に、ソータ君にスカイハーモニー聖天調和の異能を閉じてもらう。
今、この場は誰しもの異能が展開できる状態になった。

「異能発現、ストームフレア暴炎熱威！」

「異能発動、バッドソリキューション腐解溶熟！」

ミカエルを左端、ベルゼバブを右端に布陣させ、さつそく異能を発現してもらう。どちらも範囲殲滅に最も適する強力な異能だ。

殺到してくる下級天使の群れを引き寄せただけ引き寄せ、一気に片付ける。焼き滅ぼし、あるいは溶かして。

こうして一旦は寄ってくる邪魔者を消滅させる。長くは保たないがそれでいい。

次にガブリエルが最大火力で放つ！

「異能発現、雷破撃壊！」
フオールンサンダー

それはあの厄介な盾をぶち壊すためのものだ。

雷撃が束になり、その威力で一気に盾を穿つ。……だがしかし、盾はそれでも傷付

かない！ 驚くべき頑丈さだ。それだけではなく、何と雷撃を撃ち返してきた！

受けた攻撃に対し、全て反射してよこす、これが盾の真骨頂なのか。

「異能発現、歪曲夢幻!!」
コンバージュョン

ただし、それもわたしの予測の範囲内だ。

ここでウリエルの異能を出してもらおう。反射してきた雷撃をいなしてもらおうためである。それらの光はまるでプリズムに吸い込まれるように曲げられる。

わたしもまた絶対切断アルティメットソートで盾を斬りにかかる…… ことはしない！

おそらくあの盾は絶対切断アルティメットソートでも通じない。わたしはそう判断している。先ほどガブ

リエルに攻撃してもらったのは神の油断を誘うためだ。

神に人間のような感情があるのなら、しめしめとほくそ笑んでいることだろうな。

「い、異能発現、ウエボンサブライ 武具現召！」

ここでラグエルに異能を使わせる！

さつき目に留まったラグエルこそ、戦いの行方を決める鍵になる！

わたしはそう確信しているのだ。

とたんに武器が発現…… いや武器とは呼べないだろうな。

ラグエルの周囲に白い光が広がり、直ぐに収縮してとある形を成していく。ラグエルの異能によって現れたのは何と数台のノートパソコンだった!!

「ガブリエルに言われて始めたV t u b e r、全てはこのためだったのか。いや考え過ぎだな」

ノートパソコンを素早く起動させながら、神が油断している隙にラグエルが飛ぶ。目的はそれを盾によって遮られない位置に持って行くことだ。

やはり非力なラグエルの行動など無視し、神は盾をわたしや皆の正面から動かすことはない。

用意ができれば、満を持してわたしは叫ぶ。
今こそ全ての思いを乗せる時だ。

「異能発現、絶対切断!!」

現れた白銀の刃はいつにも増して威力に満ちている。

わたしの前にあるノートパソコンに襲い掛かり、何の抵抗もなく真つ二つにする。

その瞬間だ！

ラグエルが持つ方のノートパソコンから絶対切断アルティメットソードの威力が出現した。そのまま盾に遮られることなく飛ぶ。

それが神の本体を切り裂いた！

何のことはない。わたしの絶対切断アルティメットソードの性質だ。

この異能は目に見える範囲で斬り飛ばす。

見えないものは斬れず、だが逆に言うと見える範囲なら斬れるのだ。今、目の前のノートパソコンに映っていたのは、ラグエルの持つ方のノートパソコンが撮っていた神の本体だった。

ならばわたしは画面越しに神を見て、絶対切断アルティメットソードを放ったというわけである。

これで神へやつと一撃を入れられた！

ラグエルはのけぞって泡を吹いているが、それはそれでいい。

最後の決め手は決まっている。

「今だワルキューレ！ あの傷口に槍を打ち込め！ まっまっしてると修復される」
「分かったべ。しかしどの辺りだべか」

確かに神の本体に傷を入れられた。ただし、そのどこへ槍を使えば有効になるのだろう。この巨木はあまりに大きく、槍は小さい。

神はその大きさそのものが防御と言える。狙いどころが分からないと何もできない。だが再びこういうチャンスは有り得ない。早くそれを考えなければ……

「異能発現、フローサイトアイ 明流覚視ツ!!」

するとサキちゃんという少女が異能を使っているではないか！

「でっかいラスボスっていうのは、核を見つけて倒すもんだわ！ それがファンタジーの王道でしょ。見えた!! そこに力の渦の中心、核がある！」

第三十三話 大いなる慈しみ

よく分からないことを言いながら、少女が指で指し示す！

その異能、フローサイトアイ 明流覚視には狙うべき神の核が見えているのだ。

なるほどな。

直接的打撃力ではないが、この異能もまた最後の最後には必ず必要なものだった。狙うべき核を見極めることができなければ、どうやっても倒すことはできなかつたろう。

この最後の戦い、皆の異能には何一つとして無駄なものはなく、全てがかみ合わなければいけないかつた。

神が焦って人間界を滅ぼしにかかったのも今では合点がいく。

さあ仕上げだ。

ワルキューレが大きく体をしならせながら、力いっぱい槍を打ち込んだ。しかも少女が示す方向へ向かって正確に。ここにきて、あのタウエルの時に少女が指す方へ攻撃したという予習が活きている。

「どえりゃあああ!!」

ワルキューレの手から槍が一直線に飛び、アルティメットソード絶対切断の作った裂け目に飛び込む。

我ら一行はこうして力の限り戦った。

その結果は間もなく出る。

初めに変化がある。さんざん邪魔してくれたあの盾に細く、しかしはつきりとヒビが入り、ついで粉々に割れ、音もなく消えていったではないか。

そして巨木のような神の本体が一瞬眩しいほどの光を放ってきた。

その光が治まると、どんどんと崩れつつある。

神に勝てたのか？

いや、そこまで簡単ではなかったのだ！

「ぬう、あれは…… 妾の見間違いか？ いや見間違いだと言ってくれ。まさか神からあれが出現してくるとはのー！」

「ガブリエル、残念だが見間違いではなさそうだぞ。なぜならわたしも同じものを見るからな」

「それにしても、まさかとしか言いようがない。あれこそ神話から伝わる悪の化身じゃ」
そう、あまりにも意外なもの、あつてはならないものを我らは目にしている！

神の巨木から抜けて現れたものがある。

それはまさに獣だったのだ！

長い首と巨体を持った竜のような獣である。その全身から禍々しい気配と凶悪な力を感じる。

我らはもちろん詳しいことは分からない。

しかしこの獣の名だけは知っている。最も邪悪な名として。

「リヴァイアサン…… なんてや。あの獣は神話の時代に神が討伐したはずやろ。どうして生きて、しかも神と一緒にいるんや。絶対おかしいやろ」

「それは分からない。しかしあの獣はあまりに強く、神でさえ殺し切ることができず、封じたという。ミカエル、分かっていることはあれが生きていて、また純粋な悪だということだ」

その獣は我ら一行の方を見据えると、一気に近付いて来ようとする。巨体に見合わず俊敏さもある。むろん我らに怒りを燃やし、自らの爪と牙で抹殺するつもりのようなのだ。

突進する巨大な獣を危ういところで躲した。猛烈な風に巻かれたが、なんとか避けられた。

獣は行き過ぎてから方向転換し、再び狙ってくる。

我らは冷や汗を流しながら身構えるが、すると獣は一瞬にして姿をかき消したではな

いか。

「しまった！ ハイパームーブ 超動迅速で来るぞ！」

獣もまた異能を使う！

たぶんアサエルに取り付いた時とは比べ物にならない威力で。

しかも巨体のまま使うのだからもはや対抗のしようもない。どうやって倒せばいいというのか……

ただし意外にも、獣は我らのところに到達する前に姿を現した。 ハイパームーブ 超動迅速がなぜか途中で終わったのだ。一撃で我らは全滅、少なくとも何人かはやられると覚悟していたのだが。

「あの恐竜みたいな動物だけど、核……というか心臓が乱れてるッ！」

「何だ?!」

ここでサキちゃんが意外なことを言ってきた。たぶん、 フロイサイトアイ 明流覚視でそんなことが見えただのだろう。

「ものすごく乱れて、何かおかしいわ！」

「だったら槍が心臓に届いていたということだべ。なら終わりにできるべき。天威還降、 ライトニングスピア 槍術閃突！」

槍はしつかり獣にダメージを与えていたのだ。しかもその心臓に。

そしてワルクキューレは槍を手持たないでも命じることができらしい。獣の体内に打ち込まれたあの槍が、ワルクキューレの声に応じて力を発散し出した。

するとやはり獣は我らと戦うどころではなく、その場でのたうち回り始めたではないか。

「よし、チャンスだ！ 異能発現、絶対切断！」

「異能発現、雷破撃壊！」

フオーレンサンダー
ストームフレア

「異能発現、暴炎熱威！」

バッドソリユーション

「異能発動、腐解溶熟！」

我らは声を併せ、ここぞとばかりに異能を使って攻撃を仕掛ける。

ある程度それは有効になっている。獣の皮膚は裂かれ、焼き、溶かされる。

ただし死にはしない。獣の体は強靱であり、傷をつけられても絶命させるほどの威力ではない。

獣を殺したのは、別のところからの力による。

崩れかけたあの巨木の上部に鋭い輝きが生じ、それが迸り、まるで光線のように獣に向かっていく。そして獣を真っ向から貫いたのだ。

何がどうなったのかは分からない。

しかし獣はその一撃を食らい、苦し気な咆哮を上げたかと思うと、やがて動きを止め、ゆっくりと倒れる。

もう動くことはない。禍々しい気配も消えている。

「もう終わった、のか…… しかし今の光は何だった……」

その疑問の答えは間もなく得られる。

優しさと労りのある声がこの場に響いてきたからだ。

—— 子供たちよ。よくやってくれました。心から礼を言います。あの悪しき竜はここに退治されました。

「この声は……」

神？ いや我らの知っている神の声は厳めしく、重々しい。有無を言わせぬ威圧で命令を伝えてくるものだ。こんなに柔らかな声ではない。

—— そしてお詫びしなくてはなりません。全てはわたくしのふがいなさから生じたことです。

お話ししましょう。太古の昔、わたくしとあの竜は激しく争いました。命をもてあそび、破壊を旨とする竜をそのままにしておくことはできません。

その戦いでわたくしは勝った、と思いましたが。竜を殺すことはできませんでしたが、封じることができたのです。そこまでは神話の通りです。

しかし、それは本当ではありませんでした。あの竜は悪辣にも封じられたフリをして、年月をかけて少しずつ抜け出し、何とわたくしに取り付いたのです。

「で、では、あなたが本当の神、そして今まで天界が神と思つて崇めていたのはあの獣だったと」

———
そうです。竜がわたくしのフリをしてあなたが天使を使役していたのです。わたくしはそれが分かつていても竜によって力を奪われ、一体化していたので何もできませんでした。人間界において文明が芽吹いてくると踏みにじり絶滅させることも……それで天使長が苦しんだことも…… 竜は遊びで残酷なことをしました。わたくしはそれを見ているしかできなかったのです。

あなたたち熾天使が疑問に思い、叛逆したことは、わたくしにとってどんなに喜びであつたことか。よく立ち上がってくれました。

「神よ、詫びを入れなくてはならないのはこちらだ。今まで事情を察することもなく、誤

解し、敵としてしまった。本当はそんなにも慈しみ深く、善なる神なのに」

—— いえ、それによつてあなたたちはここまで戦いに來たのですから。そして期待以上のことをやつてのけました。しかもあの槍を使つてくれましたね。あれはわたくしの力を分け与え、いつか人間界に下賜するために用意したものでした。

それを打ち込まれた竜は苦しみ、わたくしから離れたのです。

ならば方法はあります。わたくしは残つた命を全て力に変え、弱つていた竜を撃ち、やつと滅ぼすことができました。

「命を力に…… まさか神は、そんな」

—— これでよいのです。わたくしはここで消えます。竜との決着をつけられて本当に嬉しく思います。ありがとう、子供たち。

最終前話 微笑んでサヨナラを

我らはやつと真相を知ることができた。神はやはり限りなく慈愛の神だったのだ。それはとても嬉しいことだ。

よく考えれば天使たちを生み出した神が悪であれば、天使もまた悪であり、そのやり方に疑問を持つこともなかったのに違いはない。自己矛盾になってしまふ。ともあれ悪いのはあの狡猾な竜だった。

それも全て終わった。これで我らはやつと悲願を達成したのだ。

引き換えに神である巨木、いや愛の大樹は命を失い、加速度的に崩壊しつつある。

後はこの崩壊に巻き込まれないうちに急ぎ逃げなくては。熾天使はともかくソータ君やサキちゃんもいるのだから、庇いつつそれを行わなくてはならない。

「まずい、早く退避だー！」

しかしその崩壊は神殿全体を揺るがすもので、想定以上に早かった。落下物が危険な速度で迫り、まるでバラまかれた砲弾のようだ。これでは間に合わない！

「異能発動、クラッシュユバワー 打力碎塵！」

その時、もうもうとした煙の中から応援が駆けつけてきた。

動けるまで回復したのか、マルコキアスが来て落下物をまとめて吹き飛ばしてくれ
る。

後ろにはアシユタロトや姉様がふらつきながらも続いている。そして更にその後方
を見て驚いた！

アサエル、ハムエル、タウエル、ヨキエル…… 天界の上級天使たちが揃っている。

「天界の誇りにかけて、人間を助ける！」

そしてソータ君やサキちゃんを抱えられ、ついでに一番弱そうなラグエルもまた救い
出される。

やっと皆で神殿の外へ出ることができた。

そこから崩壊していく様子を眺める。

まるで夢のようだ。むしろ我らも感慨深い、一番複雑な感情を持つのはアサエルら
上級天使たちだろう。

その命令を聞き、忠誠心をもって仕えていたのが神ではなく悪逆の竜だったのだから。

それを思いながら見つめているのだ。永久不滅、天界の誉れと信じ切っていた神殿が崩れゆく、その姿と重ね合わせて。

「何という皮肉か…… 神殿は聖所ではなく悪の巣窟だった」
そのアサエルの言葉が全てを表している。

ともあれそういうことも過去になった。

後は肩を叩き合って歓声をあげ、大団円になるはずだった。

だが…… 物事はここで終わらなかったのだ！

神殿が崩れるのはいい。その後、どんどん陥没していくではないか。

どこまで崩壊が進むのだろう。

下へ、深く深く落ち込んでいく。その範囲が神殿の周辺から広がっていき、もはや天界の半分にまで及びそうだ。

「むう、これはどういうことだ？ 神殿が神という支えを失って崩れるのは分かるが、これほど下に落ち込むとは、尋常ではない……」

しばし呆然としてしまう。

「ボクは思うんだけど、神は最後の力であれほどのことをやってのけたね。だったら竜

だって素直に死んだのかな？　生き延びてるとは言わないけど、何か仕掛けてもおかしくないよね」

「そう考えたら、ウリエル、そうかもしれない。だが何をしたんだ」

意外なことにその答えはアサエルが持っていた。

「たぶん……恐ろしい事態になったぞ。おそらく竜とやらは人間界を滅ぼす準備を始めていたんだ。たしか『今度は地を揺るがして滅ぼす』、そう言っていた気がする。仕返しをするため、ここで一気に早めたのかもしれない」

「ではアサエル、全地を崩すため、下に深く……」

「そうだ。このままでは人間界が揺れ、更地になるぞ！　もちろん今いる人間たちは皆死ぬ。とにかく崩壊を止め、安定させなければ」

くう、ここにきて竜の最後の仕返しとは……

やっと人間界が繰り返し滅ぼされるのを防いだはずだったのに。今の人間界だけは滅ぼそうというのか。そんなことをさせはしない！

食い止めるためにはどうすればいいのか……　どうやったら……

「ラファエル、妾が思うに、地を支える方法がたった一つあるう。もう想像がついておるのではないか？」

「ガブリエル、それはもしかすると……　我らの神聖力を注ぎ、地を固めるということか

？ それは考えなくもないが、とうてい足りるとは思われない。こんなに大規模なんだぞ」

「皆じゃ。皆でやれば可能性はゼロではない。とすればやらないという法はなからう」「そうだろうね。ボクもガブリエルの言う通りだと思うよ」「せやな。うちら、初めてづくしの旅やったで。最後まで初めてのことと締める、おもしろいやないか」

「ウリエル…… ミカエル…… そうだな。分かった」

わたしの心は決まった。

この熾天使四人、身にある全ての神聖力を放出し、地を固めよう。

竜の仕返しを成就させはしない。

人間界のために戦ってきた我らに最もふさわしいといえる終わり方ではないか？

思えばなんと長い旅路だったことか。

我ら四人の熾天使はがっちりと協力し合い、ここまで歩んできた。

面白いことは沢山あった。最近のV t u b e rも…… その一つかもしれないな。

旅路はこれで終わる。今、この四人が共に逝くなら何も寂しいことはない。

その時、思わぬ声がかかった。

「だけど四人で足りるかしら〜 それに姉をおいてくなんて水臭いわよ〜」

「姉様？ まさか、いやダメだ!! 姉様にはこれからの天界を率いてもらわねば! それに魔界だつて姉様が必要だろう」

「天界にはアサエルたち、魔界にはアシユタロトたちがいれば大丈夫よ〜 それに神聖力は一番持つてるし〜」

「ここで姉様までが……」

確かに姉様は十二枚の羽を持つ天使長、その膨大な神聖力を加えてもらえば成功の可能性は高まるのだが……

「いやその前に私だ。こんな事態を招いたのは誰でもなく私の責任なのだぞ。率先して竜に仕えてしまった罰を受けなければならん。ラファエル、償いだ。微力ながら私が共に赴こう」

「ア、アサエル…… お前のせいではないのに、相変わらず責任感が強いな」

「だったら一緒に行く。何といつても熾天使どもと一番多く戦っているからな。人一倍責任を取らねば帳尻を合わせられん」

「ハムエルまで……」

「さ、最後まで付き合うよ。今度は逃げないから!」

「ラグエル大丈夫か。お前は足が震えてるぞ」
姉様どころかアサエルやハムエル、ラグエル、その他にも大勢の天使が同行を願っていた。

本当なら殴つても止めさせたいのだが、少しでも神聖力の多い方が成功の確率が高くなるのも事実だからどうしようもない。

とても辛く、とても嬉しい。

ここで決まった。

天使たちは消滅し、その身をもって人間界を守る。

赴く前に、挨拶をすべき者たちがいる。

代表してミカエルにそれをやってもらった。

「ソータ君、サキちゃん、あんがとな。ここまで付き合ってもらって感謝しかないわ。ほな、今から人間界を救ってくるで。片道やけどな」

「そ、そんな！ ミカミカ！ 人間界のために天使が犠牲つて…… どうして」

「ソータ君、学校はおもろかったなあ。ラファエルもそう思うとるで。最後の最後にええ体験やったわ。みんなソータ君のおかげや」

「だったらまた来ればいいのよ……」

「優しいなあサキちゃんも。けどダメや。もう一つ言うと、これからは天界の手を借りずに、人間界は人間界の力でやっていくことになるのや。それがほんまの姿かもしれんな」

「……」

最終話

そして僕らは

「まあそんな難しいことはともかく、二人は仲良うな。ほな、これでほんまにさいならや」

ミカエルはいつもの飄々とした言い方でサヨナラを告げていく。

もちろん言葉ほど平気という感じではなく、まさに万感が溢れている。

しかし、これで別れの挨拶は終わりだ。

いつまでも感傷に浸ることはできず、後は実行あるのみである。名残り惜しそうな少年少女を置き、天使たちは次々と神殿跡の陥没に飛び込む。

その身を犠牲にして、地の崩壊を防ぐために。

やがて地の震えは止まった。

天使たちによって人間界の危機は去ったのだ。

僕は一週間ぶりに人間界、というか元の場所に帰った。サキちゃんの方は三日ぶりとなる。

ああ、本当に目まぐるしくいろんなことがあったが、期間としてはそんなものだった。むろん周りから騒がれたのは当たり前だ。おまけに二人は駆け落ちか、なんて言われたが事実はちよつと違う。説明は難しかったのだが四苦八苦しているうちに何とかなった。

そのまま夏休みに突入してしまったのも大きい。

あれは本当に体験したことだったんだろうか……この僕が魔界での戦いに巻き込まれ、天界でも戦つたなんて。しかも神や竜とかを相手に。

まるで重度の中二病患者の夢である。

誰に話しても荒唐無稽としか思われまいだろう、天使たちの戦記だ。

あまりに个性的で、ちよつぱり間抜けで、愛すべき天使たちの。

いや、夢ではないという証拠がある。

僕の異能聖スカイハート天調和は自分では分かりようもないが、サキちゃんの明流覚視フロースイトアイは確かに存在する。もちろん、普段はそれを使わない。

そして僕とサキちゃんはミカミカに言われるまでもなく仲良くなった！ 自然な形でカップルになったんだ。

今ではサキちゃんも異能のオンオフができるようになったので、僕といることはその意味で必要なくなつた。しかし、元々どちらも憎からず思つていたから……今度のことはきつかけに過ぎない。

ちよつぱり照れるけど、それはたぶんいいことだと思う。

そしてある日のこと、僕は気付いた。

「あれ？ おかしいな。エンジンエルズが更新してる……」

僕はそれをしばらく見ていなかった。

自分の命をなげうって人の世を守つた天使たちをどうしても思い出してしまふからだ。わずかな期間だったけどあのユニーク過ぎる天使たちとの邂逅はとても大切な思い出であり、決して僕は受難なんて思つてない。

けれど、その終わりは永遠の決別だった。

それが悲しくて、思い出す度に僕は泣いてしまう。ミカミカに似たあのフィギュアも押入れの深くにしまい込んでいる。

だが今、意を決してV t u b e rエンジンエルズを見てみたら、更新していた！ しかも最近である。

これは何だろう？ 不可解としか言いようがない。

そして夏休みが明けた。

「今日からこのクラスに転入生が二人入ります。では自己紹介から」

最初の時間に担任であるコトカ先生がそう言った。

こんな時期としては珍しいことに転校生が二人も入ってくるらしい。

クラスのざわめきの中、そこにいたのは…… 僕は驚愕するしかない。

「天野美香や！ みんな、よろしゅうな！ ミカミカって呼んでや！」

「双子の天野エルだ。どっちかが姉だ」

馬鹿な!!

双子設定か!? 何で? 何でそうした? 全っ然似てないぞ!

しかも雑かよ!

いやツツコミどころはそこではない!

ど、どうしてまだミカミカとラファエルが生きてる…… そしてなぜこの中学の転校

生になってるんだ!?

「そーいや、文化祭で天使の劇をやるって聞いたで。うちも是非交せてもらいたいわあ。

どんなスタントでもやれるし、なんなら飛んでもええで」

「わたしは皆を斬つてしまわないように剣道部にだけは入るなと言われた。だからマンガ研究会にでも入る所存だ。実はペンでも斬れるのだが」

いやせて普通のことをしゃべろうよ！

おまけにペンは剣より強いつて、そういう、絶対切断的アルティメットな意味じゃないだろ！

僕は休み時間にこの二人を強引に連れ出した。

転校生の美少女を、一応周りのクラスメートからリア充と思われる僕がいきなり連れ出すのだから…… 誤解されなければいいが。

特にミカミカは薄紫髪で無駄に可愛いからなあ。中身はさておいて。

ラファエルもクラスのリタダどものところに行こうとしていたが、そこを中断させた。たぶん、また天界の話でもするつもりだったのだろうな。こっちは仏頂面だが一応長身美女なので困ったものだ。

とにかく僕としては早く真相を聞き出したい。サキちゃんもまた同じことを思ったらしく、慌てて僕の後を追ってきている。

「どうしたんだよ二人とも！ あの時、人間界を助けるために死んだんじゃ」

「ソータ君、そのつもりで飛び込んだんやけど、実際は必要なかったんや。あの竜は地の底から来たという伝説がある。元からそれらしい空洞があったせいで揺れが大きく見えただけで、まだむちやくちや何かしたというわけではなかったんや。せやから神聖力を半分も使うたら治めるのに足りたんやで」

「そうなんだ！ 良かった…… じゃあみんなまだ生きてるんだね」

「ああそうや。そんでな、天界はけっこう崩れてしもたが、残りをアサエルたちが治めとる。ルシファアの姉様はとりあえず魔界に戻ることにした。そうそう、ワルキューレは魔界の探検隊長になったで。そんでな、こちらはとりあえず暇になったつちゆうわけや。ガブリエルは一生懸命 V t u b e r やつてて、ウリエルやラグエルが悲鳴上げながらつきあつとるけどな。そんでも人氣は相変わらず中くらい、おもしろいやろ」

なるほど…… 僕はミカミカとラファエルの二人がここに来た理由が分かってきた。

「ごちやごちや言ってるが、要するに暇だから学校生活を送りにきたわけか。」

「で、でもよく転校生になれたね。そしていつまでいるの？」

「補足してわたしが説明するが、天界にはヨキエルという偽装のスペシャリストがいるのだ。それに任せれば書類や家はなんとかなる。そしていつまでということだが……」

正直いつまででもいい。天使には寿命というものがないのだ。正確には神殿による

神聖力の補充がないのでいずれは朽ちるかもしれないが、わたしもミカエルも、たぶん千年や二千年は大丈夫だ」

「あ、そうなんだ……」

「せやからな、ソータ君。君とサキちゃんの子供も孫も、よく見守ったるで。君の武勇伝をずっと聞かせたる。ええやろ？」

「こ、子供って!? 僕とサキちゃんの、いやそんな」

「ご先祖様は、今まさに矢で射られようとしていた哀れな美少女、いや美幼女ベルゼバブを認めるやいなや『僕が必ず救って見せる』と一言言い放ち、魔界城からすつくと立ちあがる、その姿はまさに英雄」

「その話!? いやダメだって」

「ウリエルから聞いたで。少し盛ったけどほんまのことやん」

「ふくん。ソータ君、その話、わたし聞いてないんだけど」

「え、あ、いや、サキちゃん……」

何を言ってくれてるんだこの天使たちは!

もう本当に驚かされっぱなしだ。予告なしに転入して来たのも僕を驚かせるためなのだろう。だがせめて学校にいる時は僕がイニシアチブを取り、変なことにならないよ

うにしなれば。

もちろん、スカイハイモニ聖天調和によって下手に異能を使わせたりしないぞ。

だが、今度は天使二人の方が驚くことになる！

わずか一か月後、このクラスに新しい転校生が入ってきたことよって。

「マルちゃんデーす！ みんな、よろしくね！ 好きなものわあ、ちよつぴり甘めのフルーツミルクでえ、嫌いなのは生意気天使と脳筋天使！」

「な、何だと！ 馬鹿な！ どうしてマルコキ……」

「天野エルさんもよろしく！ それ以上言っちゃうとお、クラッシュユバワ打力碎塵☆」

その二人だけではなく、僕やサキちゃんも嘖然としてしまう。

この二年四組はいつたいたいどうなってしまうんだろう。凄いことになる未来しか見えない。

面白いことだけは確かだけど、それでいいのか？

ああ、天使たちの物語は、まだまだ終わりそうもない。

|
完
|